

そ、人は思ひためれ、など、いひあつかふは、聞らんか。六月に、人の八講し玉ひし所に、人々あつまりてきくに、この藏人になれるむこの、れうのうへの袴、すはうがされ、くるはんびなど、いみしうあざやかにて、わすれにし人の車の、さみのをに、はんびのを、ひきかけつばかりにて、あたりしを、いかに見らんさ、車の人々も、しりたるかぎりは、いさほしがりしを、こそ人ども、つれなくあたりし物哉など、後にもいひき。猶男は、物のい

如何でかして斯る婿に、悪き事のあれかしと思ひたるに、案に違ひて藏人になれる事の恨めしさよなど言ひ扱ふは、其の婿の聞くらんと覺えて淺まし。さて六月に、八講の催ある所に、人々多く集りて講談を聞くに、此の藏人になれる婿も往きけるが、綾の表袴に、蘇芳染の下襲、黒の半臂を着たる姿の、いみじう鮮麗なる装束して、彼の見捨てたる女の車の、鴟の尾とて、轆のやうに車の後に突き出でたる所に、半臂の緒を引き懸けんばかりに近く寄り居たりしを、其の女の如何に思ふらんよと推し量られて、車上の人々も、知りた

さほしき、人の思はん事は、しらぬなめり。

世の中に、猶いさ心うき物は、人にくまれん事こそあるべけれ。たれてふ物ぐるひか、われ人にさ思はれんさは思はん。されどしぜんに、宮づかへ所にも、親はらからの中にて、思はるゝおもはれぬがあるぞ、いさ佗しきやこよき人の御事は更也、げすなごのほども、親なごのかなしうする

る限りは、皆々氣の毒に思ひなしたるが、他の人々も、如何にも情なき婿殿かなど、後にも評判し合ひたり元來男は、物の情も人の心も、察せざる者と見えたり。人に憎まるゝ事ほど、世の中に心憂きものはなかるべし。されば如何なる狂人か、人に憎まれん事を願ふ者やあるべき。されど宮仕所にて、亦た親兄弟の間柄にても、自から親疎厚薄の別ありて、善く思はるゝもあり、悪く思はるゝもあるこそ、最と佗しけれ。高貴の人達は申すも更なり、下賤の者に至るまで、親兄弟などに愛せらるゝ者は、他人も亦

子は、めだち見たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるは、こそわり、いかゞ思はざらんさおぼゆ。こそなる事なきは、又これをかなしと思ふらんは親なればぞかしと哀也。おやにも君にも、すべてうちかたらふ人にも、人に思はれんばかり、めでたき事はあらず。

た目に立て、見て、善き人なりと撫り勞ふものなり。容儀言行共に立派なるは、親として之を愛しく思ふは道理なり。されば言行の宜しからざるは、又た之を悲しと思ふは、親なればこそ、他人は顧る者もなければ。尤も臣として君に、子として親に、人として朋友に、愛せらるゝほど、芽出たきことはなかるべし。男はご怪しげなる心の者は、最と稀なりとこそ思はるれ。容貌美麗なる女を捨て、物好きにも醜き女を、妻に持つも怪しむべし。禁中なごに出入する男、又は家の子などは、多くの女の中にも、殊に見目善き者を、妻に

こ、家の子などは、あるが中に、よからんをこそば、えりて思ひ給はめ。及ふまじからんきはなだに、めでたしと思はんを、しぬばかりも、おもひかくれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人なごをも、よしとさきくをこそば、いかでともおもふなれ。かつ女のめにも、わろしと思ふを思ふはかななる事にかあらん。かたぢいさよ、心もをしき人の、手もようきき、歌をもあはれにやみて、おこせなごするを、返事は、さかしらにうちする物から、よりつかず。

擇り取らんとこそ思へ。たとへ身分不相應の高貴の娘にて、及ばぬ縁談と思ふとも、美人なりと見定めたるからは、及ばぬ迄も、死を賭して思ひ懸くべし。人の娘の深間に隠れて、容易く見るを得ざる者にて、美人なりとの評判を聞かば、如何で我が妻に貰ひ受けばやと、思ふこそ至當なれ。さるるを女の目からも、醜しと思ふ女に、思を懸くるなどは、如何なる事にや、其の心底も察し兼ねて怪し。才色双美にして、筆跡も芽出たく、歌も善く詠みて送り来るを、男の返事は極めて不愛想にて、其の女に寄り付きませぬものから、其の見捨

らうたげに打なきてゐたる
を見捨て、いきなごするは、
あさましう、おほやけはら
だちてけんぞくの心ちも、
心うく見ゆべけれど、身の
うへにては、露心くるしき
を思ひしらぬよ。

萬よろづの事よりも情ある事は、
男はさら也、女もこそめて
たくおほゆれ。なげの詞な
れど、せちに心にふかくい
られど、いさほしき事をい
さほむとも、あはれなるを
ば、げにいかにも思ふらん

てられたる女の、痛ましくも打ち泣き居るを
顧みもせで、外の女に通ふなどは、實に淺ま
しき限りにて、他人さへ腹立つものを、況し
て見捨てられたる女の、親兄弟親族などの人
々の心の中は、物憂きこと如何ばかりならん
と察せらるゝに、其の男の身の上にては、露
ほども心苦き思をせざるこそ、面憎くけれ。
物の哀れを知りて、慈悲深く人情に厚きは、男
は更なり、女とても芽出たきものなり。さし
て思ひ入れたるにはあらで、何の氣もなく言
ひ出でたる詞にて、切に心に深く思ひなした
るにはあらずとも、氣の毒なる事を同情し、

ざいひけるを、つたへて聞
たるは、さしむかひていふ
よりもうれし。いかで此人
に、思ひしりけりとも、見
えにしがなさ、つねにこそ
おほゆれ。必思ふべき人、
さふべき人は、さるべき事
なれば、さりわかれしもせ
ず。さもあるまじき人の、
さしいらへを、心やすく
したるは、うれしきわざ也。
いさやすき事なれど、更に
えあらぬ事ぞかし。大かた
心よき人の、まごごにかご
なからぬは、男も女も、あ
りがたき事なめり。又さる
人も、おほかるべし。

哀れなる事あれば、如何に悲しく思ひ給ふら
んなど、陰言にも情ある詞を傳へ聞きたるは、
差し向にて聞くよりも嬉しく、此の嬉しき思
を、其の情ある人に、如何にしてか通じたき
ものなりとこそ覺ゆれ。固より思ふべき縁故
の人、訪ふべき間柄の人は、言ふ迄もなき事
なれど、さる縁故もなき人の、我に情ある詞
を陰言するなどは、實に嬉しき業なり。尤も
同情を表するは、最と容易き事にて、而かも
出来がたき業ぞかし。大方心よき人の、圓滿
恬快なるは、男も女も共に結構なる事にて、
世には斯る人も、決して尠きはあらざるべし。

人のうへいふを、腹だつ人こそ、いさわりなけれ。いかでかはあらん、我身をさしおきて、さばかりもどかしく、いはまほしき物やはある。されど、けしからぬやうにもあり、又おのづから聞つけて、うらみもぞする、あひなし。又思ひはなつまじきあたりは、いさほしなご思ひさけば、ねんじていはぬをや。さだになくは、うちいで、わらひもしつべし。

坐興なごに、人の上を噂する事もあるを、そは僻事なりとて腹立つ人こそ、譯の別からぬ次第なれ。誰か我身を顧みずして、人の身の上のみを批評するを好む者は、如何でか之れあるべき。我身にも悪き事あるものを、人の非を擧げて悦ぶは、人情にあらざるは言ふ迄もなければ、唯だ其の場合によりて、坐興までに噂するに過ぎざるなり。されど坐興とは言ひながら、人の非を擧ぐるは、宜しき事にはあらず。又た之を聞き傳へなば、其の人の恨みもすべけれ。或は思ひ放ちて見捨てがたき人の事は、たとひ悪き舉動ありとて、

人のかほに、さりわきてよしと見ゆる所はたびこに
見れども、あなをかしめづらしとこそ覺ゆれ。ゑなごあまたたび見れば、めもた

人は何れ完全無缺の者ならねば、彼是れ批評するも氣の毒なりと思ひ解きては、噂に誹らんことも念じ耐へて、非難もせざれど、唯だ何の縁故もなく、思ひ放つまじき譯もなき人の上は、坐興にも言ひ出で、笑ひなどもすることあり。尤も悪意ありて言ふにもあらねば、事々しく答めて、腹立つ程にも及ぶまじき事ならずや。
人の顔面に、取り分けて善しと見る所ありて、たとへば眼元涼しく鼻筋通り、口元に愛嬌ありと言ふやうなる特別の美點は、幾度見るとも飽かざるのみか、見る毎に珍らしく覺ゆれ

ふすかし。ちかうたてる屏風びやうぶのふなごは、いさめでたけれど、見もやられず。人のかたちは、なかしうこそあれ。にくげなるでうごの中にも、一つよき所のまもらるゝよ。見にくきも、さこそばあらめさ、思ふこそわびしけれ。

ど、繪ゑに書きたる美人びじんは、幾度いくたひも見れば、終つひには目めも向けずなりぬべし。されば己おのが側近そばぢかく立てる屏風べうぶの繪ゑなどは、立派りっぱなるものにて、常つねに見馴みなれたるものから、珍めづらしとも思おもはへず、従したがつて見みも遣やらぬものなり。之これを要やうするに、人ひとの容貌かたちは、美うつくしくこそありたけれ。尤もつとも善よからぬ諸道具しよどうぐの中なかにも、何なにか一廉ひとかどの役やくに立たち、見み悪にくき物ものにも、一ヶ所しよは見易みやすき点てんのあると同おなじく、人ひとの容貌かたちにも、醜みにくきが中なかに、何處どこか一所ひとところの取とり所ところはあるものなりなど思おもひ運めぐらすは、己おのが醜みにくきにつけての負まけ惜をしみなるこそ佐わしけれ。

【百卅三】 うれしき物
まだ見ぬ物がたりのおほかる。又一つを見て、いみしうゆかしうおぼゆるものごたりの、二見ふたつみつけたる。心おこりするやうもありかし。人のやりすてたる文ぶんを見るに、おなじつゞき、あまた見つけたる。いかならん夢ゆめを見て、おそろしきむねつふるゝに、こゝにもあらず、あはせなごしたる、いさうれし。よき人の御前ごぜんに、人々あまたさふらふ折

【注意】 原文の「世の中に猶いさ心うきものは」より以下五節は、異本には見えざれども、季吟の暗抄あんせうに依りて、其のまゝに譯し置けり。
【百卅三】 うれしきもの
草紙くさしを縮ひもときて讀よむに、従これま来まで未みだ見聞みきかぬ物語ものがたりの多おほきは嬉うれしきものなり。さては一の卷まきを見みて、いみじう面白おもしろく床ゆかしきまゝに、二の卷まきも見みたしと思おもへる折柄せりから、そを見付みつけ出いだしたるは嬉うれし。尤もつとも豫期よきに違たがひて、二の卷まきは案外あんぐわいに面白おもしろからぬもなきにあらず。人ひとの破やぶり捨すてたる手紙てがみを見るに、同おなじ續つづきを多おほく見付みつけて、前ぜん後の詞ことばの連絡れんらくを得えたるも嬉うれしく、如何いかなる異い變へんかあらんと、氣きに懸かる程ほどの恐おそろしき夢ゆめを見

に、昔ありける事にもあれ、今きこしめし、世にいひけることにもあれ。かたらせ給ふを、我に御覽じあはせてのたまはせ、いひきかせ給へる、いさうれし。さほき所はさら也、おなじ都のうちながら、身にやんごさなく思ふ人の、なやむをききて、いかにくさ、おぼつかなく歎くに、おこたりたるせうそこ、えたるもうれし。思ふ人の、人にもほめられ、やんごさなき人などの、口をしからぬ物に、おぼしの給ふ物のをり。もしは、人さいひかばした

て、胸を騒がしつるに、凶事にはあらずこの占を合せ得たるは、最と嬉し。貴人の御前に、多くの人々侍へる折柄、其の貴人の昔ありける事にも、亦た今聞かれし事にも、或は世間に噂する事にもあれ、物語らせ給ふに、其の許多の人の中にて、特に我に目を見合はせて、言ひ聞かせ給へるは、いと嬉しきものなり。遠方は勿論の事、同じ都に住みながら、我身の爲めには大切なる人の、病み煩ふを聞きては、容態如何ならんかと、痛心に堪へざるを、即がて平癒の由を、文にて知らせ寄來されたるは嬉し。或は我が思ふ人の、世

る哥の、聞えてほめられ、うちきゝなごに、ほめらるゝ。みづからのうへには、まだしらぬ事なれど、なほおもひやらるゝよ。いたううちさけたらぬ人の、いひたる古き事のしらぬを、聞出たるもうれし。後に、物のなかなごにて、見つけたるはをかしく、たゞ是にこそありけれ、さ、かのいひたりし人ぞをかしく、みちの國がみ、白きしきし、たゞのも、しろうきよきはえたるもうれし。はづかしき人の、哥のまさすゑさひたるに、ふさおぼえたる、わ

の人に褒められ、又た高貴の人より、才徳ありて頼もしき人物なりと思召されたるなご。若くは人と言ひ交はしたる歌の、貴人に聞えて褒められ、聞書などの中に書き入れられたるなど、己れには未だ左様の場合もなく、嬉しさの程も知らねど、定めて嬉しかるべしと思ひ遣らるゝよ。或は甚く晴がましき人の、古き物語を言ひ出されたるを、己れ知らざりけるに、それを聞き出して知りたるも嬉し。されど後に、書物の中などにて、其の古き事を見付けたるは可笑しく、唯だ是れ程の事なりしよ、彼の人も、此の書を見てこそ言はれけ

れながらうれし。つれには
おぼゆる事も、又人のさふ
には、きよく忘れて、やみ
ぬる折ぞおほかる。こみに
ものもさむるに、見出た
る。只今見るべき文など
を、もさめうしなひて、萬
の物を、かへすく見たる
に、さがし出たる、いさう
れし。」

めど、思ふも亦た可笑し。或は陸奥にて産す
る檀紙。白き色紙。色紙ならずとも、白き紙
の清く映えたるは嬉し。耻かしと思へる人に、
古歌の上の句、若くは下の句を問はれたるに、
忘れもせで不圖考へ出せるは、我ながら功名
手柄なりと覺えて嬉し。尤も常には善く知り
たる歌も、人に問はる、時は、奇妙にも考へ
出し得ずして、其のまゝ止みぬる場合も多き
ものなり。急に物の有所を尋ぬるに、折善く
も直ぐ見出したる。或は唯今必要に迫りて、
探し出さんとする書物の、何處に紛れ込みた
るにや、求め失ひて尋ね出さねば、萬の物を

物あはせ、何くれさ、いご
む事にかちたる、いかでか、
うれしからざらん。」

又いみしう我はと思ひて、
したりがほなる人、たばか
りえたる、女ごちよりも、
男はまさりてうれし。」

打ち返ししく見たるに、不圖探し當てたるな
ご、眞に嬉しきものなり。
物合せとて、歌合、繪合、貝合など、その他
何事によらず、勝負を争ふ事に勝ちたるは、
如何でか嬉しからざらん。

〔注意〕 右の「物合せ」の一節は、異本には「物の折に
衣うたはせて、いかならんと思ふに、きよらに
てえたる」さあり

又た我ほどの者は、世に多くあるまじと、い
みじう賢げなる人を、戯れに騙かり得たるは、
女同志よりも、男をこそは、一層嬉しきもの
なり。

〔注意〕 右の一節は、異本には「又多かる物のけが、

是が黨は、必せんすらんご、つれに心つかひせらるゝもをかしきに、いさつれなく、何とも思ひたらぬやうにて、たゆめ過すもをかし。にくきものゝ、あしきめ見るも、つみばうらんと思ひながらうれし。さしぐしむすばせて、をかしげなるも又うれし。思ふ人は、我身よりもまさりてうれし。

日比月比しるき事ありてなやみわたるが、おこたりぬるもうれし。さあり

斯く騙かれたる人の友達にて、必ず己が味方して、此の返報を爲し呉るゝならんご、常に心づかひせらるゝも可笑しきに、其の頼にする友達は、いと情なくて、味方などする氣色もなく、一向に何とも思はざるやうにて、怠り過すも可笑し。又た憎き人の不幸災難に遇へるを悦ぶは、罪なる事と思ひながらも、氣味善しとて嬉し。注文したる指櫛の、思ふに優りて、善く出来上りたるも嬉し。尤も思ふ人の爲めに、作らせたる指櫛の上出来なるは、

御前に、人々所もなくゐたるに、今のほりたれば、すこしほき柱のもさなごにゐたるを、御らんじつけて、こちこさ仰られたれば、道あけて、近くめし入たるこそうれしけれ。御前に、人々あまた物仰らるゝついでなごにも、世の中のはらだゝしう、むつかしう、かた時あるべき心ちもせで、いづちもく、いきうせなばやさ思ふに、たゞの紙の、いさしろうきよらなる、よき筆、白きしきし、みちのく

我身の物よりも更に嬉し。中宮の御前に、女房達など所も無き程多く侍ひ居るに、己れ遅参したれば、坐る所もなきま、少し遠く離れたる柱の許に居たるを、中宮の御覽じ付けられて、是へ参れと仰せられたれば、人々皆道を開けて、御側近く召し入れられたるこそ嬉しけれ。さても御前に多くの人々の侍りて、御物語あらせらるゝ折なごにも、己れ申し上ぐるやうは、世の中の事々、何となく腹立たしう厭はしく、片時も憂き世に住まん心地せねば、都を離れて何地へなりとも、遁世脱俗の身になりたく思ひ侍べ

に紙、など、えつれば、かくても、しばしありぬべかりけりさなん、おほえ侍る。又かうらいべりのたみの、むしろあをうこまかに、へりのもんあざやかに、くろうしろう見えたる、引ひろげて見れば、何か、猶さらに此世は、え思ひはなつまじさ、命さへをしくなんなるさ申せば、いみしくはかなき事も、慰むなるかな、おぼすて山の月は、いかなる人のみるにかさ、わらばせ給ふのさふらふ人も、いみしくやすきそくさいの、いのりのりなさいふ。

れど、陸奥紙或は色紙などならで、唯の紙にても、最と白う清らなる、殊に善き筆、白き色紙、陸奥紙などを、人より恵まるゝに付けても、禁中ならばこそと思ふまゝに、先づまづ暫時なりとも、遁世を延ばし見んと、思ひ返し侍るなり。或は立派なる高麗縁の疊の表の、青々として細かに織られたるが、其の縁の白地に、黒き紋の鮮なるを、敷き詰められたる宮中の尊き有様を見るに付けても、憂き事は何程かあらん、斯る禁中にありて御前に侍ふからは、何ぞか此の世を思ひ絶つ事の出來べきや、命さへ惜しくなりて、永く憂世に

さてのちにはごへて、すゝなる事を思ひて、里にある比、めでたき紙を二十、つゝみにつゝみて、給はせたり。仰事には、さくまゐれなごのたまはせて、是はきこしめしおきたる事ありしかばなん、わろかめれば、壽命経も、えかくまじげにこそ、仰られたる、いさをかし。むげに思ひ忘たりつる事を、おぼしおかせ給へりけるは、なほたゞ人にてだにをかし。ましておろかならぬ事にぞあるや。心もみだれて、けいすべきかたもなければ、たゞ、

住ま欲しくなり侍ると申し上ぐれば、中宮には、紙筆さては疊などの墓なき物も、いみじく心を慰むるものかな、世には姨捨山の月を見てさへ、「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠みて、心を慰めかねたる者もあるに、紙筆にて慰むとならば、月を見る迄もなければ、月を見て慰めんは、如何なる人なるべきやと仰せられて、甚く笑はせ給ひ、御前に侍ふ人々も、少納言は、紙疊などの容易き事にて、延命息災の祈念になり給ふものかなと言ひけるが、其の後程経て、讒言などする者のあるを遺憾に思ふまゝに、

かけまくもかしこきかみのしるしにはつるのよはひになりぬべきかな
あまりにやま、けいせさせ給へさて、まゐらせつ。大はん所のさうしぞ、御使には來たる。あなきひさへなごぞ、さらせて。まことに此かみを、さうしにつくりて、もてさばぐに、むつかしき事も、まざるゝ心ちして、をかしう心のうちもおぼゆ。二月ばかり有て、あかぎぬきたる男、たゞみをもてきて、これといふ。あれは誰ぞ、あらはなりなご、物はしたなういへば、

暫時御前を下りて、里居したる頃、中宮よりの御贈物に、いと美しき紙二十帖を、裏に包みて賜はりたるが、其の仰せには、疾く我が側に參れよかし、此の紙は、曾て延命息災の祈念なるを聞きたる事あれば取らすなり、されど望の如き白う清らならねば、延命の祈禱經なる壽命經も書き得ずして、憂き心を慰むに足るまじと仰せられたるこそ、最と有り難けれ。己れ全く忘れ居たる事を、斯くも思し召し置かれんとは、普通の人にてさへ嬉しきものを、況してや中宮の御心に懸けさせ給へるは、尋常一様の事ならねば、恐れ入りて心

さしおきていぬ。いづこよりにけりさて、さりいれたれば、こそ更に、御座さいふたゝみのさまにて、かうらいなごいさきよら也。心のうちには、さにやあらんさおもへご、猶おぼつかなきに、人ごも出し、もごめさすれご、うせにけり。あやしがりわらへご、つかひのなければ、いふかひなし。所たがへなごならば、おのづからも、又いひに來なん。宮のほごりに、あないしにまゐらせまほしけれご、猶たれ、すゝるにさるわざ

も亂れ、何と啓せん詞もなく、唯だ、かけまくもかしこきかみのしるしには、つるのよはひになりぬべきかな
と認めて、餘りに冥加に過ぎて、恐れ入り侍る由を啓せさせ給へご、御使に言傳まゐらせつ。御使は大盤所の雑仕の女房なりしかば、青き單衣などを祿に取らせたり。此の歌は、紙を神に言ひ寄せて、掛まくも畏しと言ひなし、紙の白きを、鶴の羽の白きに喩へ、千歳の壽命を、鶴と共に生き長らべしとの意なり。さても此の紙をば草紙に作りて、嬉しく持ち騒ぐに、眞實に氣の鬱げるも慰められて、心

はせん、御事なめりさ、い
みしうをかし。二日ばかり
音もせれば、うたがひもな
く、左京のきみのもさに、
かゝる事なんある、さる事
や、けしき見給ひし、忍び
てありさまの給ひて、さる
こそ見えすば、かく申たり
さも、なもらし給ひそ。こ
いひやりたるに、いみしう
かくさせ給ひし事也、ゆめ
く、まるがきこえたるとな
く、のちにもさあれば、さ
ればまさ、おもひしもしる
く、をかしくて、文かきて、
又みそかに、御前のかうら
んにおかせし物は、まごひ

の中は何となう面白う爽かに覺えたるが、其
の後二月ばかりして、五位の男の赤衣を着た
るが訪ね来て、疊を贈りけるが、何の口上も
なくて、唯だ是をと言ふのみなるにぞ、己れ
答めて、彼の人は誰ぞ、餘りに作法なき物言
ひかなと窘めたれば、其のまゝ、疊を置きて歸
り行きぬ。さても何處よりの使ならんと、後
を追ひて問はずれども、既に去りて見えすと
言へば、兎も角も其の疊を取り入れて見るに、
通常の物とは異なりて、殊更に貴人の敷かる
べき莫塵と言へる疊の状にて、高麗縁も最と
清らかなれば、こは中宮より賜はりたる物なら

しほごに、やがてかきおこ
して、みはしのもさにおち
にけり。

んと心には思へども、猶ほ確ならねば、人を
出して彼の使を尋ねさすれど、何處に行きた
るか、遂に見失ひけりさても疊などを贈り來
ることの怪しくて、笑ひなごすれども、使の
居ざれば、言ひ甲斐もなく、若し家違ひにて
もあらば、自から又た其の由を言ひ來るべし、
中宮の御方へ人を遣りて、問ひ伺はせばやと
思へど、誰れか斯る業をやせん、必ずや中宮
の仰せ事によりて、持ち参りたるに相違ある
まじと思ふに付けても、先に疊のやうなる墓
なき物にてさへ、延命息災の効驗ありやと仰
せられたることの可笑しきに、それより二日

計りして、何處よりも音沙汰なきまゝ、いよ
く疑もなく、中宮の御指圖なりと知りたる
ものから、御側に侍へる左京の局の許へ、實
は斯る事なんありけるが、然る御様子を見給
ひしや、内々にて御知らせあらま欲し、若し
然る氣色なかりしとならば、斯く御尋ね申し
たりとは、ゆめ／＼漏らされまじくと言ひ遣
りたるに、左京の君の返事には、そは中宮に
は甚く隠させ給ひて、極内密に贈られる事
なれば、己れ御知らせ申したりとは、夢にも
口外あるまじく、詳しき事は、改めて後より
とありければ、案に違はず中宮の仰せなりけ

關白殿、二月十日のほど
に、法興院の釋泉寺さいふ
御堂にて、一切經くやうせ
させ給ふ。女院みやの御ま
へも、おはしますすべければ、
二月朔日のほどに、二條の
宮へいらせ給ふ。夜ふけ
て、れふたくなりししかば、
何事も見いれず。つとめて、
日のうらゝかに、さし出た
るほどにあきたれば、いさ

るが可笑しくて、即ち文書きて、密に御所へ
持せ遣り、御前の高欄の上に懸せ置かせたる
に、使の者惑ひたるまゝに、即がて其の文を
取り落して、御階の許に落ちにけり。
關白道隆公は、正暦五年二月十日に、先に公
が建立し給へる二條の北極の東なる法興院
の釋泉寺の御堂にて、一切經供養を行はせ給
ふに就き、主上の御母后に在す東三條女院も、
中宮の御前も、臨御あらせらるゝ爲めに、二
月朔日の頃、法興院即ち東二條なるが、此處
に中宮の御所を假りに作りて、之を二條の宮
と申し奉り、此の日遷御あらせられたるが、

しろう。あたらしう、をか
しげにつくりたるに、みす
よりはじめ、きのふかけ
たるなめり。御しつらひ、
獅子こま犬など、いつのほ
ごにや、入ぬけんさぞをか
しき。櫻の一丈ばかりに
て、いみしう咲たるやうに
て、みはしのもさにあれば、
いささうさきたるかな、梅
こそたゞ今、さかりなめれ
さ見ゆるは、つくりたるな
めり。すべて花の匂ひなど
、さきたるにおさらす、い
かにうるさかりけん。雨ふ
らば、しほみなんかしと見
るぞ、口をしき。こいへな

己れ夜更けて眠を催しければ、此の假御所の
様子も見入れざりけるを、翌朝起き出でたる
頃には、日も早や麗らかに差し出でたれば、
新しき御所の最と明るく見えて、建築も立派
なるが、御簾を始めとして、昨日やうく懸
けたるらしく、疊建具より萬端の裝飾、さて
は獅子高麗犬なども、何時の間に据ゑ置かれ
けんと思はれて可笑し。御階の許には、一丈
計りなる櫻の樹の、花咲き亂れたるがあるに
未だ二月の初つ方、斯くも早く櫻の咲けるも
のかな、梅こそ今盛りなるべけれど、よくよ
く見れば、造花なりけり。而かも花の花合な

ごいふ物の、おほかりける
所を、今つくらせ給へれ
ば、木だちなどの、見所あ
るはいまだなし。たゞ宮の
さまぞ、けちかく、をか
げなる。殿わたらせ給へ
り。あをにびの、かたもん
の御さしぬき、櫻のなほし
に、紅の御ぞみつばかり、
只御なほしにかされてぞ奉
りたる。御まへよりはじめ
て、紅梅のこきりすきおり
もの、かたもん、りうもん
など、あるかぎりきたれば、
たゞひかりみちて、からぎ
ぬは、もえぎ、柳、紅梅な
どもあり。御前にゐさせ給

ご、眞に咲きたるに劣らず、最と美はしけれ
ご、造花なれば、雨降らば萎み捨たるらんと
見ゆるぞ口惜しき。元來此の二條の御所は、
小家などの多かりし所を取り毀ちて、俄に作
らせ給ひたれば、古りたる木立などの見るべ
き幽趣は、未だ之れあらず。又た假の御所な
れば、人氣近くて奥深くはあらねど、其の結
構は立派にして面白味あり。斯くて關白道隆
公の、此の御所に渡らせ給へるに、青鈍色に
堅紋置きたる指貫、櫻色の直衣、紅の御衣三
枚計りを、唯だ直衣に襲ねられたる御装束に
て、此方は中宮を始め奉り、女房達に至るま

ひて、物など聞えさせ給ふ。御いらへのあらまほしさを、里人に、わづかにのぞかせばやと見奉る。女房どもも御覽じわたして、宮に何事をおぼしめすらん、こゝらめでたき人々を、なべすゑて、御覽するこそ、いさうちやましけれ。一人わろき人なしや、是家々のむすめぞかし、あはれ也。よくかへり見てこそ。さふらはせ給はめ。さても此宮の御心をば、いかに知奉りて、あつまりまゐり給へるぞ。いかにいやしく物をしませさせ給ふ宮さて、我は生れ

で、紅梅の濃きも薄きもあれど、皆々織物、堅紋、立紋など、有りとある人の限り着たれば、四邊眩ゆきまで映え光れるが、唐衣には、崩黄、柳、紅梅などを着たるもあり。斯る所に關白殿は、中宮の御前に居給ひて、いろいろの御物語あらせられ、中宮の之に御答せらる、御有様など、里人にも僅かばかりにても覗かせばやと思はる。斯くて關白殿は、女房達を御覽じ渡して仰せらる、やう、中宮には如何に満足あらせらる、らん、斯くも立派なる女房達を、側近く並べ据ゑて御覽することの羨ましさよ、見渡す限りの多くの女房達の中

させ給ひしより、いみしうつかふまつれど、まだおろしの御ぞ、一つ給はぬぞ、何かしりうごさにはきこえんなど、の給ふがをかしきに、みな人々わらひぬ。まことぞ、なこなりきて、かくわらひいまするが、はづかしなどの給はするほどに、内より御つかひにて、式部のせり何がしまぬれり。御文は、大納言のさり給ひて、殿に奉らせ給へば、ひきさきて、いさゆかしき文かな、ゆるされ侍らば、あけて見侍らんとの給はすれば、あやしうさおほ

に、一人として身分賤しき者もなく、皆々良き家柄の娘達なるぞ華々しき、能く勞はりて召し使はせ給へとて、即がて又た女房達に向はせられ、さても皆々は、此の中宮の御心を如何に知り奉りて、斯くは集まり參れるぞ。此の中宮は物惜みせさせて、最と吝嗇なれば、我は御生れ給ひし當時より、今に忠勤を勵み居れど、未だ曾て召し下しの御衣一枚も、賜はりしことなき程なるこそ實際なれば、陰言には言はずして、御前にてこそ述懐するなれど、仰せらる、ことの可笑しくて、皆々笑ひ合へるに、關白殿重ねて、決して偽言にはあ

いためり。かたじけなくも
あり、もて奉らせ給へば、
さらせ給ひても、ひろけさ
せ給ふやうにもあらず、も
てなさせ給ふ、御よういな
ごぞ、ありがたき。すみの
まより、女房しされさし出
て、三四人御几帳のもこ
にゐたり。あなたにまかり
て、ろくの事、物し侍らん
さて、たさせ給ひぬるの
ち、御文御らんす。御返し
は、こうばいの紙にかゝせ
給ふが、御ぞのおなじ色に
匂ひたる。猶かうしも、お
しばかりまゐらする人は、
なくやあらんさぞ、口をし

らぬものを、斯く笑ふは、我を痴の沙汰と思
ひてなるべし、さても耻かきかなと仰せら
る、時しも、主上よりの御使にて、式部丞源
則理参り、御文を中宮に捧げまつるに、大納
言伊周卿御取次にて、先づ關白殿に手渡さる
を、關白殿は最と床かしき御文なり、許
させ給へば、披き解きて見侍らんと申さする
に、中宮の御氣色は、それを披き見給はんは宜
しかるまじとの御模様なれば、關白殿、さな
り帝の御文なれば恐れ多しとて、其のま、中
宮に参らせ給へば、中宮之を受取り給ひても、
直ぐには御覽せらる、御様子もなくて、持ち

き。けふは、こぎ更にきて、
殿の御方より、ろくは出さ
せ給ふ。女のさうぞくに、
紅梅のほそながそへたり。
さかな、ごあれば、ふはさ
まほしけれごけふぞいみじ
き事の行幸に、あが君ゆる
させ給へと、大納言ごの
も申てたちぬ。君達なご、
いみしうけさうし給ひて、
こうばいの御ぞも、おさら
じさき給へるに、三の御ま
へは、みくしげ殿也。中の
ひめぎみよりも、おほきに
見え給ひて、うへなごきこ
えんにぞよかめる。うへも
わたらせ給へり。御几帳引

扱ひ給へる御用意の程ぞ芽出たし。さて女房
達は、隅の間より褥を取り出して、御使に進
めなごし、三人四人計り、御几帳の許に居た
るが、關白殿には、我れ彼方に罷りて、御使
に取らする祿を物し侍らんとて、起たせ給へ
る後、中宮には御文を御覽じて、御返し文は、
紅梅色の薄葉紙に書かせ給ひけるが、御衣と
同じ色に映え匂ひたるに、其の御姿の神々し
き美麗しさは、面のあたり見奉る者の外には、
誰か推量し得る者あらんやと思はれて、里人
などの夢にも、斯る御有様を知り得ぬぞ口惜
しき。されば少し許りにても、覗せま欲しう

よせて、あたらしくまゐりたる人々には、見え給はれば、いふせき心ちす。さしつごひて、かの日のさうぞく、扇などの事を、いひあはするも有り。又、いごみかはして、まるは何か、只あらんにまかせてなごいひて、例の君などにくまる。よさりまかつる人もおほかり。かゝる事にまかつれば、えごめさせ給はず。うへ日々にわたり、よるもおはします。君たちなどおはすれば、御前人すくなく候はればいごよし。内の御つかひ、日々にまゐる。御

こそ覺ゆれ。斯くて今日は特別に、關白殿より御使への祿を出させ給へりしが、使は男なれど、中宮へ参りたるなれば、裳、唐衣などの女の装束に、貴婦人用の紅梅色の細長を添へて取らせつ。尙ほ酒肴もあるものから、酔はさま欲しけれど、使の者の辭し申すやう、今日は大切なる行幸の御供仕るなれば、此の儀は御免しあれかしと、大納言伊周卿にも申し述べて立ち歸りぬ。斯る所に、關白殿の御息女達、いみじう装束し給ひて、紅梅の御衣ごも、何れ劣らぬ様に着給ひて入らせられたるが、第三の御息女は、御櫛匣殿の別當にて、

前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、しほみわるうなるだに侘しきに、雨の夜るふりたる、つごめて、いみしうむごく也。いさゝくおきて、なきてわかれんがほに、心おきりこそすれど、いふをきかせ給ひて、げに雨のけはひしつるぞかし、いかならんさておごろかせ給ふに、殿の御かたまり、さふらひのものども、げすなご来て、あまた花のもさに、たゞよりによりに、引たふしきりて、みそかにいきで、まだくらからんにされこそ、おほせ

第二の御息女よりも體格大ければ、姫君ご言はんよりは、貴婦人の敬稱なる「上」ごこそ申すべき程なり。然る程に、關白殿の北の方も渡らせ給ひたるが、御几帳近く引き寄せられ、新參の女房には、御面會あらせられざるものから、己も新參にて、拜顔し得ざるこそ覺束なき心地したれ。さても女房達集りて、一切經供養の當日の装束を始めとし、扇などの事まで、いろ／＼談合ふもあり。又た中には、一向用意せざる態にて、唯だ有るが儘に任すべしなご、頓着もなく言へるもあれど、實は人々を油断せさせて、己れ一人華々しく

られつれ。あけ過にけり、ふびんなるゆざかな、きくさくたふしるるに、いさをかしくて、いはゞいはなんさ、かれすみか事を思ひたるにやさも、よき人ならば、いはまほしけれどかの花ぬすむ人はたれぞ、あしかめりさいへば、わらひて、いさゞにげて、ひきもていぬ。猶さの、御心は、をかしうおはすかし。くきさにも、ぬれまるかれつきて、いかに見るかひなからましさ、見て入ぬ。かもんづかさまゐりて、御かうし参り、そのもりの女官、御き

装はんとの、例の企なるべしと憎まるゝもあり。斯くて其の日の用意せんとして、女房達も多けれど、斯る事の爲めには、中宮には決して止めさせ給はぬぞ有り難き。關白殿の方方は、毎日御前に渡らせ給ひ、夜までも在しまし、姫君達も亦た同様なれば、御前は人多く賑はしくて最と善し。主上よりの御使も、日々に参る。さて彼の御前の造花の櫻は、眞實の咲ける花ならねば、色は優らで衰へ行くばかりにて、日光の爲めに褪せ萎むことの忙しきに、夜雨降りたる翌朝は、いたく萎へて

よめまゐりはて、おきさせ給へるに、花のなければ、あなあさまし、かのはなは、いづちいにけるさ仰せらる。あかつき、ぬす人ありさいふなりつるは、猶枝などを、すこしをるにやそこそきつれ。たがしつるぞ、見つやさ仰らる。さも侍す、いまだくらくて、よくも見侍らざりつるを、しるみたる物の侍れば、花ををるにやさ、うしろめたさに申侍つると申す。さりさも、かくはいかでかさらん。殿のかくさせ給へるなめりさて、わらばせ給へば

見苦しければ、己れ雨の朝、早く起き出で、拾遺集に「櫻花つゆに濡れたる色見れば、泣きて別れし人ぞ戀しき」とあるやうに、今此の花の雨に萎れたるを見ては、泣きて別れん計りに、心劣りこそすれど獨言するを、中宮の間かせ給ひて、實に雨の降る氣色ぞかし、櫻は如何になりしやと驚かせ給ふに、關白殿の御方より、侍士の者ども、下司など多く來り、櫻の許に寄り集りて、其の樹を引き倒し取り、さて言ふやうには、密に行きて、夜の明けざる間に引き取るべし、雨の爲めに花の損じたるを、夜明けて後に人の見んは、實に

いでよ侍らじ、春風のし
て侍りなんさけいするを、
かくいはんさて、かくすな
りけり。ぬすみにはあら
で、ふりにこそふるなりつ
れさ、仰らるゝも、めづら
しき事なられど、いみしう
めでたき殿おはしませ
ば、れくたれのあさがほも
時ならずや御らんせんさ、
引いらる。おはしますま
ゝに、かの花うせにける
は、いかにかくはぬすませ
しぞ、いぎたなかりける女
房達かな、しらざりけるよ
さ、おごるかせ給へば、さ
れど、我よりさきにさこそ

見苦しければと、仰付けられたるを、斯く明
け過ぎて、時を遅らしつる事の不憫さかなよ
とて、急ぎ倒して持ち行く状の可笑しければ
後撰集にも兼澄集にも、「山守は、いは言は
なん、高砂の、尾上の櫻、折りてかざさん」
とあるを思ひて、斯くは引き倒し行くにやと、
言はま欲しけれど、才學ある人ならば兎も角
も、此の歌の心を思ひ別くる程の侍士ならね
ば、彼の花を盗む人は誰れぞ、悪き業なるべ
しと言へば、侍士ども笑ひながら、引き逃げ
行きけり。さても關白殿の御心の芽出たさか
な、斯く人目に觸れぬやうに、取り拂はされ

思ひて、侍るめりつれど、
忍びやかにいふをいささく
きゝつけさせ給ひて、さお
もひつる事ぞ、世にこそ人
出て見付じ、宰相とそこさ
のほごならんさ、おしはか
りつさて、いみしうわらは
せ給ふ。さりげなる物を、
少納言は、春かぜにおほせ
けるさ、宮の御前にうちよ
ませ給へる、めでたし。そ
らごさをおほ侍る也、今
は山田もつくろらんさ、う
ちすんせさせ給へるも、い
さなまめきをかし。さても
れたく見付られにける哉、
さばかりいましめつる物

つるものよと思ひつゝ、花も莖も濡れ纏ひて、
見る甲斐もなき櫻を、引き行くまゝ、に暫時見
入り居たりぬ。然る程に、掃殿寮の司人参り
て、御格子を上げ奉り、主殿の女官の、御掃
除し終りて後、中宮には起きさせ給へるが、
櫻のなきを御覽じて、あな淺まし、彼の花は
何處へ持ち去りけるよ、曉方に少納言が、花
盗人ありと言へるを聞きける時は、尙ほ枝な
ごを少し許り、折り取る者のあるならんと思
ひしに、全く其の影も形も失せたるは、何人
の仕業なるぞ、少納言は之を見付たりやと
仰せらるゝに、否、見侍り申さず、未だ暗く

を、人の所に、かゝるしれもつゝあるこそぞ、のたまはず。春風は、そらにいさをかしようもいふかなさ、すんげさせ給ふ。たゞ、こゝには、うるせくおもひよりて、侍つかし、けさのさま、いかに侍らまして、わらばせ給ふを、こわか君、されどそれは、いささく見て、雨にぬれたりなど、おもてふせなりと、いひ侍りつと申給へば、いみしうれたからせ給ふもわかし。さて八日九日のほごに、まかつるを、今すこし近うなしてなど、仰らるれど、出ぬ。いみし

て定かには見え申さざりつれど、白丁などを着たる者にやあらん、唯だ白みたる者の見え侍れば、若しや花を折るにかと心配さに、咎め申したる迄なりと啓すれば、夫にしても樹のまゝに、斯く急ぎ取り得べきや、察するに關白殿の取り隠させ給ひしなるべしと笑はせ給ふにぞ、よも然には侍るまじ、花の敵の春風の仕業ならんと申し上ぐれば、少納言は春風を言はん爲めに、關白殿の爲させ給ひしを隠せるなれど、尤も此は何人も盗みたるにはあらで、降る雨の仕業にこそあれと仰せられたるは、何時もながらの御名言、いと芽出た

う常よりも、長閑にてりたるひるつた、花の心開けたりや、いかゞいふと、のたまはせられたれば、秋はまだしく侍れど、よに此たびなん、のぼる心ちし侍るなご、聞えさせつ。出させ給ひし夜、車の次第もなくまづ、このりさわくがにくければ、さるべき人三人と、猶此車にのるさまの、いささわがしく、祭の歸きなどのやうに、たふれぬべくまごふ、いさ見ぐるし。たゞさばれ、のるべき車なくて、えまぬらずば、おのづからきこしめしつけて、たまは

し。さても關白殿の渡らせられなば、寢亂れたる髪の朝顔も繕はねば、元來朝顔の花は春のものならぬに、其の花ならぬ顔をも、時ならず御覽せられんことの耻かしければと、先づ鏡に向ひて粧ひけるが、さて渡らせ給ひて、直ぐさま仰せらるゝやう、彼の櫻の花の失せたるは、如何にして盗ませしかを、眠を貪りたる女房達は、少しも知らざりけるよと、態と空惚けて仰せらるゝものから、己れ忍び聲にて、さ仰せらるゝとも、此の聲少が侍士の引き持ち行くを見付けぬ前より、殿には既に御存知の筈なるべしと思ひ侍ると言へば、耳

せてんなど、笑ひ合て、た
てるまへより、おしこりて、
まごひのり果て出て、かう
かさいふに、まだこゝにこ
いらふれば、宮司よりき
て、誰々かおはするさ、聞
聞て、いさあやしかりける
事哉、今は皆のりぬらんさ
こそ思つれ、こはなごて、
かくはおくれさせ給へる、
今はこくせんをのせんさし
つるに、めづらかなるやな
ご驚きて、よせさせれば、
さばまづ、其御志ありつ
らん人をのせ給ひて、つき
にもこ、いふ聲聞付て、け
しからず腹きたなく、おほ

敏く聞き付け給ひて、然ればなり、少納言こ
そは、此の花を引き倒せしを疾く承知なるべ
し、先づ宰相の局と、少納言との外には、何
人も之を見付けまじと推量し居たりとて、聲
高々と笑はせ給へば、中宮も亦た御詞を添へ
させられ、然るを少納言は、春風の仕業なら
んと言へりとて、微笑ませ給へるも芽出たく、
尚ほ殿に仰せらるゝやうには、少納言は櫻を
持ち行くを知りながらも、春風に事寄せ侍り
ぬとて、貫之集に見えたる、「山田さへ今は
つくるを散る花の香ごとは風におほせざらな
ん」この歌を誦んせさせ給ひたるは、最と優

しけりなごいへば、のりぬ。
其次には、誠にみづしが車
にあれば、火もいさくらさ
を笑ひて、二條の宮に参り
つきたり。みこしは、さく
いらせ侍ひて、皆しつらひ
ぬさせ給けり。こゝにふべ
さ仰られければ、左京小左
近なごいふ若き人々、参る
人ごこにみれど、なかりけ
り。おるゝにしたがひ、四
人づゝ御前にまゐりつごひ
てさふらふに、いかなるぞ
さ仰られけるもしらず、あ
る限おり果てぞ、からうし
て見付られて、かばかり仰
らるゝには、なごかく遅く

美きて可笑し。されば殿には、妬ましくも見
付けられける事かな、暗からん間に引き取り
て、人に見られなせと、呉々も誠めたるも
のを、さても見付けられなごする痴氣者も、
我が家に在るものよ。それに付けても、春風
に事寄せたる少納言こそ、天つ空の風に其の
罪を託け、るよと褒め給へば、中宮には、然
ればなり、少納言は何時も美しく思ひ寄りて
言ふなるを、今朝は如何にも端なう、花盗人
は誰なるかなご咎めたりとて、笑はせ給ふを、
大納言伊周卿の若君道雅殿には、されど少納
言は、朝疾く見て、雨に濡れたる状の痛しく、

さて、引ゐて参るに、見れば、いつのまに、かうは年比の住ひのさまに、おほしましつきたるにかさをかし。いかなれば、かう何かさ、尋ねばかりは、見えざりつるぞさ仰らるゝに、さかくも申されば、諸共に乗たる人、いさわりなし、さいはての車に侍ん人は、いかでかさくは参り侍ん、是もほさく、えのるまじく侍つるを、みづしがいさほしがりて、ゆづり侍つる也。くらう侍つる事こそ、佗しう侍つれど、笑ふくけいするに、行事する物の、い

泣きて別れん顔に、心劣りこそすれと言ひ侍べれば、平常に不似合なる状とも申されまじと、申し給ふにぞ、さては雨に濡れたるを見られしよな、いと残念なりけりと、關白殿の妬がらせ給ふも可笑し。斯くて一切經供養の日も近づきぬれば、己は中宮の御供の用意せばやとて、八日九日の頃に、家里へ退り出づるを、今少し間際になりて、退り出でよと仰せらるれど、心急くまゝに下りぬ。此の日は別けて長閑なる春の日の、うらくと照りたるに、其の晝つ方、中宮よりの御消息ありて、斯る長閑なる春の日なれば、雨に濡れて萎れ

さあやしき也。又なごかは、心しらざらん物こそつゝまめ、うゑもんなごは、いへかしなご仰らる、されどいかでか、はしりさき立侍らんなどいふも、かたへの人、にくしき聞らんさきこゆ。さまあしうて、かくのりたらんも、かしこかるべき事は、定めたらんさまのやんごさなからんこそよからめさ、物しげに思召たり。おり侍るほどの、待さほに、くるしきによりてにや、さぞ申なほす。

たる花の心も、定めて開けたるならん、さらば早く参れよと、仰せありければ、秋は未だ遠く侍れど、此度こそは、家里に長く籠らで、直ぐ御前に参るびやう心地し侍べると、御答申し上げて、即がて御所に上りたるに、さて供養の夜となりて、釋泉寺へ行啓あらせられたるに、女房達は先を争ひて乗るものから、車の順序もなく亂れ騒ぎて、賀茂の祭の歸るさのやうに、慌て惑ひて、倒れんばかりに急ぎ乗る状の見苦しければ、我等は然るべき上臈と唯だ三人、此の有様を驚き見ながら、人は乗り急がば急げ、我等が乗るべき車なくて、

供養の御堂に参り得ずば、中宮には自然聞しめされて、更に車を送り賜ふべしなご、言ひ笑ひて立ち居たる前を、遠慮もなく押し通りて、皆感ひ乗り出でたるが、車の奉行する者、是にて乗り終りたるにやと言ふにぞ、否々、未だ此處に三人ありと答ふるに、中宮大夫以下かの司人つひと寄り来て、誰々か残りのこ在すと問ひ聞きて、今更ら驚きながら、そは最と怪しき事かな、皆既に乗りたらんと思ひつるに、何ごて斯くは乗り遅れ給へる、今は得選なる下々の女房によぼうを乗せんとする所なるに、上臈じやうろうの人々の、未だ乗らざるは珍らしき次第なりとて、

車を寄せさせたれば、然らば先づ其の乗せんと志したる得選の人々を送りて、我等は其の後にこそと言へば、己が聲を聞き付けて、そは怪しからず腹汚なき言をの給ふものかなと司人の言ふにぞ、さらば乗りなんどて乗りぬるに、己が車の次なるは、眞實に水仕の女房の乗れるなれば、點せる火さへ薄暗きを笑ひながら、即がて二條の宮に参り着きたるに、中宮の御輿は疾く入らせ給ひて、皆用意整へさせて居給ひけり。之より先き中宮には、少納言を此處に呼べと仰せられければ、左京小左近さこんなどいふ若き女房によぼうの人々は、参る車毎に

見れども、己れは見當らず、一車四人乗なれば、車より下るゝに従ひ、四人づゝ御前に参り集ひて、御側に侍ふに、如何で少納言は参らぬぞと、仰せありしをも己は知らず、有る限りの女房皆々下り果てたる最後に、辛うじて左京の君なごに見付けられて、さても中宮には斯くく仰せられて、待ちかねさせたるに、何ぞか遅く参られけるよとて、御前に引かれ参るに、見れば總ての用意整ひ居て、何時の間に、斯くも年來住み馴れ給ひしやうに在し着きしよと感^{かん}じ見る間も、中宮の御詞にて、如何なれば尋ぬる車々にも乗り合はさで、

斯くは遅くなりけるよと仰せあれど、己は兎角の御答も申し上げ兼ねたるに、同乗したる彼の上臈は、然れば最と情なき事にて、最後の車に乗り侍れば、疾く参ることの叶ひ申さず、其の最後の車にも、乗り得まじき程に侍りたれど、水仕女などが氣の毒がりて、車を譲り呉れたればこそ、やうく参りたるなれ、されど火は暗うて、途すがら佗しう思ひ侍りつと、笑ひくく申し上げければ、中宮の仰せには、そは車の行事する者の疎畧なり、されど又た先を争ふ女房を制すること宜しけれ、心知らぬ者には遠慮をもせめ、右衛門などは、

古くより居て、誰をも知らぬ事なければ、濫りに乗る者を制せよかしとありけるに、右衛門の局の申し上ぐるには、仰せ御尤には侍れど、たとひ制せずとも、先を争ひ惑ふべきものにあらずと言ふを、傍の女房達は、定めて憎しと聞きたるならんと察せらる。さても人に先立ちて乗ることの、作法ならぬは言ふ迄もなければ、斯く乗り惑ふ状こそ見苦しうて、賢き人の仕業にはあらず。車の順序は、身分の高下に依りて定法あれば、定法の如く正しからんこそ、尊けれと仰せられて、御機嫌宜しからず拜し奉れば、己れ遅れ馳せながらも

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おほします殿は、清涼殿にて、その北なる殿におほします。西ひがしは、わたごのにて、わたらせ給ふつれに、まうのぼらせ給ふ。おまへはつぼなれば、前栽なごうゑ、ませゆひて、いさをかし。二月十日の日の、うらくと長隊に照わたるに、わたごの、

畏みて、我等の車に乗らんとて、下り侍る間の待ち長くて、斯くは先に乗り侍るならんと、申し直し置きて、其の場は此にて事止み侍りにき。小一條院と言ふは、近衛の南、洞院の西にありて、一に山吹殿と稱し、清和天皇御誕生の御所なるが、一條天皇の御世に至り、此の院をば、臨時の御所と定められたれば、今内裏とは言ふなり。尤も主上の寢殿は清涼殿なれば、中宮には其の北なる殿に在しますなるが、西東は廊なれば、主上の中宮の方へ渡らせ給ふ毎に、此の廊を参り上らせ給ふ。さて殿の

西のひさしにて、うへの御
笛ふかせ給ふ。たかさほの
大貳、御ふえの師にて、物
し給ふを、こさ笛ふたつし
て、たかさごを、をりか
へしふかせ給へば、なほい
みしうめでたしさいふも、
よのつれなり。御ふえの師
にて、其こさごもなご申し
給ふ、いさめでたし。みす
のもさにあつまり出て、見
奉るをりなごは、わが身に
せりつみしなご、おほゆる
事こそなけれ。すけたまは、
木工のぞうにて、藏人には
成にける。いみしうあらあ
らしうあれば、殿上人女

前つ方は壺の内にて、樹々を植る立て、籬を
結ひて、興趣いと面白し。頃は二月十日の、
うらくと長閑に照り渡る春の日に、主上に
は廊の西の庇にて、御笛を吹き給ひ、小野宮
關白實頼公の御孫にて、參議齊敏卿の男なる
太宰大貳高遠の君は、御笛の御指南なれば、
二つの笛にて、今しも催馬樂の謠物なる高
砂を、繰り返して吹き給ふことこの芽出たさは、
いみじうなご感ずるは尋常茶飯の事にて、其
の絶妙の音は、なかく言の葉にも盡しがた
し。尤も御笛の御指南なれば、其の筈なり
と申すも左こそや。いと芽出たき事なり。時

房は、あらわにさぞつけた
るを、うたにつくりて、さ
うなしのぬし、をほりうご
のたれにぞありけるさうた
ふは尾張のかれさきがむす
めのほら成けり。これをふ
えにふかせ給ふを、そひさ
ふらひて、なほたかうふか
せおほしませ、えきまさふ
らはじさ申せば、いかでか、
さりさもきしりなんさ
て、みそかにのみふかせ給
ふを、あなたよりわたらせ
おほしまして、此ものなか
りけり、只今こそふかめさ
おほせられて、ふかせ給ふ、
いみじうをかし。

には女房達と共に、皆々御簾の許に集り出で、
笛吹き給ふを見奉る折なごは、心に物の叶は
ぬやうなる愁なごは、露ほごも考ふる事もな
く、唯だ胸安らかに面白くこそ覺ゆれ。さて
も木工允助忠は、藏人になりたるが、萬事荒
々しき男なれば、殿上人を始め、女房達に至
るまで、皆々彼を荒鰐と名付けたるを、誰に
かあらん之を歌に作りて、荒々しく左右を構
はぬ遠慮なき者なるが上に、尾張の兼時が女
の腹に生れたるものなれば、「左右なしの主、
尾張人の種にぞありける」と謠ふを、主上に
は其の歌を笛に吹き給ひけるが、指南番の高

遠付き添ひ奉りて、尙ほ高音に吹かせ給へ、助忠は聞き得まじけれと申し上ぐれば、如何でか聞えざることあらん、たとひ聞えずとも知りなんものをとて、密かに吹き給ふを、即ち中宮の御方へ渡らせ給ひて、助忠の侍はざるを見届けさせられ、唯今こそ聲高く吹かめと仰せられて、吹き給ひしこそいみじう可笑しけれ。

〔注意〕

右の「小一條院」の一節は、上巻の巻の二の十七段の中にあるは誤入なれば、今更めて此處に加ふ。尤も筆のすさびなれば、時代年月には前後の差ありて、前節「關白殿二月十日のほごに」其の前節「まだ見ぬ物がたりの多かる」。若くは「御前に人々所もなく居たるに」なごご、相關鍵せざるは固より其の所なり。

御經のこゝに、あすわたらせおはしまさんさて、こゝにひまありたり。みなみの院の、北おもてに、さしのぞきたれば、高つきごもに、火をさもして、ふたりみたりよたり、さるべきごち、屏風ひきへだてつるもあり、几帳なかにへだてたるもあり、又さらでもあつまりぬて、きぬごもさぢかされ、裳の腰さし、けさうするさまは、さらにもいはず、かみなごいふ物は、あ

卷の十一

百廿四段より百四十六段に至る十三段より成る

中宮には、明日は一切經供養に行啓あらせられんとする今夜、己れ家里より御前に上り参りたるが、關白邸なる南の院に在しますものから、其の北表を差し覗きたるに、高坏なごに火を點して、女房達二人三人、又た四人づゝ、氣の合ひたる同志が集りて、屏風を引き立てたるもあり。几帳を中にして距てたるもあり。又た唯だ集りて、衣などを綴ち重ね、裳の腰を縫付けなごするもあり尤も化粧を凝せるは言ふも更なり、明日より後は、斯る晴

すより後は、有がたけにぞ見ゆる。さらのさきになん、わたらせ給ふべかなる。なごか今まで、まゐり給はざりつる。扇もたせて尋きこゆる人ありつなごつぐ。さて、まごにさらの時かさ、さうぞきたちてあるに、あけ過ぎ、日もさし出ぬ。西の對のからびさしになん、さしよせてのるべきさて、あるかぎり、わたごのへゆくほごに、まだうひくしきほごなる今まゐりごもほ、いごつゝましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおは

の場合もなかるまじとの有様にて、髪を梳り繕ふ状など、最と仰々しかりけるが、女房達の己れに言ふやう、明日は寅の刻に、中宮の渡らせ給ふ筈なるに、何ごか今までも参り給はざりつる、誰にかあらん扇持たせて、少納言は此處にかと、尋ね來る者ありしよなご告ぐるに、待て夫は誰ならん、さても眞實に寅の刻の御行啓か、そは來遅れたり、大變なりとて、己れ慌て、装束に取り懸りたる間に、早や夜も明け放れ、日も差し昇りぬ。即がて南の院の西の對の唐庇に、車を寄せて乗るべければ、女房達の全部を舉て廊へ行くに、未

しまして、まづ女房、車にのせさせ給ふを御覽すさて、みすのうち、宮、しげいしや、三四のきみ、殿のうへ、其御をさうさ、みまごろたちなみておほします。車の左右に、大納言、三位中將、二所して、すだれうちあげ、下すだれひきあげて、のせ給ふ。みなうちむれてだにあらば、かくれ所やあらん。四人づゝ、かきたてにしたがひて、それくさ、よびたて、のせられ奉り、あゆみゆく心ち、いみしう、まごに淺ましう、けそうなりさもよ

だ物馴れぬ新參の女房などは、最と慎ましげなるが、西の對には、關白殿の住み給へば、中宮にも其處に在しまして、先づ女房の車に乗るを御覽すさて、御簾の中には、中宮を始め奉り、御妹君なる淑景舎、其の次の第三の御妹君、關白殿の北の方なる高内侍、内侍の御妹君三人、皆々立ち並びて在します。又た乗るべき車の左右には、大納言伊周卿、三位中將、隆家卿の御二所ありて、車の簾打ち上げ、下簾を引き上げて、一々女房達を乗せさせ給ふものから、皆の女房一同に、一時に乗らんには、紛れ隠るゝ所もあらんに、何

のつれなり。みすのうち
に、そこらの御目ごものな
かに、宮の御まへの、見ぐる
しと御覽せんは、更に佗し
き事、かぎりなし。身より
あせのあゆれば、つくるひ
たてたる髪などもあがりや
すらんとおぼゆ。からうし
て過たれば、車のごもに、
いみしうはづかしげに、き
よげなる御さまごもして、
うちゑみて見給ふも現なら
ずされど、たふれず、そこ
まではいきつきぬるこそ。
かしこきかほも、なきかご
おぼゆれど、みなのりはて
ぬれば、引出で、二條のお

は偕て四人づゝ、書き立てられたるに従ひて
誰々と呼び上げられて、乗せられ奉るなれば、
紛れ隠れんやうもなく、晴々しく歩み行く心
地の、いみじう淺ましう顯はにて、耻かしな
んと言ふは世の常なり、耻かしさを打ち越え
て、恐れ戦くばかりなるが、殊に御簾の中よ
り、御覽する多くの目の中にも、中宮の御前
の御覽じて、見苦しと思召さんは、更に佗し
き事限りなければ、全身に汗流れて、奇麗に
梳り繕ひたる髪のもも、慄然として立ち上り
もせんす思はる。斯くて辛くも御前を通り過
ぎたるに、車の許には、又た耻かしくも、伊

ほぢに、しぢたて、物見
ぐるまのやうにて、たちな
らべたる、いさをかし。人
もさ見らんかしと、心さ
きめきせらる。四位五位六
位など、いみしうおほうい
でいり、車のごもに來て、
つくるひ物いひなごす。先
院の御むかへに、殿をほし
め奉りて、殿上と地下と、
みなまゐりぬ。それわたら
せ給ひてのち、宮は出させ
給ふべしとあれば、いさ心
もさなしと思ふほどに、日
さしあがりてぞ、おはしま
す。御車ごめに十五、よつ
は尼の車、一の御車は、か

周隆家の御二所、清げなる御有様にて打ち笑
ませながら、簾を上げて乗せ給ふも、實に現
ならず夢心地せらる。されど耻かしさに目も
眩みて轉ぶべかりしを、幸に倒れもせで、車
の許まで行き着きたるこそ嬉しけれ。斯る有
様を見れば、何の女房も、餘り賢き相貌もな
きかと覺ゆれど、さて車の上にては、所狭き
まで廣ぐるもあり。斯くて皆々乗り終りたれ
ば、即ち車を引き出して、二條大路に牛を休
ませ、轆を榻に懸けて、祭の物見車のやうに、
立て並べて、中宮の御車を待つ状の面白けれ
ば、見る人も定めて、物見車のやうに思ひな

らの車なり。それにつゞきて、尼のくるま、しり口よりすぬさうのすゝ、うすゞみのけさころもなど、いみしくて、すだればあけず、下すだれも、うすいろのすそすこしこき。つぎに、たゞの女房の十、櫻のからきぬ、うすいろのも、紅をおしわたし、かきりのうはぎども、いみしうなまめかし。日はいさうららかなれど、そらばあさみどりにかすみわたるに、女房のさうぞくの匂ひあひて、いみしきおり物の、色々のから衣などよりも、なまめかしうをか

さんと覚えて、車上ながら心こきめさせらる。此の間に、四位五位六位などの人々、出入頻繁にして、或は車の許に寄り来て、女房達に物繕ひ言ひなごす。先づ主上の御母君なる東三條女院の御迎にとて、關白殿を始めとし、殿上人も地下人も、皆々出で行きぬ。此の女院の渡御あらせられての後、中宮の出御ましますと言へば、待ち居る女房は、最と心もどなく思へる間に、日は山の端に差し上りてぞ、女院の渡御あらせらる。御車共に、其の数は十五臺にて、其の中の四臺は、尼君達の御車なり。第一の御車は、是ぞ女院の御召車にて、

しき事かぎりなし。關白殿、其御つぎの殿ばら、おはするかぎり、もてかしづき奉らせ給ふ、いみしうめでたし。これら見奉りさわぐ此車どもの、二十立ならべたるも、又をかき見ゆらんかし。いつしか出させ給はゞなど、まちきこえさするに、いかならん心もさなくおもふに、からうして、うれめ八人馬にのせて、ひき出めり。青すそのものも、くたいひれなごの、風に吹やられたる、いさをかし。ぶぜんさいふうれめは、くすししげまさがる

唐風の車なり。續きては四臺の尼君の車にて車の尻より水晶の珠數、薄墨色の袈裟衣などの、立派なる装束の見えたるが、簾は下したるまゝにて、下簾も薄紫色の、其の裾は少し濃き色なり。次には尼ならぬ女房達の車十臺、櫻色の表白く裏は赤花なる唐衣、薄紅の裳、又は紅の裳を押し渡し。緻密に織れる縑の上着など、最と優美なり。春の日の麗らかなれど、空は淺緑に霞み渡れる朝景色に、女房達の装束の色美しく映えれば、却りて立派なる織物の、色々の唐衣などよりも、縑の上着の上品にして、優美なること此の上もなし。

人なり。えびぞめのおりも
のゝさしぬきなきたれば、
いざ心こさなり。しげまさ
は、色ゆるされにけりさ、
山の井の大納言は、わらひ
給ひて、皆のりつゞきてた
てるに、今ぞ御こし出させ
給ふ。めでたしと見え奉り
つる御ありさまに、是はく
らぶべからざりけり。朝日
はななくさ、さしあがるほ
ごに、木の葉のいさ花やか
にかゝりきて、みこしのか
たびらの、色つやなごさへ
ぞいみしき。御つなばり
て、出させ給ふ。御こしの
帷子の、うちゆるきたるほ

斯くて關白殿を始め、其以下の殿上人達など、
擧げて皆女院に傳き參らせ給ふも、いみじう
芽出たし。されど女院の御行列を、見奉り騒
げる此方の女房どもの車の、二十臺立ち並び
たるは、女院の御方の人々よりも、亦た面白
しと見らるゝなるべし。さて中宮には、何時
しか出御あらせらるゝにやと、思ひ待つ間も
心もどなかりし程に、辛ふじて采女八人、馬
にて先驅なり。采女は、諸國より上りたる美
女なるが、其の装束は、青裾濃の裳、裙帶、
領巾などの扮装にて、領巾の風に吹き靡ける
も可笑し。中にも豊前となん呼べる采女は、

ご、まごごにかしらの毛な
ご、人のいふは、さらにそ
らごさならず。扱のちに、
かみあしからん人も、かこ
ちつべし。あさましういつ
くしう、猶いかでかゝる御
前に、なれつかふまつらん
ご、我身もかしこうぞおほ
ゆる。御こし過させ給ふほ
ご、車のしちごも、人だま
ひにかきおろしたりつる、
又うしごもかけて、みこし
のしりにつゞきたる心の、
めでたう興ある有さま、い
ふかたなし。おほしましつ
きたれば、大門のもごに、
こまもろこしのがくして、

典薬頭重正が親しき間柄にて、此の日の装束
には、葡萄染の織物の指貫を着たれば、男装
に似て、異様に人目を惹けるものから、山の
井大納言道頼卿は戯れて、重正は織物の葡萄
染色を許されけるよと笑ひ給ひなごするに、
即がて皆々乗り續きて立てば、今ぞ中宮の御
輿の出させ給ふ。女院の御有様も芽出たかり
しが、之は又た格別にて、比べ申さんも愚か
なり。朝日はななくと差し昇り、春の木の葉
の若やかなるが、日に映え輝きて美はしく、
御輿の帷子の色艶までも、一段の華やかさを
増したるが、御輿の御綱を張りて、しづく

獅子こま犬をどりまひ。さうの音、つゞみのこゑに、物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに、きにつけるにかあらんさ、空にひゞきのぼるやうにおぼゆ。内に入ぬれば、いろいろの錦のあげはりに、みすいさあをくて、かけわたし、へいまんなど、ひきたるほど、なべてたゞに此世とおぼえず。御さじきにさしよせたらば、又此殿げら、立給ひて、さくおりよこのたまふのりつる所だにありつるを、今すこしあかう、けそなるに、大納言殿、いさ

と出でさせ給ふに、其の御輿の帷子の打ち揺ぎたるなど、神々しさの餘り、慄然ばかりに髪の毛も立ち上るよと、人の言ふも空言にはあらず。髪の毛の悪しき人などは、後にて其の立ち上がりたるを、撫で付くるに困じて啣ちもしつべし。斯る神々しき中宮の御前に、淺ましき我身の愛しう、如何に馴れ仕ふ奉らんと思へば、我身ながら尊く賢う覺えらる。斯くて御輿の通り過ぎする間に、牛を休めて榻に轆を下したりつる女房の車どもは、又た牛を懸けて、御輿の後に續きたる心の中の、芽出たう興ある有様は、なか／＼に言ひ盡す

物／＼しくきよげにて、御したがされのしりいさながく、所せげにて、すだれうちあげて、はやさの給ふ。つくろひそへたるかみも、からぎぬの中にてふくだみ、あやしうなりたらん色の、くろさあかささへ、見わかぬべきほどなるが、いさ佐しければ、ふさもえおりす。まづしりなるこそはなど、いふほども、それもおなじ心にや、しりぞかせ給へ、かたじけなしなどいふ。はぢ給ふかなさ笑ひて、立かへり、からうしておりぬれば、よりおはして、

べくもあらず。さて釋泉寺に御着あらせらるや、大門の許にて、高麗樂、唐の樂などを奏し、獅子狛犬の舞を躍り、笙の音、大鼓の聲に、心も氣も轉倒して、此の世とは思ひもせられず。此は何處の天界なる佛の御國に來にけるにやあらんと、宛然天つ空に響き昇るやうに覺ゆ。又た門内に入りぬれば、いろいろの錦の幄に、いと青き御簾を懸け渡し、屏幔とて幕を引き張りたるなど、總べて此の世の状とは見えす。斯くて女房の車を、中宮の御棧敷近くに差し寄せたれば、伊周隆家などの殿原、立ち居たまひて、疾く下りよと仰せ

むれたかなどに見せて、かくしておろせよ。宮の仰らるれば來たるに、思ひくまなきさて、ひきおろして、ゐてまゐり給ふ。さきこえさせ給ひつらんと思ふも、かたじけなし。まゐりたれば、はじめおりの人ごもの、物の見えぬべきはしに、八人ばかり出るにけり。一尺さ二尺ばかりの高さの、なげしのうへにおはします。こゝにたちかくして、ゐて参りたりし申給へば、いづらさて、几帳のこなたに出させ給へり。またからの御ども、奉りながら

らる。先に南の院にて、車に乗りし時さへ晴がましかりしに、此處は又た一段明かにて、晴がましう顯はなるに、大納言伊周卿は、いと勿体なき程の立派さにて、御下襲の裾長く引かせて、所狭き有様なるが、車の簾を打ち上げて、早く下りよと仰せらる。されど繕ひたる髪も、唐衣の中にて毛ばみ立ち、黒うもあり赤うもある怪しげなる髪の色も、餘りの晴々しさに、見分けらるべき程なれば、いと忙しうて、頓には下りも得せず。先づ前の車の尻に乗りたる女房に、降り給へよと譲るに、同じ心の其の人も耻らひて、大納言殿に

おはしますぞいみじき。紅の御ぞ、よろしからんや。申に、からあやの柳の御ぞ、えびそめの五重の御ぞに、あかいろのからの御ぞ、地すりのからのうす物に、さうがんかされたる御もなど、奉りたり。おり物の色、更になべて、にるべきやうなし。我をば、いかみみるさ、おほせらる。いみしうなん候ひつるなごも、ここにでては、よのつれにのみこそ。久しうや有つる、それは殿の大夫の、院の御供にきて、人に見えぬる、おなじ下がされなが

は退かせ給へ、此處に在しては恐れ多しと言へば、あな耻ぢ給ふものかなと笑ひながら、後に向き返り給ふ。斯る間に辛うじて下りぬれば、大納言殿は己れに寄り添ひ來られて、中宮の御詞には、少納言を宗方などに見せぬやうに、隠して降せと仰せられたれば、態々來たれるものを、左程に我にさへ耻ぢては、中宮の思召す甲斐もなき事なりとて、引き下して、御前に連れ參られ給ふ。斯程に中宮の思召さるゝかと、思ひ奉るも辱なう有り難くて、御前に参りたれば、既に下りたる女房達の八人ばかりは、供養の式の見らるべき端つ

ら、宮の御供にあらん、わろしき人思ひなんさて、こきに下がされ、ぬはせ給ひけるほごに、おそきなりけり、いさすき給へりなご、うちわらはせ給へる。いさあきらかに、はれたる所は、今すこしけざやかにめであう、御ひたひあげさせ給へるさいじに、御わけめの御ぐしの、いさ、かまりて、しるく見えさせ給ふなごさへぞ、きこえんかたなき。三尺の御きちやう、ひさよるひをさしちがへて、こなたのへだてにはして、そのうしろには、た

方に出で居たるが、中宮には、一尺と二尺ばかりの高さの長押の上に在しませり。さても大納言は、己を其の八人ばかりの所に隠し置きて、少納言を將て参りたりと申し給へば、中宮には几帳の此方に出させ給ひて、少納言は何處ぞと立ち眺めさするに、御輿の内なりし其の儘の唐の御衣にて在するが、いみじう美はしけれど、若し紅の御衣を召したらんには、尙ほ美はしう在さんか。其の唐の御衣の中には、表青く裏白き柳色の唐綾織、表は蘇芳裏は縹なる葡萄染の五重、赤色の唐衣、摺繪などの唐の羅、細き泥畫を重ね施したる御

み一ひらを、なかさまにへりをして、なげしの上にしてきて、中納言の君さいふは、殿の御をちの兵衛のかみたゞきみさきこえけるが御むすめ。宰相の君さば、富小路の左大臣の御孫。それ二人が、上にゐて見え給ふ。御覽じわたして、宰相はあなたにゐて、うへ人ごものゐたる所いきて見よと仰らるゝに、心得て、こゝに三人、いさよく見侍ぬべしと申せば、さばさて、あしあげさせ給へば、しもにゐたる人々、殿上ゆるさるゝごどれりなめりさ、わらは

裳などを召させらる。織物の色などは、更に押しなべて、他に比ぶべきやうもなし。さて中宮の仰せらるゝやう、行啓の途すがら、如何に我を見たりしぞとの御事なれば、そは御立派に在らせられしと、言葉にて申し奉るは通常の事にて、なか／＼言ひ盡すべき詞もなかり侍りつと啓すれば、定めて待ち遠き事なりしなるべし、それには仔細ぞあるとて、御物語あらせらるゝには、關白殿には、女院の御供に参りて、人に見られたる同じ下襲を着て、又た此方の供に参らんは、人目悪しとて、殊に下襲を縫はさせ給ひける程に、時刻も遅

せんさ、おもへるかさいへば、うまさへのほごぞなどいへば、そこに入ぬて見るは、いさおもたし。かゝる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、又君の御ためにも、かるくしう、かばかりの人をさへ、おぼしけんなど、おのづから物しり、世の中もごきなどする人は、あいなくかしくき御事にかゝりて、かたじけなければ、あな辱事などは、又いかゞは。誠に身の程過たる事もありぬべし。院の御さじき、所々のさじきども、見わたした

くなりたるが、さても關白殿は、最と衣裳好みせらるゝよと、打ち笑はせ給へり。斯る明るき晴の場所にては、中宮の御姿は、一層鮮麗に芽出たう見え給ひ、御額際の髪を上げさせ給へる釵子に、御髪を分け目の御櫛の、少し片寄りて、美しく見えさせらるゝなごも、其の御姿と共に、喩へんやうなく芽出たし。さて三尺の御几帳一具ばかりにて、此方に控へたる女房の坐席を距て、御前の後には、長さまに縁取りしたる疊一枚を、長押の上に敷きて、其處には道隆卿の伯父なる兵衛督忠君の御女なる中納言の局と、富小路左大臣顯忠

るめでたし。殿は、まづ院の御さじきにまゐりたまひて、しばし有て、こゝにまゐり給へり。大納言二所、三位の中將は、陣ちかうまゐりけるまゝにて、てうごをおひて、いさつきんしう、をかしうておはす。殿上人四位五位、こちたううちつれて、御供に侍ひなみおたり。入せ給ひて、見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、も、からきぬ、みくしげ殿まで、きたまへり。殿の上は、裳のうへに、こうちきをぞき給へる。繪にかきたるやうなる御さまども

公の次男なる左衛門佐重輔の御娘なる宰相の局との二人のみぞ、御前の側なる上座に居給へるが、中宮御覽じ渡して、宰相は彼方に行きて、殿上人どもの居る所にて見物せよと仰せらるゝに、宰相の局は早くも己を召し給ふ御心を察し奉りて、此の疊一枚にても、三人は裕に見侍りぬべしと申せば、然らばとて己を召し上げさせ給へば、下に居たる女房達は、少納言は昇殿を許されたる小舎人なりと、我々を笑はさせんと思へるにかと言ふにぞ、然にはあらず、其の小舎人の馬副の分際なりと答へなごして、さて中納言の局、宰相の局な

哉、今いらい、けふはさ申給ひそ。三四の君の御も、ぬがせ給へ、此なかの主君には、おまへこそおはしませ。御さじきのまへに、ぢんをすゑさせ給へるは、おほろけの事かさて、うちなかせ給ふ。げにさみる人も、なみだぐましきに、あかいろさくらの、五重のからきぬを着たるを、御らんにて、法服ひさくだり、たらざりつるを、にはかにまごひしつるにこれをこそかり申べかりけれ。さらばもし、又さやうの物を、きりしらめたるにさ、の給はす

ごと共に、其處に入り居て、供養を見物するは、身に餘る面目なり。此の殿上を許されたる小舎人と言ふは、未だ元服せざる童にて、昇殿を許されたる、武勇の内舎人なるが、少納言は女にて元服せざるに、中宮の御側近き一段高き席に召し上げさせられたれば、斯くは擬へ言へるなれど、少納言は更に謙遜して、其の小舎人の馬側なりと言へるなり。斯くも我身に面目ある事を、自から書き記して物語るは、如何にも自慢振るやうにもあり、且は己れ如き者を、斯くばかり思召されんも、中宮の御爲めに軽々しくもありとて、物知り顔

るに、又わらひぬ。大納言殿、すこししぞきぬ給へるが、きゝ給ひて、せいそづのにやあらんこの給ふ。ひさこさとして、をかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、あか色のうす物の御ころも、紫のけさ、いさうすき色の御ぞども、さしぬきき給ひて、ほさちの御やうにて、女房にまじりありき給ふも、いさをかし。僧綱の中に、威儀具足しても、おはしまさで、見ぐるしう、女房の中になぞわらふ。父の大納言殿御まへより、松君ゐて奉る。えび染のおり

して世を抵牾く人は、唯だ無益なる事に言ひなし、又た畏れ多き事なりと、批評もすべけれど、君とし仕へ奉る中宮の、召し上せさするに、人の批評を憚りて、畏れ多し、勿体なしと、御辭退申し上げんも如何なれば、御意に任せて参上し侍りたるが、實に身の分に過ぎたる次第にてもありなんかし。さても女院の御棧敷を始めとし、所々の棧敷も見渡され、最と芽出たし。關白殿は、始め女院の御棧敷に参り給ひて、暫時ありて、中宮の御方に参られけるが、伊周道頼の大納言二所と、三位中將隆家卿とは、中宮の御棧敷の前に設

ものゝなほし、こきあやの
うちたる紅梅のおり物など
き給へり。例の四位五位、
いさおほかり。御さじきに、
女房の中にいれ奉る。何事
のあやまりにか、なきのい
しり給ふさへ、いさばえ
えし。事はじまりて、一切
経を、はすの花のあかき
に、一はなづゝにいれて、
僧ぞく上達部殿上人地下六
位、何くれまで、もて渡る。
いみしうたふさし。大行
道、導師まゐり、ふかうし
ばしまちて、まひなごす
る。日ぐらし見るに、目も
たゆくくるしう。内の御つ

けられたる近衛の陣に近う参られけるが、殊
に隆家卿は陣に在りたる装束の、弓箭を帶し
たる儘にて、最と厳めしく可笑しうて在せり。
其外の御供には、殿上人四位五位など、仰々
しく打ち連れ侍せて、關白殿には今しも中宮
の御方へ入らせ給ひ、供養の儀式を見奉らせ
らるゝに、四邊に侍ふ女房のあらん限り、殊
には御櫛匣殿までも、皆々裳に唐衣の行儀正
しき扮装にて、高内侍は、裳の上に小袿を着
給へるを、關白殿一同を見渡し御覽じて、實
に繪に書きたるやうの有様かな、斯く行儀正
しければとて、今日以後、決して今日ほどの

かひに、五位の藏人まゐり
たり。御さじきのまへに、
あぐらたてゝゐたるなど、
げにぞ猶めでたき。夜さり
つかた、式部のせうのりま
さ、まゐりたり。やがて夜
さりいらせ給ふべし、御供
にさふらへさ、せんじ侍り
つさて、かへりもまゐら
ず。宮は、猶かへりてのち
にさ、の給はずれども、又
藏人の辨まゐりて、殿にも
御せうそこあれば、只仰せ
のまゝとて、いらせ給ひな
さす。院の御さじきより、
ちかのしほがまなごやうの
御せうそこ、をかしき物な

窮屈なる目に逢ひし事などは申し給ひ
そ。三の姫四の姫などは弱年なれば、然まで
窮屈ならずとも宜し、裳を脱せ給へ。さても
此の中には、中宮こそ主上なれば、御棧敷の
前に近衛の陣を張らさせ給へるなど、總べて
禁中の如しとて、打ち悦ばせ給へば、實に御
悦も御尤の事なりと思ひ見る者まで、嬉し
涙を催す程なるが、己れ赤色櫻の五重の唐衣
を着たるを、關白殿御覽じて、戲言せさする
やう、我れ赤色の法服一着足らざりければ、
俄に惑ひ作らせたるが、斯くと知りなば、少
納言の唐衣をこそ借るべかりつるものを、然

ご、もてまゐり、かよひたるなど、めでたし。事は院つかさかかへらせ給ふ。院つかさか司上達部なちめなど、此たびは、かたへぞつかふまつり給ひける。宮は、内へいらせ給ひぬるもしらす、安房あはらのすさごもは、二條の宮にぞ、おはしまさんさて、そこにみないきゐて、までご、見えぬほどに、夜いたう更ぬ。内には、そのぬものもてきたらんさまつに、きよく見えす。あさやかなるきぬの、身にもつかぬをきて、さむきまゝに、にくみはらたてご、かひなし。つ

らば俄にはかまに惑まどふまじからんに、然りとは知らで、少納言せうなごんの衣きぬと同じやうなる物を、切り調へたるよと仰おほせらるれば、又た可笑せかしくて笑ひぬ。大納言だいなごん伊周卿いしゅうけいは、少し離れ居給へるが、之を聞き給ひて、其の借からんとせられし衣は、清僧都せうぞうの法服ほうふくなるべしとの給へり。之は少納言せうなごんの姓せいは清せいなれば、法服ほうふくと言ふより戯たはむれて、斯くは申まうされたるが、此日このひの一言一句として可笑せかしからぬはなし。又た大納言だいなごんと御兄弟おんはらからなる隆圓僧都りゅうえんぞうの君きみは、赤色あかいろの羅らの衣ころも、紫むらさきの袈裟けさ、いと薄紫うすむらさきの御衣みぞに、指貫さしぬきを着け給ひ、菩薩ぼさつかと思はる、計りはかの御容ごやう子すにて、女房達にょぼうたちの中に

さめてきたるを、いかにかく心なきぞなごいへば、さなふるこども、さいはれたり。又の日雨ひるめふりたるを、殿とのは、これになんわがすくせば見え侍さむらいぬる、いかゞ御らんすると聞きこえさせ給ふ。御心ごこころおちる、こさわりなり。

混りて、歩き給ふも可笑せかし。僧正そうじやう、僧都そうづ、律師りつしを僧綱そうかうとて、僧官そうくわんの席じやくなれば、隆圓僧都りゅうえんぞうは、他の僧綱そうかうの中に坐まを占めて、威儀ゐぎを正してこそ在おほしませ、女房にょぼうなどに立ち混り給ふは見苦みくるしとて、未だ年若としわかき僧都そうづを、戯から謔かひ笑ひなごす。然る程ほどに、松君まつぎみと申さする御稚兒おんちごを、父ちちなる大納言だいなごん伊周卿いしゅうけいの許もとより連れ参るに、葡萄酒えびぞめの織物おりものの直衣なつし、濃こき紅梅こうばいの綾織あやおりなどを着給へるが、例れいの四位五位ゐなごの人々ひと、多く附つき添そひたり。さて中宮ちゆうぐうの御棧敷みさじきに参られて、女房にょぼうの中に其の松君まつぎみを入れ奉まつれるが、何事なにごとの過失あやまちにや、泣なき叫さけび給ふさへ最いと晴々はれ々し。然

る程に法事終りて、赤き蓮の花の一瓣毎に、
一切經の一卷づゝを入れて、僧俗の別なく、
上達部殿上人は更なり、地下六位の人々に至
るまで、誰れ彼どなく持ち渡る狀の、いみじ
う尊し。さて法會を行ふには、大行導あり、
又た導師ありて、回命すること暫時にして、
舞樂に移るなるが、終日之を見れば、目も弛
みて苦し。斯る間に、主上より關白殿への勅
使として、五位の藏人參りたるが、御棧敷の
前に、床几を据ゑて坐を占めたるなど、實に
ぞ芽出たき。夜になりて式部丞則理、勅使と
して中宮の御前に參りたるが、宣旨には、中

宮即がて夜になりて、禁中に入らせ給ふべけ
れば、則理そのまゝ有りて、御供に侍へどの
仰せなりとて、歸り行かざれば、中宮には、
則理は一先づ禁中に歸るべし、其の後に我
れ入御あらんと仰せらるれども、聞き入れも
せざる程に、又た藏人の辨參りて、關白殿へ
も中宮を參らせよとの勅言なれば、斯くては
御意に従ひて、早く入らせよと、關白殿も申
し添へらるゝものから、即ち入御あらせられ
んとす。斯る所に女院の御方より、續後撰集
に見えたる古歌の「陸奥の千賀の壺竈ちかな
がら、からきは人にあはぬなりけり」との意

を取りて、女院と中宮と、同じ供養の御堂に
間近く居させながら、御對面もなく、御物語
もなきは、千賀の壺竈の壺ならねど、辛き次
第なるよと御消息ありて、御菓物など持たせ
られ、使の往き返りしたるも芽出たし。法事
果て、女院歸らせ給ふ。中宮は既に禁中に
入らせられたれば、此度は、院の司並に上達
部などの人々は、唯だ片つ方の御供のみ仕ふ
まつれり。さて中宮の御方の女房の從者ご
もは、中宮の内裏に入り給ひしを知らず、二
條の御所に還御あらせられしと思ひて、皆々
其處に歸りて、待てごも、誰も見えざる程

に、夜は更け渡りぬ。又中宮の御供に侍り
て、禁中に赴きし女房は、宿直の寢具を持ち
て、今や從者どもの來ぬらんかと、待てごも
誰も見えねば、晴の衣なる鮮麗なるを、
身にも付かず被り着たるに、寒さに耐へ難け
れば、從者の來ざるを憎み腹立てごも詮なか
りけるが、翌朝に至りて從者の參りたるを、
寒からんとは如何に心付かぬぞと、一人の言
へば、皆々同じ心に、從者を警めたりける。
其の翌日雨降りたれば、關白殿には悦び給ひ
て、供養の日に雨降らせしこそ、我が前世
の果報なり、如何に考へられ奉るやと、中宮

されど、そのをりめでたし
と見奉りし御ことども、
今の世の御ことどもに、見
奉りくらぶるに、すべてひ
まつに申べきにもあられ
ば、物うくて、おほかりし
ことども、みなさめつ。

【百卅四】 たふとさき物

に申させ給へる御心の、落ち着かせて安らかなる状は、實に道理とこそ覺え侍れ。されど斯く芽出たしと見奉りし御事ども、關白殿の世を去り給ひて、遺長公の時めき給ふ今の世の、御有様に比べ奉れば、なかく同日の論にあらねば、何事につけても物憂くて、書き記すべき事ども尙ほ多かれど、總べて止めて記さず。

〔注意〕 右の末節「されど其の折めでたしと見奉りし御ことども」は、異本に依りて特に加へつ。以て時運の變遷を窺ふに足るべし。

【百卅四】 たふとさき物

九條しやくぢやう。念佛の
ゑかう。

【百卅五】 哥は
杉たてる門。神樂哥もをか
し。今やうは、ながくて、
くせづきたる。ふぞくよう
うたひたる。

不空三藏の九條錫杖一卷、是に節博士を付けて聲明にするなるが、錫杖の聲を聞けば、一切の衆生、菩提心を起し、總べて功德深きことわりを遍べたる尊きものなり。又た光明遍昭十方世界念佛衆生攝取不捨と言へる念佛の回向も、有り難く尊し。

【百卅五】 歌は
古今集に「我庵は三輪の山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門」と見えたる。又は内侍所の神樂歌も可笑しく。今様歌は、長くて曲あるが善く。風俗歌の善く謠ひたるもの、例へば、難波の都布良江、玉垂、知々良々、

【百卅六】 さしぬきはむらさきのこき。もえき。夏は二あぬ。いさあつき比夏虫の色したるも、涼しげ也。

【百卅七】 かりきぬはかうそめのうすき。白き。ふくさのあかき。松の葉色したる。青葉。さくら。やなき。又あなき、ふぢ。男はなにいろのきぬも。

東路、筑波山、甲斐が峯、伊勢人、常陸歌、荒田、大鳥、八乙女、我門などは善し。

【百卅六】 指貫は濃き紫の指貫、萌黄。夏は二藍。殊に暑き頃は、裏を付けざる生絹の、蟬の羽色と言へる類の、夏の虫の色したるも涼しげなり。

【百卅七】 狩衣は香染とて、淡紅に黄を帯びたる色の薄き。袷紗染の赤色。表は青く裏紫なる松葉色。青葉色。表白く裏赤花なる櫻色。表白く裏青き柳色。青色。表は薄紫の裏白き藤色など善し。されど男は、何色にても似合ふべし。

【百卅八】 ひさへは白き。ひのさうぞくの紅のひさへ。あこめなど、かりそめにきたるはよし。きれぎ、猶色きばみたるひさへなごきたるは、いさ心づきなし。ねり色のきぬもきたれど、猶ひさへは白うてぞ、男も女も、萬の事まさりてこそ。

【百卅九】 わろき物は詞の文字、あやしくつかひたるこそあれ。たゞもじ一つに、あやしくも、あてに、いやしくもなるは、い

【百卅八】 単衣は白の一重。晝の禁中の装束なる束帯の袍の下に着るべき紅の一重。袖などは下着なれど、假初に唯だ夫れのみ着たるも善し。されど紅の色褪せて、黄ばみたるなごを着たるは不似合なり。赤の練色のも、着ざるにはあらねど、矢張り一重は白色なるが、男女共に萬事に優りて善し。

【百卅九】 わろき物は詞の文字を誤用したるは悪きものなり。唯だ一字の用法によりて、怪しくも、貴くも、賤しくもなるは、如何なる譯ぞや。されど斯く

かなるにかあらん。さるは、かう思ふひさ、よろづの事に、すぐれてもえあらじかし。いづれを、さきあしきさは、しるにかあらん。さりとも、人をしらし、たゞさうちおほゆるもいふめり。難義の事をいひて、其事させんさすさ、いはんさいふを、さ文字をうしなひて、たゞ、いはんする、里へ出んするなごいへば、やがていさわるし。まして文をかきては、いふべきにもあらず。物がたりこそ、あしうかきなごすれば、いひかひなく、つくり人さへ、

文字の詮索する我身ながら、萬の事に秀でたるにはあらず。我の優れてこそ、人の善悪長短をも言はめ、我の優れざるに、如何でか人の善悪を知るを得べきや。然はあれど、我は人の事を知らじ、唯だ斯くありたきものなれど、心に思ふまゝを、口に任せて言ふに過ぎず。例へば大切なる事を言はんとするに當りて、「其の事をさせんとすとす言はん」又は「里へ出でんとすとす言ふべきを、と文字を失ひて、唯だ「言はんする」、「里へ出んする」なご言へば、其の意味明かならずして悪し。詞を口に言ひ違へてさへ、悪きこと斯の如し。

いさほしけれ。なほす、定本のまゝなごかき付たる、いさ口をし。びてつくるまになご、いふ人もありき。もさむさいふ事を、見んさみないふめり。いさあやしき事を、男なごは、わざとつくるはで、こささらにいふは、あしからず。わがこさばに、もてつけていふが、心おさりする事也。

況して文に書き誤りては、其の悪きこと言ふべき限りにあらず。又た物語本を寫すに、書き損じなごすれば、言ひ甲斐もなく悪きのみならず、作者さへ後世に誤られて、最と氣の毒なり。又は其の書き損じたる所に、「直す」「定本のまゝ」なご、傍に書き添へたるも、最と口惜し。或は秘點付くる間に、寫し損じたりなご言ふ人もあれど、何れにしても書き誤りたるは宜しからず。さても亦た「物を求む」と言ふを「物を見る」と、皆人の言ふは怪しき事なれど、男なごは怪しと知りながら、態と繕はで、殊更に斯く言ふは悪しからぬ

【百四十】 したがされは
冬は、つゝじ、かひれりが
され、すはうかされ。夏は、
ふたあぬ、しらがされ。

【百四十一】 あえぎのほ

あをいろはあかき。むらさ
きはみどり。

【百四十二】 ひあふぎは
むもん。からゑ。

ど、下卑たる詞を夫れとも知らで、常の我が
詞に用ひなせるは、心劣りせらるゝなり。

【百四十一】 下襲は

冬は、表蘇芳の裏青打なる平絹の躑躅色、裏
表共に紅の皆練、又は蘇芳など。夏は、二藍
又は綾、若くは平絹の白襲なるが善し。

【百四十二】 扇の骨は

青色の地紙には、赤骨を善とし。紫の地紙に
は、緑の骨を善とす。

【百四十二】 檜扇は

檜扇は二十五枚骨なるが、年若き者の持つは、
白糸にて綴ち、糸の餘りに、藤の花を置き物

【百四十三】 神は

松の尾、八幡、此國のみか
ごにておはしましけんこ
そ、いさめでたけれ。みゆ
きなごに、なぎの花のみこ

【百四十三】 神は

山城國葛野郡松の尾神社は、三代實録に、貞
觀八年十一月廿日、位階を進めて正一位を加
ふと見え、延喜式にも松尾神社二座とあり。

にして、要の上二三寸ばかりを残して、握り
持つ所とす。束帯の時は、夏冬共に檜扇を持
つなり。又た女房などの檜扇にも種々ありて、
其の綴ち方にも様々あり。或は糸の餘りそ鮑
結にして、之に花などを付けて用ひ、要は蝶
鳥などを金銀にて打ちて用ふるもあり。され
ど地紙は、無紋無地なるか、又は唐繪なるが
善し。

しに奉るなど、いさめでたし。大原野、かもは更なり。いなり、春日、いさめでたく覺えさせ給ふ。さほどのなど、云ふ名さへをかし。平野は、いたづらなる屋ありしを、こゝは何する所ぞさ、さひしかば、みこしやどりさ、いひしもめでたし。いがきに、つたなどのおほくかりて、紅葉の色々ありし、秋にはあへずさ、貫之が哥思ひ出られて、つくくさ久しう、たゞれたりし。みこもりの神、いさをかし。

即ち大山咋神、市杵島姫神を祀る。八幡神社は、男山の峰にありて、我が國の帝にて在し、ましける應神天皇を始め、神功皇后、玉依姫を奉祀するこそ、芽出たけれ。放生會の神幸なごに、紫の美しき水葱の花を、神輿に奉るも亦た芽出たし。大原野神社は、嘉祥二年に、閑院左大臣藤原冬嗣が、其の氏神なる春日を勸請したるもの。賀茂の社は、上賀茂下賀茂の両社ありて、下賀茂は御祖神、之を玉依姫と申し傳へ、上賀茂は別雷神、之を賀茂建角身命の女なりと申し傳へ、後一條天皇行幸の時、山城國を寄進し給ひて、山城一圓の惣

社となれりと言ふ。伏見の稻荷、奈良の春日、いづれも尊く覺ゆれ。奈良の佐保殿など言ふ名も可笑し。之は淡海公冬嗣の邸と見えたり。平野神社は四座にて、延喜式内の社なるが、其の境内に無くもがなと思はる、小屋などありしを、此處は何する所ぞと問へば、神輿を宿し置くなりと言ひしも芽出たし。忌垣又た瑞垣とも言ひて、社の周圍に設けられたる垣に、蔦などの多く懸りて、四邊には色々の紅葉もあれば、古今集に貫之が、「千早振神のいがきにはふ蔦も秋にはあへずうつろひにけり」と詠めるを思ひ出で、秋は紅葉の景色

【百四十四】崎は
からさき。いかゞさき。み
ほがさき。

に壓されて、鳶も見映えせぬよと、つくづく
と久しう立ち眺めたりし貫之の姿も思ひ浮ば
る。水分神は、大和の宇陀、吉野、葛城にも
ありて、其の水分と言ふ名こそ、最と可笑し
けれ。

【百四十四】崎は

近江の志賀の唐崎。いかゞ崎は、石山詣での
途すがらなること、かげろふの日記に見え、
三保が崎は、三井寺の下にあり。又曰ふ出雲
にありと。但し出雲には美保の關あり、之を
崎とも言ふなるか、然らば事代主神の傳説地
なり。

【百四十五】屋は
まる屋。あづまや。

時そする、いみしうをか
し。いみしう寒きに、夜な
かばかりなごに、こほく
さごほめき、くつすりきて、
つるうちなごして、なんけ
の何がし、時うしみつ、れ
よつ、なご、あてはかなる
こゑにいひて、さきのくひ
さすおさなど、いみしうを
かし。れ九つ、うし八つな
ごこそ、ささびたる人はい

【百四十五】屋は

蘆の丸屋など言ふ小き賤の屋。さては四方へ
屋根を葺き下して、唯だ四本柱の壁作もなき
四阿なご。
禁中にて時を奏する事は、古は陰陽寮の漏剋
に隨ひて奏するなるが、其の次第いと可笑し。
冬の夜の甚く寒きに、而かも時更けたる眞夜
中頃、時を奏する官人の、こほくくと咳きな
がら、杵引き摺り歩き來て、鐘鼓の弦を引き
鳴し、何家の某と、先づ守丁たる己が名を名
乗り上げて、時は丑三つ、又は子の四つなど
、明朗に聲張り上げ言ひて、時杭とて、十

へ。すべて何もく、よつのみぞ、くひはさしける。

日のうら／＼さあるひるつかた、いたう夜ふけて、れの時なご思ひまゐらす程に、をのこごもめしたるこそ、いみしうをかしけれ。夜中ばかりに、又御ふえのきこえたる、いみしうめでたし。

成信 中將は、入道兵部

卿の宮の御子にて、かたしをかしげに、心ばへも、いさをかしうおはす。伊豫守かれすけがむすめの忘られて、いよへおやのくだりしほど、いかにあはれなりけんさこそをばえしか。あかつきにいくさてこよひおはしまして、有明の月に、かへり給ひけん、なほしがたなごこそ。そのかみ、つれにぬて、物がたりし、人のうへなご、わるきはわるしなご、のたまひしに。

二時の時々、杭を打つなるが、其の打つ音なご、夜有けて静なれば、枕に響き聞ゆるぞ、いみじう可笑し。世間にては、丑八つ、子九つなご言へど、禁中にては、總べて時杭を刺すは、何時も四つ宛ばかりなり。

日の麗らかに照りたる晝つ方、又は夜いたく更けて、最早子の時ばかりならんと思はる、頃、主上よりの御召にて、殿上人の御前に参るこそ、いみじう可笑しけれ。さては夜中の頃、主上の御慰みの笛の音の聞えたるも、亦たいみじう芽出たし。

源 成信卿は、兵部卿致平法親王の御子にて、

長徳四年左中將に任せられたるが、風姿爽颯として、實に貴公子たるに背かず、其の資性亦た慧敏にして、心ばへも人に優れさせらる。曾て伊豫守兼輔の女と懇なりしが、何時しか其の中絶えたれば、兼輔の伊豫に赴任するに臨みて、彼の女も父に従ひて下り行く心の中は、如何に哀れなるよと察するに餘りあり。いよ／＼明日の曉に出立すと言ふ前夜、成信卿名残を惜みて、彼の女を訪れ給ひ、一夜を物語に明かして、有明の月に歸り給ひけん直衣姿の美しさなご、定めて彼の女の思ひの種なりしなるべし。是より先き、彼の女の未だ

物いみなど、くすしうするものゝ、なをさうにてもたる人のあるが、こゝ人の子になりて、平なごいへど、たゞもこのしやうを、わかき人々、こゝぐさにてわらふ。ありさまも、こゝなる事なし。兵部さて、をかしきかたなごもかたきが、さ

成信卿に忘れられざりし頃には、成信卿常に通ひ行きて、親しく物語などし、人の身の上も批評して、善きは善し、悪きは悪しと、公平に語られつるものを、偕ても如何にして、彼の女を見捨つるに至りしか。中宮の御前の女房の中に、潔齋持戒などを正しくする者にて、名を姓にて持つ人のあるが、例へば赤染衛門と言ひ、藤式部と言ふが如く、兵部と言へる名の女房ありて、人の養女になりたれば、養家の平姓を取りて、平の兵部と言ふべきを、若き女房達は、唯だ元の姓なる兵部とのみ言ひて、口すさび笑ひなごす。此

すがに人なごに、さしまじり心なごのあるは、御まへわたりに、見ぐるしなご仰らるれど、腹きたなくしりつぐる人もなし。一條の院つくられたる一間の所には、つらき人をば、さらによせず。東の御門に、つこむかひて、をかしき小びさしに、式部のおもももるごもに、よるもひるもあれは、うへもつねに、物御らんじに出させ給ふ。こまひは、みなうちになんさて、南のひさしに、ふたりふしめるのちに、いみしうたく人のあるに、うるさしな

の兵部の顔貌は、別段人に優れて美しきにもあらず、又た風流心もなき性質なれば、流石に女性の弊として、物言に差し出がましくて、中宮の御前などは、其の風流ならぬを見苦しと仰せらるれど、誰も意地悪くて、之を兵部に告げ知らせる者もなし。頃しも一條院の造營ありて、其の一間の所には、心淺き人などは通はさで、式部の御許と己と二人のみ、晝夜詰め切り居たるが、其の間は、東の御門に差し向ひて、小廂なども面白く出来たるが、中宮にも常に此の間に入御あらせて、物を御覧じなごし給ふ。或る日、此夜は禁中にて皆

どいひあはせて、れたるやうにてあれば、猶いみしう、かしかましようよぶを、あれおこせ、空そらならんさ仰おほられければ、此兵部へうぶきておこせど、れたるさまなれば、更さらにおき給はざりけりさ、いひにいきたるが、やがてあつきて、物いふなり。しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ。權中將ごんちゆうじやうにこそあなれ、こは何事を、かうはいふさて、只みそかにわらふも、いかでかしらんあかつき。曉あかつきまでいひあかして、かへりぬ。此君このきみいさゆしかりけり、さらにおはせんに、物

々寝やすまんとして、式部しきぶと己おのれとは、南みなみの廂ひさしの間に臥ふしたるに、男をとこの來きて、烈はげしく戸とを打うち叩たたけば、二人ふたりは面倒めんたうなりと言いひ合あはせて、眠ねむりたる風ふうにて音をとも立たてざりしかば、尙なほも烈はげしく叩たたきて、囂かまひしう呼よび起おこすにぞ、中宮ちゆうぐうには兵部へうぶを召めして、少納言せうなごんを起おこさせよ、大方おほかた空寝そらねならんと仰おほせらるれば、兵部へうぶ來きたりて起おこせども、眠ねむりたる狀さまなりけるに、乃すなはち此この由よしを、彼かの戸とを叩たたける男をとこに告つげんとて、出いで行ゆきたるまゝ、即やがて其その男をとこと何事なにごとかを物語ものがたるなりけり。それも暫時しばしの間あひだならんと思おもへるに、然さはあらで、夜よるいたく更ふくる迄までも耳語みみごきけり。さても其その

いはじ、何事をさはいひあかすぞなごわらふに、やり戸とをあけて、女をんなはいりぬ。つさめて、例れいのひさしに物いふをきけば、雨あめのいみしうふる日ひ、きたる人ひとなん、いさあはれなる。日ひごろおぼつかなく、つらき事ことありさも、さてぬれてきたらば、うき事こともみを忘わすれぬべし。さば、なごていふにかあらんを。よべきのふの夜よるも、それがあなたの夜よるも、すべて此この比ひは、うちしきり見みゆる人の、こよひもいみしからん雨あめに、さばらできたらんは、一夜いちやもへたてじと思

男をとこと言いふは、權中將ごんちゆうじやう成信卿なるのぶけなり。兵部へうぶは何なにの用もちありてか、斯かくは打うち語かたふぞと、式部しきぶの御許ごもとと共に、密ひそかに笑わらへども、如何いかで兵部へうぶの知る由よしあらん。曉あかつきまでも言いひ明あかして、中將ちゆうじやうは歸かへり行きぬ。此この中將ちゆうじやういと由よし々よしき人ひとなり、更さらに己おのが局つぼに來きまさば、物ものをも言いふまじとこそ思おもはれたれば、夜よの明あくるまでも、何事なにごとを語かたふぞと言いひ笑わらふに、遣戸やりとを開あけて、兵部へうぶは立たち去さりたり。翌朝よくてうれい例れいの一條院いちじゆうゐんの廂ひさしの間まにて、彼かの兵部へうぶが話はなしを人ひとより聞きくに、雨あめの烈はげしく降ふる日ひも厭いとはず來きたる男をとこは、いと哀あはれに情なさけの籠こもるものにて、憂うれき事ことも皆みな忘れわすれつべしと、兵部へうぶ

ふなめりさ、あはれなるべし。さて日比も見えず、おぼつかなくてすぐさん人の、かゝるをりにもこんなば、さらに又心ざしあるには、え。じごこそおもへ。人の心くなればにやあらん、物見しり、思ひしりたる女の、心ありさ見ゆるなごをばかたらひて、あまたいく所もあり。もこよりのますがなごもあれば、しげうしもえこねを、猶さるいみしかりしをりに、きたりし事など、人にも語つがせ、身をほめられんさ、思ふ人のしわざにや。それもむ

の言ひけるとぞ。さても兵部は、何ぞて斯る事を言ふにかと察するに、昨夜も一昨夜も、又た其の前夜も、すべて此の頃は連夜來る男の、今夜も烈しき雨を冒して、障りもなう來たるは、一夜も缺さじと思ふ男の、情ある心の哀なるにて、さては憂き事も忘れつるなるべし。尤も日頃は絶えて見えず、覺束なう憂き事に思ふ男は、殊更雨の降るに來るとしも思へず、況して他の女に志ある者は、如何でか來るべきことあらんと思へば、雨を冒しても來るは、情あるに相違あるまじ。されど男は、其の心々にて、様々の事をする者にて、

げに心ざしなからんには、なにじにかは、さもつくり事しても、見えんさもおもはん。されど雨のふる時は、たゞむつかしう、けさまではれくしかりつるそらさもおぼえず、たくめて、いみしきほそごの、めでたき所さもおぼえず。ましていささらぬ家などは、さくふりやみれかしごこそおぼゆれ。

一概に情深しと思ふは、大なる誤りなるべし。何となれば、物見なごにて知り合となりたるか、又は我より思ひて知りたる女なごの、心ありと見ゆる者を語らひて、通ひなごもする所多きが上に、尙ほ本來妻と定まれる者もあれば、然まで繁くは來もえせざる筈なるに、而かも雨を冒して迄も來るなるは、其の女に心深く思はせて、親切なる男よと、人にも語り傳へさせて、我身を褒めさせん爲めの仕業なるべし。尤も無下に志なき女には、然る作り事して迄も通ふ筈なければ、たとひ思はせ振りしても來るからには、少しは其の女に志

月のあかききたらん人は
しも、十日、廿日、一月、
もしば一年にても、まして
七八年になりても、思ひ出
たらんは、いみじうをか

あるには相違なければ、さても雨降る夜は、
煩はしく難儀なるものにて、今朝までは晴々
したる空なりしとも思へざる程の降り方の憎
くて、折角立派なる廊の局なごの、面白き所
にて會合しながら、雨の爲めに興を失はるれ
ば、況して廊ならぬ家なごにては、疾く降り
止めかしの思ふ心の切なるに付けて、可笑し
き事も、哀れなる事もなきものならんかし。
月の明なる夜に、尋ね來らん男と共に、月に
憧憬れ樂みたる事は、十日廿日、一月は忍な
り、若くは一年、又は七八年の後になりても、
其の當時を思ひ出で、は、いみじう面白く覺

さおぼえて、えあふまじう
わりなき所、人めつゝむべ
きやうありとも、かならず
立ながらも、物いひてかへ
し、又さまるべからんを
ば、さめめなごしつべし。
月のあかきみるばかり、さ
ほくもの思ひやられ、過に
し事、うかりしも、うれし
かりしも、なしさおぼえし
も、只今のやうにおぼゆる
をりやばある。こまの、物
がたりは、何ばかりをか
き事もなく、詞もふるめ
き、見所おほかられど、月
にむかしを思出て、むしば
みたるかはぼりさり出て、

ゆるものから、相會ふには都合宜しからざる
所、又は人目を憚る場所なりとも、月明なる
夜は、流石に其の男を歸しもならず、月に心
を引かれて、たとひ立ながらも、必ず物語し
て後に歸し、宿るべきやうならば、無理にも
宿めなごもせん程なり。若し夫れ然る人もな
くて、唯だ月の光を見るのみにても、「三五の
夜中、月色新なり、二千里の外、古人の心」
と朗詠集にもある如く、遠くを思ひ遣り、或
は過にし事の、憂かりしもの、嬉しかりし
の、惜しと思はるものなど、喜怒哀樂の總て
の出來事を追想して、今現在の事のやうに、

もさ見しこまにさ、いひて
たてる、いさあはれ也。雨
は、心もさなき物さ、思ひ
しみたればにや、かた時ふ
るも、いさにくゝぞある。
やんごさなき事、おもしろ
かるべき事、たふさくめで
たかるべき事も、雨だにふ
れば、いふかひなく口をし
きに、何か、其ねれてかこ
ちたらんが、めでたから
ん。げにかたの、少將もご
きたる、おちくぼの少將な
ごはをかし。これも、よべ
なさゝひの夜も、有しかば
こそをかしけれ。足あらひ
たるぞ、にくゝさなかり

感じ浮ばん場合なきにあらず。月夜の面白き
は、尙ほ之に止まらず、彼の高麗野の物語は、
是れぞと特に言ふべき程の面白き處もなく、
又た詞も古めきて、見所多からねど、唯だ其
の骨子とすべきは、月に昔を思ひ出して、紙
魚の巢となりたる扇を取り出し、故見し高麗
にと言ひて、古郷に立ち還る所の物語の一節
のみぞ、最と哀はれなる。斯くも月の夜は興
趣深きものなれば、之に對して、雨は心もこ
なきこと限りなし。尤も人は知らず、己は唯
だ雨と言へば厭はしくて、思ひ亂るればにや、
暫時の間降るさへも、最と憎くければ、貴き

けん、さらでは何か。風な
ごの吹く、あらくしき夜
きたるはたのもしくて、な
かしうもありなん。雪こ
そ、いさめでたけれ。忘れ
めやなご、ひさりごちて、
しのびたる事はさら也。い
ささあらぬころも、なほ
しなごは、更にもいはず、
かり衣、うへのきぬ、藏人
のあをいろなごの、いさひ
やまかにぬれたらんは、い
みしうをかしかるべし。ろ
うさうなりさも、雪にだに
ぬれなば、にくかるまじ。
むかしの藏人は、よるなご
人のもさなごに、たあを

事も、面白かるべき事も、芽出たかるべき事
も、雨さへ降れば全く興を失ひて、言ひ甲斐
もなく口惜しければ、何ぞ其の濡れ啣ちて忍
び來たる男の、芽出たきことが之れあらん。
彼の落窪の君に心を懸けたる交野の少將に替
りて、同じ落窪の君に通ひたる右近少將など
は可笑し。之も兵部の女房が話ならねど、昨
夜も一昨夜もといふ風に、毎夜續けて通ひけ
るが、或る夜雨激しく降りたれば、右近少將、
今夜は得行くまじと言ひ遣り給へるに、落窪
の女君「世にふるを憂き身と思ふ我袖の濡れ
はじめける宵の雨かな」と詠みて、世に年経

色をきて、雨にぬれても、しほりなどしけるさか。今はひるだにきざめり。只ろうさうをのみ、うちかつきためれ。あふなどのきたるは、ましていさをかしかりし物を、かく聞て、雨にありかぬ人やばあらんすらん。月のいさあかき夜、紅の紙のいみしうあかきに、たゝあらずとも書たるを、ひさしにさしいれたるを、月にあてゝ見しこそ、をかかりしか。雨ふらんをりは、さはありなや。

り老ゆるを憂しと思ふ我が身の青春は、今を措きて再びせざるに、今夜の雨にて行くまじと仰せらるることの悲しさに、始めて涙の雨に袖を濡すことなるが、されど此の雨は宵の間の事にて、即がて止みぬべければ、切なる我思を察し給ひて、努めて來られんことを祈り待つとの意を言ひ送りたれば、少將も今は思案に餘りて、帶刀と言へる従者一人を伴ひて、雨を冒して徒歩にて參り、帶刀まづ水もて來りて、足を洗はさせなごしたるは、如何に汚なく憎からずして何ぞ。雨に比べては、風などの荒々しう吹ける夜に來たるは、却り

て頼もしく、又た面白くもありぬべし。雪は風よりも尙ほ芽出たし。此の廣庭の雪の景色忘れめやなど、獨語し賞で、忍び來たりたるは更なり然る景色善からぬ。所とても、直衣、狩衣、袍、若くは藏人の青色の袍などの、雪降りかゝりて冷たからんも、いみじう面白かるべし。たとひ緑衫を着たる六位の藏人にも、雪に濡れなば、何ぞか憎からん。昔の藏人は、夜など人の許に行くにも、唯だ青色の衣のみを着て、雨に濡れても、自から絞りなどしけると聞けど、今の藏人は、夜は尙更ら、晝にても青色などは着ず、僅に六位の藏

人などが、青色の袍なる緑衫を打ち被くのみにて、衛門兵衛などを兼ねたる藏人は、況して美々しき装束するものを、彼の兵部が雨に來る人の嬉しくて、日頃の憂き事も忘れつべしと言へるを聞きては、雨降りて美々しき装束を汚すとも、如何でか歩き行かざる者あらんや。されど月の明らかなる夜、いみじう赤き紅の紙に、別儀もなく唯だ安否を問ふまでの詞を書きたるものにて、廂に差し入れたるを、月の光りに読み見るこそ、實に可笑しけれ。雨降る夜は、夫れさへも出來ずして、何の興もなきものなり。

つれに文おこする人の、何かは、いまはいふかひなし。いまはなごいひて、又の日おこもせれば、さすがにあけたてば、文の見えぬこそさうさうしけれと思ひて、さてもきはくしかりける心かななど、いひてくらしつ。又の日雨いたうふる、ひるまで音もせれば、むけに思ひたえにけりなごいひて、はしのかたにぬたる夕ぐれに、笠さしたるわらはのもてきたるを、つれよりもさくあけてみれば、水ます雨のさある、いさおほくよみ出しつるうたごもより

毎日手紙を寄來す男の、女の言ひ甲斐なきを啣ちて、今は最早手紙を遣るも詮なしとて、其の翌日も何の便なれば、實は己れ情なくて過しもの、夜明ければ文もて來しもの、其の文の見えざるこそ、流石に淋しけれと思ひて、さても餘りの現金さかな、と言ひながら、其の日も暮れたるに、其の翌日は雨激しく降りて、午前中は何の音沙汰もなきま、さては全く思ひ絶ちたるにやと、佗しげに言ひつゝ、端居したる夕暮時、笠さしたる童の文を持ち來るを、受取る間さへ待ち兼ねて、何時もよりも早く披き見るに、古今集に「眞

はをかし。

たゞあしたはさしもあらず、さえつるそのの、いさくらくかきくもりて、雪のかきくらしふるに、いさ心ぼそく、見出すほどもなくしるくつもりて、猶いみしうふるに、隨身だちてほそやかに、びびしきをのこの、

孤刈る淀の河水雨ふれば、常よりことにまさる我が戀」とあるを取りて、「水増す雨の」とのみ記されたるは、詞短けれど、今日の雨に水増す如く、我が戀しさも彌増さるとの意深くて、多くの歌を詠みたるよりも、遙に優れるも面白し。

今朝は雪降るべくも見えざる空模様なりしにいと寒く互えて、一天暗く掻き曇り、即がて雪の霏々として降り來る心細さよ。間もなく一面の銀世界、唯だ眞白に積りて、黒き所なごは、何處に見出さんやうもなく、尙ほますく降るばかりなるに、近衛の隨身かと思は

からかさして、そばのかたなる家のさより入て、文をさしいれたるこそをかしかれ。いさしるきみちのくにかみ、しろき色紙のむすべたる、うへにひきわたしけるすみの、ふさ氷りにければ、すそうすになりたるを、あけたれば、いさほそくまきて、むすびたるまきめば、こまなくさくぼみたるに、すみのいさくろううすく、くだりせばに、うらうへかきみだりたるを、うちかへし久しう見るこそ、何事ならんぞ、よそにて見やりたるもをかしかれ。ま

る、細やかにて美々しき男が、傘さして、側家の戸より入りて、文を差し入れたるこそ可笑しけれ。其の文は、最と白き陸奥紙にて、白き色紙の結ばれたる上に、引き渡したる封じ目の墨の引かん間に不圖筆の凍りたれば、半頃より下の墨色、薄くなりたるを面白しと見て、さて封を披き見るに、紙の最と細く墨み巻かれたれば、結びたる巻目は、細々と皺になりて窪みたるに、濃き薄き墨色取り混せて、一行毎の間も狭く、細かに書かれて、裏面に書き亂したるを、打ち返し久しう見ること、何事の情報ならんと、傍目ながら見

いてちほほと云ふ所は、いさゆかしけれど、さほうたるは、くろき文字などはかりぞ、さなめりさおほゆるかし。

ひたひがみながやかに、おもやよき人の、くらきほどに文をえて、火さもすほども心もさなきにや、火をけの火をほさみあげて、たごくしげに見ぬたるこそなかしけれ。

【百四十六】 きらくしき物

き物

やるも可笑しく、況して文見るく微笑むあたりは、如何なる面白き事の書かれたるにかと思はれて床しけれど、遠く離れて見居たるにては、唯だ文字の黒う見ゆるばかりを、夫れと察するに過ぎざるなり。

額髪長くて、容貌美はしき女が、日の暮つ方に手紙を受取りたるに、燈火を點す間も心もどなき程に、早く其の手紙を見まほしきにや、火鉢の火を挟みて、覺束なげに行を追ふて、見居たる状こそ可笑しけれ。

【百四十六】 きらくしき物

近衛の大將の先追はせたる警蹕の有様は、威

大將の御さきおひたる。孔雀の御讀經。御修法は五大尊。藏人の式部のせう。白馬の日おほちれりたる。御齋會、左右衛門佐すりぎぬやりたる。

季の御讀經の熾盛光の御

儀嚴めしくて麗はし。又た孔雀の御讀經。不動尊を中央にして、金剛夜叉、大威徳などの五大明王の法を、禁中にて行はせらるる儀式。正月七日の白馬の節會に、藏人の式部丞が、大路を練り歩く状。又は正月八日より十四日まで、大極殿にて最勝王經を講じて、國家の安泰を祈る御齋會に、左右衛門佐が、宣旨を蒙りて檢非違使佐となり、摺衣着たる姿の嚴めしく、庭中の座に着きて、非違を糾察すべく控へたる状など、威儀正しく見る甲斐ありてきらくし。

二月八月の春秋二季に、何れも四日の間、大

修法。神のいたくなる折に
神鳴の陣こそいみしうおそ
ろしけれ。左右大將中少將
なごの、みかうしのつらに
侍ひ給ふ、いさをかしげ也。
果ぬるをり、大將のおほせ
て、のぼりおりさの給ふら
ん。

極殿にて大般若經を講せらるるを、季の御讀
經と言ふなるが、此の四日間の初後の両日は、
親王以下參議なごに至るまで、皆々殿上の座
に就きて、威儀さらしくしく、見るも甲斐あ
り。又た三藏施護の譯に係る大威徳金輪佛頂
熾盛光如來消除一切災難陀羅尼經一卷。不空
三藏の譯に係る佛說熾盛光大威徳消災吉祥陀
羅尼經なごの、熾盛光の御修法も、亦た嚴し
くさらしくし。又た雷鳴烈しき折、左右近衛
の陣を、主上の御座所近くに張りて守護し奉
るを、神鳴の陣と言ふなるが、其の威儀の嚴
めしきこと、恐ろしき迄なるが、左右近衛の

こんげんろくの御屏風こそ
をしうおぼゆる名なれ。
かんじよの御屏風は、を
しくぞ聞えたる。月次の御
屏風もをかし。

大中少將なご、御格子の表に居並び給ふ状の
可笑しげなり。雷も鳴り止みて、護衛も果つ
れば、大將の言葉にて、「昇り下り」と號令す
るも可笑し。
坤元録にある山河なごの状を、繪にかきたる
屏風。前漢書後漢書に見えたる記事を、繪に
かきたる屏風なごを、坤元録の屏風、漢書の
屏風と言ふ名さへも、雄々しく聞えけれ。又
た月次の御屏風とて、年中行事を繪に書きた
るも面白し。

〔注意〕 右の坤元録の一節は、百四十六段の「さらしく
しき物」の中に相應せざれば、此の前に脱文あ
るにや、前後の連絡覺束なきやうなり。

かたがへなごして、夜ふかく歸る、さむきこそいさわりなく、おさがひなごも皆おちぬべきを、からうしてきつきて、火をけ引よせたるに、火のおほきにて、露くるみたる所なくめでたきち、こまかなるはいのながまり、おこし出たるこそ、いみじううれしけれ。物なごいひて、火のきゆらんもしらするたるに、こそ人の来て、すみいれておこすこそ、いさにくけれ。されどめぐりにおきて、中に火をあらせたるはよし。みな火を外さまにかきやり

方違に行きて、夜遅く歸る途すがら、詮方なき迄に寒くて、願なごも皆落ちんとする程なるを、漸く我が家若くは局に歸り着きて、何は偕て措き、先づ火鉢を引き寄せたるに、大なる火の、少しも黒みたる所なく、赤き立派なるを、篩かけたる細かなる灰の中より、掘り起したる程嬉しきはなし。されど物語などして、其の火の消ゆるをも知らず居たるに、他人の來りて、心もなく炭を入れ込みて、火を起したるこそ、奇麗に手入れたる火鉢にも似付かず、最と憎きものなれ。されど炭を周圍に置き、火を中央に取り込めたるは善し。

て、すみをかされおきたるいたふきに、火もおきたるが、こそむつかし。雪いさたかく降たるを、れいならず御格子まゐらせてすびつに火おこして、もの語なごしてあつまりさふらふに、少納言よ、かうるほうの雪はいかならんさ仰られければ、みかうしあげさせ、みす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ。人々も皆さる事はしり、哥なごにさへうたへど、思ひこそよちさりつれ、猶此宮の人に

然はあらで、皆火を周圍に掻き遣りて、中に炭を積み重ねたる頂上に、火を置きたるなごは、いみじう厭はし。雪降り積みたれば、常は御格子を上げて雪見せらるゝに、今日は寒さ最と酷しければ、例にもあらず御格子を下して、爐に火を起して物語なごしながら、中宮の御前に集り侍ふに少納言よ、今日あたりは香爐峯の雪景色は如何あらんと、中宮の仰せありければ、則ち御格子を上げさせて、御簾を高く捲き上げたるに、最と興ありとて笑はせ給ふ。之は白樂天の詩に、遺愛寺の鐘は、枕を敲て、聽き、香

は、さるべきなめりといふ。

陰陽師のもさなるわらは
べこそ、いみしく物はしり
たれ。祓なごしに出たれ
は、さいもんなどよむ事、
人はなほこそきけの。そさは
しりて、しろき水いかけさ
せよともいはぬに、しあり

爐峯の雪は、簾を撥げて看る」とあるを思ひ
付きたるに依る。尤も此の詩は、皆人の知れ
るものにて、尙ほ且つ朗吟するものなれど、
斯る場合に思ひ付きもせざるを、流石は博識
なる中宮の御前に侍ふだけに、女房ながらも
相應はしき者なりと、人の褒め稱へられたる
も、却りて耻かしき心地ぞする。
陰陽寮の官人にて、卜占祈禱祓除などを司る
陰陽師の許なる童こそ、實に物事に敏捷なれ。
祓なごしに出たれば、祭文などを讀まんは、
童ながらも陰陽師の家の者として、別段不思議
とも人は考へざれど、さて祓して物の怪なご

くさまの、れいしり。いさ
かしうに物いせぬこ
そ、うらやまじけれ。さら
ん人もがな、つかはんこ
そおぼゆれ。

の絶え入りたる時、其の患者の面に冷水を注
げよとも言ひ付けざるに、そと立ち走りて、
其の事を行ふ状の、如何にも物馴れて、師を
して彼是と指圖せしめざるこそ羨ましかれ。
斯る氣の利きたる従者を、我等も召し使ひた
くこそ覺ゆれ。
三月の頃、物忌みして持戒潔齋せんため、假
初なる人の家に移り行きたるに、はかくし
き庭樹などもなく、柳はあれど、それも糸を
引きたる優雅の趣にはあらで、葉廣くて見憎
げなるを、此は柳にはあるまじと言へば、斯
るものもありなど答ふるに、

ちもありなごいふに、さかしらに柳のまゆのひるごりて春のおもてをふする宿かな
さこそ見えしか。其比又おなじ物いみしに、さやうの所に出たるに、二日といふひるつかた、いさゞつれづれまさりて、たゞ今もまゐりぬべき心ちするほどにしも、おほせ事あれば、いさうれしくて見る。あさみどり紙に、宰相のきみ、いさをかしくかき給へり。いかにして過にしあさをすぐしけんくらしわづるふきのふけふかな

さかしらに柳の眉のひろごりて春の面をふする宿かな
と詠むべき有様なりけり。此の歌は、眉と言ひしより面と懸けて、柳の糸のやうなる眉したる美人の、花の盛りの春の姿も、斯る葉の廣ごりたる無風流の柳ありては、實に面伏せなる宿とこそ言ふべけれとの意なり。又た同じ頃、物忌みにて、矢張り假初なる人の家に移りたるに、初日の徒然なりしに、況して二日目の晝つ方は、いよ／＼徒然なるまゝに、唯今直ぐにも、中宮の御方へ歸り参らまほしき心地する程なりし所へ、恰も中宮の御文あ

きなん。わたくしには、けふしもちさせの心ちするを、曉だにさくさあり。此君の給はんだに、をかしかるべきを、まして仰せこのさまには、おろかならぬこゝちすれど、けいせん事はおぼえぬこそ。雪のうへにくらしかれける春の日をさころからさもながめつる哉
わたくしには、こよひのほごも、少將にやなり侍らんすらんさて、あかつきにまゐりたれば、きのふの返しくらしかれけるこそいさにくし、いみじうそしりきさ

りたれば、限りもなう嬉しくて、拜し見るに、淺緑の紙に、宰相の局の代筆にて、いと芽出たく、
いかにして過にしあさをすぐしけん
くらしわづるふきのふけふかな
と中宮の御歌を書き認めて、さて次に宰相の局の私信として、御許を待ち作びて、今日の一日を千歳の思ひすれば、今夜の明け果つるまでもなく、曉に疾く歸り参られよとあり。さて中宮の御歌は、少納言の宮仕して、未だ二三日ばかりなる程の事なれば、少納言の参らざりし以前は、何として日を送りしをや、

おほせらるゝ、いと化しう
誠まことにさる事や。

昨日きのふ今日けふばかりも、千秋せんしゅうの思おもひして暮くらしかぬるものをこの御意ごいなるが、宰相さいしやうの局つぼねの私信ししんのみにても芽出めでたきものを、況まして其その私信ししんも、御意ごいの趣おもむきを傳つたへられたるものと察さつするからに、尙更なほさら勿体もったいなき心地こころすれば、憶おくして御返事ごへんじ申し上げもならず、唯ただだ、雲くもの上に暮くしかねける春はるの日ひを

ところからともながめつるかな

と御返歌ごへんかつかまつり、宰相さいしやうの局つぼねへの私信ししんには、今夜こよひの程ほども、深草くさふかの少將せうしやうにやなり侍はべらんずらん、彼の少將せうしやうは、百度通も、たひかよへと言いひし女の許もとへ、九十九度たひゆ行いきて、唯ただだ今夜こよひ一夜ひとよを待まちあへず

して失うせられたれば、己おのれも今夜こよひ一夜ひとよを待まちかぬるこの意こころを答こたへ置おきて、翌朝よくあさまた夜よの明あけざる程ほどに、御前ごまへに参まりたるに、中宮ちゆうぐうには御戲ごんたはむれ言ことあらせられて、昨日きのふの返歌へんかに、清少せいせうの淋さびしきは、春はるの日長ひながなるに依よるとは言いへ、全まく住すむ所柄ところがらとのみ思おもひなせるものから、禁中きんちゆうに待まち侘わびたる御前ごまへの徒然つれづれをも知しらず、里居さとゐしたりしこの心こころもとなさよ、疾とく禁中きんちゆうに参まるべしこの意こころなるは明あらかなれど、くらしかねたるとは、我わが歌うたを其その儘ままに取り過すぎて憎にくからずや、甚いたく誹そしり居ゐたるなりと仰たはせらる。實げに此この歌宜うたよろしからねば、眞實まことに然さあるべきこ

清水にこもりたるころ、ひぐらしのいみじうなくを、あはれまきくに、わざと御使しての給はせたりし、からのかみのあかみたるに、山ちかき入あひのかれのこゑごごにこふるこゝろのかすはしるらんものを、こよなのながあやさかへ給へる。紙なごのなめげならぬも、さり忘れたるたびにて、むらさきなるはちすの花びらに、かきてまゐらす。

とにて、最と佗しかりける。清水の観音堂に籠りたる頃、蜩のいみじう鳴くを興ありと聞きけるに、わざと中宮よりの御使ありて、赤色かゝりたる唐の紙に、山近き入相のかねの聲ごごに戀ふる心のかすはしるらんものを、此上もなき長き寺籠りかなと書かせ給へり。此の御歌は、清水堂は山に近ければ、日の入相の山に近くて、夕暮になり行くを言ひ懸け、其の夕暮の鐘の聲々を聞くにつけても、少納言を戀ひ慕ひて、早く歸り來よと待ち居る我が思ひの數々を、慮り知るならんに

十二月二十四日、宮の御佛名のそやの御導師聞て、出る人は夜なかも過ぬらんかし。里へも出、もしは忍びたる所へも、夜のほご出るにもあれ、あひのりたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降つる雪の、けさはやみて、風などのいた吹つれ

偕ても籠り居ることの久しさよとの意なり。されど旅の宿りなれば、御返事を認むべき程の紙も忘れて、手許に持ち合はさねば、紫色なる蓮の花弁に、取り敢へず書きて參らせけり。十二月の廿日あまり四日の夜は、中宮の御方にて、御佛名を行はせられたる初夜なるが、御導師の誦經説法も濟みて、聽衆の退り出でたるは、早や夜半も過ぐる頃なりしならん。之より家里へ歸る者もあれば、忍びたる所へ、夜の明くる迄の間とて、男女同車して行くもあるが、其の行き着く迄の途すがらの同車の

ば、たるひのいみしうし
だり、つちなごこそ、むら
くくろきなれ。屋のうへ
は、たおしなべてしろき
に、あやしきしづの屋もお
もがくして、有明の月のく
まなきに、いみしうをか
し。かれなごおしへぎたる
やうなるに、すぬしやうの
くきなごいはまほしきやう
にて、ながくみじかく、こ
ささらかけわたしたるを見
えて、いふにもあまりてめ
でたきたるひに、下すだれ
もかけぬ車のすだれを、い
さたかくあげたるは、おく
までさし入たる月に、うす

有様こそ、實に面白きものなれ。昨日以來降
りたりし雪も、今朝は止みて、風烈しく吹き
ければ、軒の雨雫の氷柱となりて垂れ下り、
地面の上は、雪のむら消えて、黒白の斑とな
りたれ、屋根の上は、尙ほ總体に眞白なれば、
怪しき賤の伏屋の見苦しさも雪に隠して、互
え渡れる有明の月の光の、千里隈なく照りた
るこそ、いみじう可笑しけれ。されば月の光
に映えたる雪は、さながら銀の板を押し延べ
たるやうにて、垂れ下りたる氷柱は、水晶の
莖かどばかり見られて、長さあり、短きある
は、殊更に軒に懸けたるやうなれば、其の面

色、こうばい、しろきなど、
七八ばかり着たるうへに、
こきぬのいさあさやかな
るつやなど、月にはえてを
かしう見ゆるかたはらに、
えびぞめのかたもんのさし
ぬき、白ききぬどもあま
た、山吹くれなるなごきこ
ぼして、なほしのいさ白き
ひきさきたれば、ぬぎたれ
られて、いみしうこぼれい
でたり。さしぬきのかたつ
かたは、さじきみのさに、
ふみ出されたるなど、道に
人のあひたらば、をかしさ
見つべし。月影のはしたな
さに、うしろさまへすべり

白さは實に言葉の外なるに、下簾とて、車の
簾の下に、裾濃の衣などを懸くるが例なるを
夫も懸けざる唯の簾を、いと高く巻き上げた
れば、車の奥まで射し入る月影に、女の装束
の、經は紫にて緯は白なる薄色衣、さては紅
梅も白も、七八枚ばかり重ねたる上に、濃き
紅の衣を着たるが、つやくしう鮮麗に、
月に映えて見ゆる其の傍には、葡萄染に細き
紋形置きたる指貫穿きて、白の衣を許多重ね
山吹色さては紅などの衣の、袖口溢れ見えた
るに、いと白き直衣の紐の引き解けたれば、
脱ぎ垂れられて、下襲の色々なるが溢れ出で

入たるを、ひきよせあらは
になされて、笑ふもをか
し。りんノ、さして氷りし
けりさいふ詩を、返すく
ずんじておほするは、いみ
しうをかしうて、夜一まも
ありかまほしきに、いく所
のちかくなるも口をし。

ながら、指貫の片つ方は、車の戸闕の外に踏
み出されたる男の状など、若し途中にて人に
會は、可笑しとこそ見らるべけれ。殊に女
の身の月影に面耻しければ、車の後の方へ滑
り寄りて、影に顔を隠したるに、然はさせじ
とて男の引き寄せて、月に顯はに顔差し出さ
れて笑ふも面白し。斯くて彼の秦の國の廣き
田の面に、凜々たる寒月の互え渡りて、さな
がら氷を敷きたるやうなりと言へる「秦句の
一千餘里、凜々として氷を鋪く」の句を、返
すく、吟誦し給へるは、感興うた、無限の情
に堪へざれば、今夜一夜を通して、此のま、

みやづかへする人々の出あ
つまりて、君々の御事めで
きこえ、宮の内外のはしの
事ども、かたみに語り合せ
たるを、おのが君々其家あ
るじにて、聞こそをかしけ
れ。

家ひろくきまげにて、しん

乗り廻らまほしう覺ゆれど、早くも行くべき
家の近づきたるこそ、如何ばかり口惜しかり
つれ。
宮仕する女房達が、其の家里に出で集りて、
各々己が主君の芽出たさなどを褒め稱へ、若
くは宮中の事、宮外の事、さては己が家主の
事などの端々を、噂し褒め合へるを、其の君
其の家主の聞くこそ、さても芽出たき事なれ
かし。

卷の十二

百四十七段より百五十七段に
至る十一段並に段外一章あり

家廣く清らかにて、親族一門と共に住むこと

ぞくはさら也、たゞうちか
「ならひなごする人」には、宮
づかへ人かたつかたにする
こてそ、あらまほしけれ。
さるべき折は、ひさ所にあ
つまりぬて物がたりし、人
のよみたる歌、何くれさか
たりあはせ、人の文なごも
てくる、もろごもに見、返
事かき、又むつまじうくる
人もあるは、きよげにうち
しつらごていれ、雨なごふ
りてえ歸らぬも、をかしう
もてなし。まゐらん折は、
其事見入て、思はんさまに
して、いたしたてなごせば
や。よき人のおはします御

の芽出たきは、言ふも更なるが、若し夫れ話
相手の友人として、何人かを住ませ欲しう思
は、そは宮仕する女房と相住みたきものな
り。徒然なる折は、同座して種々の物語もし、
人の詠みたる歌の話、さては何くれとなく語
り合はせて通せざるなく、人より家主に持て
来る文なども、諸共に讀み遣りて、返事まで
も認めもし、又た親しき友達などの訪ひ来る
時は、先づ座席を清めて、萬事を整頓しなが
ら待ち構へ、雨なご降りて、彼の來客の歸り
得ざる場合には、尙更ら接待懇遇を盡し、其
の人の歸るに臨みては、用意萬端、思ふやう

ありさまなご、いさゆかし
きぞ。けしからぬ心にやあ
らん。

【百四十七】 見ならひす

あくび。ちごごも。なまけ
しからぬえせもの。

【百四十八】

うちごくまじきもの

に整へて、出し遣るなどは、宮仕する女房な
らでは、行き届かぬものなり。若し夫れ禁中
に於ける貴人の御有様などを床しがりて、聞
かま欲しうする家主などは、分にもあらぬ怪
しかる心と言ふべからん。

【百四十七】 見ならひする物

人の欠は、我も見習ふものなり。稚兒などは
直ぐ人真似をするものなれば、悪き事などは、
夢にも見習はさすべからず。孟母三遷の例も
之れが爲めなり。又た賤しき身柄の似非者な
ごは、得て貴人の偽似をしたがるものなり。

【百四十八】

うちごくまじきもの

あしき人にいほるゝ人。さ
るばよしとしられたるより
は、うらなくぞ見ゆる。

舟のみち。日のうらゝかな
るに、海のおもてのいみし
うのごかに、あさみどりの
うちたるを、引わたしたる
やうに見えて、いさゝかお
そろしきけしきもなきわか
き女の、あこめばかりきた
る、侍ひのものゝ若やかな
るもろともに、ろさいふ物
おして、哥をいみしううた
ひたるいさをかしう、やん
ごさなき人にも見せ奉らま

人に悪評せらるゝ者は、人に評判善き者に比
べて、其の心に頼み所なければ、決して己が
胸中を打ち解きて語ふべからず。

舟路を行くに、日は麗らかにして、海面の長
閑なること宛然鏡の如く、蒼海の渺茫たるは
打ちたる淺緑の衣を引き延べたるやうに見え
たるが、袖ばかりを衣たる海邊の女は、其の
境遇に馴れたればにや、斯る海を聊かも恐る
ゝ氣色も見えず、若き雇男と共に櫓を押しな
がら、舟歌など面白う謠ふを、都なる貴人に
も見せ奉らまほしう思はれて、愉快に舟を進
め行く程に、圖らずも風俄に吹き起り、海上

ほしう思ひいくに、風いた
うふき、海のおもてのたゞ
あれにあしうなるに、物も
おぼへず、さまるべき所に
こぎつくるほど、舟に波の
かけたるさまなどは、さば
かりなごかりつる海も見
えずかし。おもへば舟にの
りてありく人ばかり、ゆゝ
しきものこそなけれ。よろ
しきふかさにてだに、さま
ばかなき物にのりて、こぎ
ゆくべき物にぞあらぬや。
ましてそこひもしらす、ち
ひろなごもあらんに、物い
さつみいれたれば、水ぎは
ゞ只一尺ばかりだになき

今は荒れに荒れたれば、唯だ恐るしさに堪へ
ずして、何事も覺えず夢中なるに、泊るべき
所に漕ぎ着く迄にも、幾度か舟に波の打ち懸
けて、餘沫顔面を濡す状などは、さばかり穩
なりつる海とも見えす。思へば舟乗りする人
ほど、由々しく危きものはなかるべし。大方
の深さなる水の上にては、木の葉のやうなる
慕なき舟に乗りて、漕ぎ行くべきにもあらぬ
べう思はるゝに、況して底ひも知らず、千尋
もあらん深き海に舟遣りて、而かも多くの荷
物を積みたれば、舟舷と水際との間、唯だ一
尺計を餘すのみなるを、舟子ごもは少しも

に、げすごものいさゝかお
そろしごも思ひたらず、は
しりありき、露あらくもせ
ば、しづみやせんと思ふ
に、大なる松の木なごの、
二三尺ばかりにてまるなる
を、五六ぼうくく、なげ
入なごするこそいみしけ
れ。やかたさいふに物ぞお
はす、されどおくなるは、
いさゝかたのものし。はしに
たてる物ごもこそ、めくる
心ちすれ。はやをつけて、
のどかにすげたる物のよわ
けさよ。たえなば何にかは
ならん、ふさおちいりなん
を、それだにいみしうふさ

意に留めず、平然として走り歩き、我等より
之を見れば、聊か荒々しうせば、沈みもやせ
んと思ふ程なるに、何は儲て大なる松の木な
ごの、二三尺廻もあるを、五六本ばかりぼう
くと投げ入れなごするこそ、いみじく危げ
なれ。尤も貴人は舟屋形の中に在せど、それ
も奥の方なるは幾分心安し、端に立てる者な
ごは、目も眩むべき心地ぞする。殊に櫓に付
けたる早緒、即ち櫓綱の弱々しさよ、若し斷
ち切れなば何とかせん、舟夫は其の機に海に
落ち入りなんを、然るを其の綱だに、別段太
くもあらぬこそ心もとなけれ。さても我等が

くなごもあらず。我のりた
るはきよげに、もかうのす
きかけ、つまごかうしあげ
なごして、されどひさしう
おもげになごもあらば、
たゞいへのちひさきにてあ
り。こそふれ見やるこそい
みしけれ。さほきはまごこ
に、さゝのはをつくりて、
うちちらしたるやうにぞ、
いさよく似たる。さまりた
る所にて、舟ごさに火ごも
したる、をかしう見ゆ。は
し舟さつけて、いみしうち
ひさきにのりて、こぎあり
く、つさめてなご、いさあ
はれ也。あさのしらなみは、

乗りたる舟は、簾など掛けて清げなるが、帽
額の透影面白く、屋形の妻戸格子を上げなご
したり。尤も彼の荷足船のやうに、水際一尺
計りになれる程の重き舟ならねば、軽く浮き
たる状は、宛然小き家に異ならず。さても我
舟より他船を見ることこの面白さよ、遠き所に
ある船などは、實に笹の葉を打ち散したるに
も似たり。泊りたる所にて、舟毎に火を點し
たる景色も面白く、朝早くなど少き輕舸に乗
りて、漕ぎ廻ると最と興あり。世の中を何に
たごへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡のしら浪
と拾遺集にも見えたるが、其の漕ぎ行く舟の

誠にこそきえもてゆけ。よろしき人は、のりてありくまじき事こそ猶おぼゆれ。かち路も又いさおそろし。されどそれは、いかにもくつちにつきたれば、いさゝのもしと思ふに。あまのかづもしたるは、うきわざなり。こしにつきたる物、たえなばいかせせん。なん。をのこだにせば、さてもありぬべきを、女はおぼるけの心ならじ。男はのりてうたなごうたひて、此たぐなばを海にうけありて、いさあやふくうしるべたくはあらぬにや。蟹の

跡の白浪も、消え行くこそ面白けれ。されど高貴の人は、大切なる身なれば、危きを避けんが爲めには、舟に乗りて旅すまじき事こそ、尙も思はるれ。尤も陸路とても、安全を必ずすべきにはあらねど、それにしても地上なれば、いと頼もしと思はるべし。何れにしても海の上は危きに、其の海に入りて漁する海人の業こそ、實に憂きものなれ。腰に綱を付けて海中に飛び入るなるが、若し其の綱の断ち切れもせば、如何なるべき。男の業として未だしもなれど、女は大方の憂き心にはあらざるべし。然るを男は舟に乗りて歌など謡

ぼらんさては、其なばをなんひく、取まごひくりいるゝさまぞ、こそわりなるや。舟のはたをおさへて、はなちたるいきなきこそ、まこさにたゞ見る人だにしほたるゝに、おさし入てたゝよひありくたのこは、めもあやにあさまし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬこまにこそあめれ。

ひながら、女を海に入れ遣りて、彼の腰に付けたる手繰り繩を、捌き送りなごするに、危く心もどなくもあらぬものにや。さて海中に入りたる蟹の、舟に上らんとする時は、其の繩を引くなるが、此の時舟なる男の、急ぎ惑ひて繩を手繰る状は、實に女の息苦しからんと思ふ故なれば、慌て惑ふも道理にて、斯くて引き上げられたる蟹は、舷を押へて苦しげなる呼吸を吐く状などは、何の縁故もなき他人より見ても、實に憐れしう落涙せらるゝもの、若し夫れ綱切れて、其の蟹を落し入れたる男の、續きて海に飛び込みて、漂ひ捜す

右衛門のぜうなるものゝ、えせおやをもちりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけるが、いよのくによりのぼるさて、海におさしいれてけるを、人の心うがりあさましがりけるほどに、七月十五日、ぼんを奉るさていそぐを見給ひて、道命あじやり、わたつうみにおやをおし入てこのぬしのぼんする

なごは、目も當てられず淺まし。されば海人の業は、更に世の人の爲し試みんと思ふべきものにはあらずかし。蟹の男さへ、恩愛の情あること斯の如く、己が生命を抛ちても、其の女を捜し求めんとするに、右衛門尉の某は、官途に仕ふる身にてありながら、不孝惡逆の罪恕すべからざるものあり。そは不具なる親を持ちたるに、人目も面伏せなりさて、常に厭はしく思ひ居たるが、伊豫より都に上る海上にて、其の親を海に投げ入れ、墓なくも魚の餌食となしつるを、人皆心憂く淺ましき限りなりさて、憎まぬ者

見るぞあはれなりける
さよみ給ひけるこそ、いそ
ほしけれ。

もなかりけるに、七月十五日の盆供養に、彼れ其の亡父を吊ひて、惡業を解脱せんものと、道命阿闍梨を急ぎ請ずるものから、阿闍梨即ち

わだつ海に親を押し入れてこの主の
盆する見るぞあはれなりける

と詠み給へり。此の主は右衛門尉なるが、親と言へるより子の主と通はせて、さて親を海に押し入れたる程の大逆人ながらも、今は惡念を翻へして善業に立ち返り、懺悔滅罪の盆供養を營まんとするは、殊勝なる事ごもなりと言へるなるが、既に後悔したる者を咎めざ

又小野どの、母うへこそ
は、普門寺さいふ所に入講
しけるをききて、又の日小
野殿に人々あつまりて、あ
そびしふみつくりにけるに、
たきまこる事はきのふに
つきにしをけふはをの
えこゝにくたさん
さよみ給ひけんこそめでた
けれ。こゝもさばうちきま
になりぬるなめり。

るは、流石に闇阿梨の阿闇梨たる所、實に感
ずべき外はあらず。
小野殿と申すは、右近大將道綱公にて、彼の
道命阿闇梨は即ち其の子なるが、此の道綱公
の母君は、曾て普門寺に催されたる法華八講
を聴聞に行かれて、其の翌日、人々多く小野
殿に集りて、管絃の遊びを爲し、歌など詠み
合へるに、母君即ち

たきまこる事は昨日につきにしを

今日は斧の柄こゝに朽たさん

と詠み給へり。薪を伐る事と言ふは、法華八
講の提婆品に、薪を拾ひて食を設くとあるに

て、釋尊未だ佛法を開き始めざる前、阿羅々
阿羅摩と言へる仙人に仕へて教を乞ひける時
薪を伐り水を汲みつゝ、艱難苦業を嘗めて、
終に法華經を得給へりと言ふより、昨日法華
八講を聴聞したるを、斯くは薪伐ると言ひな
せるなり。下の句の斧の柄も朽ちなんと言ふ
は、王質と言へる者が、仙人の碁を打つを見
て面白しさの餘り、薪伐ることも忘れて、其
の斧の柄の朽ちたりと言ふ故事を取りて、昨
日は八講を聴聞して面白く、今日は又た打ち
集りて詩歌管絃の遊びをするの面白さに、斧
の柄も朽ぬべき程に、興濃くも感ずるなりと

又業平が母の宮の、いよいよ見まくこの給へる、いみじうあはれにをかし。引あけて見たりけんこそ、思ひやられるれ。

詠まれたるこそ、いみじう芽出たけれ。但し此の下の句は、拾遺集に「いざ斧の柄はこゝに朽たさん」とあるを取りたれば、聞書集の歌のやうに見えたり。
又た業平朝臣の御母君なる伊豆内親王宮は、京の都に少し距たりたる長岡に住み給ひける時、業平朝臣は、宮仕する身の忙はしければ、さまで屢々参り訪ふ事も出来ざりけるを、何時の年にか十二月ばかりの頃、母君よりの急用とて文を持て参りたるに、披き見れば、詞も記るされずして、
老ぬればさらぬ別もありといへば

をかき思ひし哥なごを、さうしにかきておきたるに、げすのうちうたひたるこそ心うけれ。よみにもよむかし。

いよ／＼見まくほしき君かな
どの歌のみありて、老の身の何時此の世を別れ行くとも知れねば、其方を見たき心の、いよ／＼切なりと仰せられたるこそ、いみじう哀れなれ。又た此の文を披き見たる時の、業平朝臣の心の中こそ如何なりけん。母子恩愛の情の絆しがたなさ、思ひ遣られて哀れならずや。
面白く善き歌なりと思へるを、草紙に書き付け置きたるに、歌心もなき下賤の者ども、其の草紙を取り出して、心もどなく吟詠したるこそ、聞くにも堪へず憂きものなれ。又た唯

よろしき男を、げす女などのほめて、いみしうなつかしうこそおはすれなごいへば、やがて思ひおさされぬべし。そしらるゝは中くよし。げすにほめらるゝは、女だにわろし。又ほむるまゝに、いひそこなひつる物をば。

大納言殿まゐり給ひて、ふ

だ詞に打ち読みなごもしたるは、殊の外其の歌の品位を下ぐるものなり。

身分高き男を、下賤の女なごが、いみじう懐かしき人なりと褒むるは、即がて其の人の品位を下げて、心劣りせらるゝものなり。されば誹らるゝこそ、却りて宜しけれ。下賤の者に褒めらるゝは、女だに悪きものを、況して男は尙更らにて、下賤の者の褒むるは、實に其の眞心より出づるにあらずして、褒むる間に又た誹りがましき詞も、自から打ち交りなごするものなり。

大納言伊周卿、中宮の御前に参り給ひて、學

みの事なごそうし給ふに、例の夜いたうふけぬれば、御前なる人々、一二人づゝうせて、御屏風きちやうのうしろなごに、みなかくれふしぬれば、たゞひさりになりて、れふたきを念じてさふらふに、うしよつこそうする也。あけ侍ぬなりと獨ごつに、大納言殿、今らにおほごのごもりおはしませよとて、ぬべき物にもおぼしたらぬを、うたて何しに、さ申つらんと思へども、又人のあらばこそはまされもせめ。うへのおまへのはしらによりかゝりて、

問の御物語に夜を更し給ふは例なり。今夜も例に依りて甚く更けたれば、御前に侍ふ女房ごも、一人減り二人減りて、御屏風又は几帳の後なごに皆隠れ伏しぬれば、御前には唯だ己れ一人になりて、眠氣を催し來るを我慢しつゝ侍ふに、漏剋の司、丑四つと奏上するものから、己れ思はずも最早夜も明け侍りぬなりと獨語したるに、そは夜の明くる迄も起き居たまはで、早や寢給ひかしの言ひたるやうに聞えて心苦しきに、此の時主上には、既に坐眠あらせられたるを、大納言殿、斯く夜明になりて今更に、御寢あそばすものかなと言

すこじれふらせ給へるを、
かた見奉り給へ、今はあけ
ぬるに、かくおほさのこも
るべき事かはと申させ給
ふ。げになご宮のおまへに
も、わらひ申させ給ふもし
らせ給はぬほごに、をさめ
かわらばの、庭鳥をさらへ
てもちて、あす里へいかん
さいひて、かくしおきたり
けるが、いかゞしけん、犬
の見付ておひければ、らう
のさきににげいきておそる
しうなきの、しるに、皆人
おきなごしぬや。うへも
ちおごるかおはしまし
て、いかにありつるぞと尋

ひ給ひたるは、最早寝るべきものにあらずと
の心なるを、さりとは知らず、己れ驚きて夜
も明け侍りぬ、早や寝ましと獨語したるは、
心もとなう憂たてて、何故に然ることを申
したるやと、今更悔めども及ばず。外に人多
く侍りもせば、誰が言ひたるも知られずて、
紛はし得べきものを、己れ唯だ一人にては何
の甲斐もなし。さても主上には、中宮の御前
の柱に凭れかゝりて、うつら／＼と半ば眠ら
せ給へるを、大納言殿の中宮に申さるゝやう、
あれ見奉り給へ、今は早や夜も明けぬるに、
斯く御寝あらせ給ふ事かはとあるに、中宮に

させ給ふに、大納言殿の、
聲めい玉のれふりをおごる
かすさいふ詩を、たかう打
出し給へる、めでたうをか
しきに、ひさりれふたかり
つる目も、おほきになり
ぬ。いみしき折の事かなご、
宮も興せさせ給ふ。猶か、
る事こそめでたけれ。又の
日は、よるのおまへにいら
せ給ひぬ。夜中ばかりに、
らうに出て人よべば、おる
ゝが、我おくらんこの給へ
ば、もからかきぬは、屏風
にうちかけていくに、月の
いみじうあかくて、なほし
のいさしるう見ゆるに、さ

も實に左こそと笑ひ給へど、主上は何事も知
らせ給はぬを、斯る折しも、長女とて下司の
老女なる其の子が、鶏を捕へ置きて、明日は
夫を持ちて里へ行かんとて隠し置きたりける
が、如何にしてか犬の見付けて、之を追ひけ
れば、鶏は廊の彼方に飛び逃げて、恐ろしく
鳴き立つるに、人皆之が爲めに覺め起きもし
ぬべし、主上にも驚き在して、如何にしたる
やと尋ねさせ給へば、大納言殿は、漏剋策の
文中にある「鶏人曉を唱ふる聲、明王の眠
を驚かす」と言へる句を、聲高々と朗吟し給
ひしは、實に芽出たう可笑しくて、己が眠を

しぬきのなからふみくま
れて。袖をひかへてたふる
なごいひて、おておはする
まゝに、ゆうしなほのこり
の月にゆけばさすんじ給へ
る、又いみしうめでたし。
かやうの事めでまごふさ
て、わらひたまへど、いか
でか、猶いさをかしき物を
ば。

催したる眼も、自然と大きく開き廣がりぬ。
折に觸れての吟詠なれば、中宮にも最と興せ
させ給ひけり。斯る事は、尙ほ何時にても芽
出たきものなり。其の翌日の夜は、中宮には
主上の御寢殿に入らせ給ひければ、己れ退り
出んとて、夜半ばかりに廊に出で、従者を呼
べば、大納言殿には、少納言の退り下るゝに
や、然らば我れ送るべしと申さるゝに、即ち
御詞に従ひて、裳と唐衣とは、屏風に打ち懸
け置きて出で行くに、月の光いと明なれば、
大納言の直衣の色の甚く白う見ゆるに、指貫
の半分ばかりは包まれたるまゝ、袖を引き止

僧都の君の御めのこのまゝ
さ、みくしげごのゝみつば
れにわたれば、をのこある
板じきのもさちかくよりき
て、からい目を見さふらひ
つる、誰にかはうれへ申さ
ふらはんさてなんさ、なき

めて倒るなど言ひながら、將て參らせらるゝ
途すがら、「佳人盡く晨粧を飾れば魏宮の鐘動
き、遊子猶ほ残月に行けば函谷の鶏鳴く」と
言へる曉の賦を誦じ給へるは、又た甚く興あ
りて芽出たし。大納言殿は、斯る事さへ賞づ
る少納言かなと笑ひ給へど、如何でか面白き
事を面白しとして賞でざるを得べきや。
隆圓僧都の君の御乳母の「まゝ」、此の「まゝ」
と言ふは名にはあらで、乳母の通稱なるが、
己れ此の乳母と共に、中宮の御妹君なる御
櫛匣殿の御局に居たるに、或る男の板敷の許
に近く寄り來て言ふやう、下僕は辛き憂き自

ぬばかりのけしきにていふ。何事ぞさへば、あからさまに物へまかりたりしに、きたなく侍る所のやけ侍りにしかば、日ころは、がうなのやうに、人の家にしりをさしいれてなんさふらふ。うまづかさのみまくさつみて侍ける家よりなん、出まうで来て侍る也。只垣をへたて、侍れば、よごのにれて侍けるわらはべも、ほましくやけ侍わべくなん、いさゝかものもさうで侍らすなごいひなる。みくしげごのも聞給て、いみしうわらひ給ふ。

に遇ひ侍りぬ、誰にか此の事を語り申して、御助力を乞はんにも、語るべき人なければ、御二方になん御話申さんどて、男泣きに泣かぬ計りの氣色なれば、そは如何なる事ぞと問ふに、實は下僕、かりそめに外へ出で行きたる間に、いぶせき己が住家の焼け失せたれば、此頃は寄居蟲が他の貝の中に宿るやうに、人の家に尻を差し入れて同居し侍るなり。之は馬司が、御秣を積み置ける小屋より火を出したれば、唯だ垣一重を隔てたる己が住家にては、寢所にありたる子供まで、危く焼け死なん計りなれば、何一品をも取り出し得でな

みまくさをもちやすばかりの春のひによごのさへなごのこらざるらん。さかきて、是をさらせ給へさてなげやれば、わらひのしりて、此おはする人の、家のやけたりさて、いさほしがりて給めるさて、さらせたらば、何の御たんじやくにか侍らん、物いくらばかりにかさいへば、まづよめかさいふ。いかでか、かためもあきつかうまつらではさいへば、人にも見せよ、只いまめせば、さみにてうへへまゐるぞ、さばかりめでたき物をえては、何

と言ひ居るに、御櫛匣殿にも甚く笑はせ給へば、己れ取り敢へず、みまくさをもちやすばかりの春のひによごのさへなご残らざるらん。よごのさへなご残らざるらんと書きて、之を興へ給へさて投げ遣りたり。此の歌は、「焼かずとも草はもえなん春日野をた、春の日にまかせたらなん」とある古歌の意を取りて、春の日を春の火に懸けて出火に言ひなし、御秣もやすと言ふより、夜殿を淀野に通はせて、御秣を焼きたる計りの火にて、淀野ならぬ夜殿までも、何ぞ焼けたるならん、切めて夜殿にても残さまほしかりしよ

をか思ふさて、皆わらひま
ごひてのぼりぬれば、人に
や見せつらん、里にいき
て、いかにほらだゝんな
ご、御前にまゐりてまゝの
けいすれば、又わらひさわ
ぐの御前にも、なごかくも
のぐるほしからんご、わら
はせ給ふ。

この意なるが、彼の乳母は之を見て、笑ひ狂
ふばかりなりしが、此の男に戯れて言ふやう、
此處に在する貴き人が、其方の家の焼けたる
を氣の毒に思召して、之を與へよと言はるれ
ば、有り難く頂戴せよとて取らせたるに、此
の男、此は何の御短冊かは知らぬご、幾許の
價あるものにやと言ふにぞ、先づ其の歌を讀
めと乳母の言へば、下僕は如何でか讀み得ん、
片目さへも開かで、両眼開き盲目の無筆なれ
ばと答へければ、然らば人にも見せよ、唯今
御前に召させられたれば、急の御用にて上り
參るなり、左程の芽出たき物を頂戴したるか

男はめおやなくなりて、お
やひさり有、いみしくおも
へごも、わづらはしき北の
方の出來てのちは、内にも

らは、此の上何を望むの要かあるべきご、乳
母の言ひ聞かせけると共に、皆々笑ひ惑ひて
上りければ、後にて人にや見せつらん、又寄
居蟲のやうなる借家に歸りて、人に讀み聞か
されて、腹立ちもせんなど話し合ひつゝ、中
宮の御前に參りて、ありし事ごも乳母の申し
上げければ、御前の女房達も亦た皆笑ひ騒ぐ
を、中宮には何ごか左様に物狂はしう笑ふも
のかなと仰せられつゝも、亦た突はせ給へる
こそ可笑かりけれ。
母親を失ひたる男が、唯だ一人の父親に孝養
を盡して、己が身の行をも慎みて、萬事に心

入られず、さうぞくなごの事は、めのさ、又こうへの人ごもなごしてせさす。西東のたいのほごに、まらうさにもいさをかしう、屏風さうじのゑも、見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほご、口をしからず人をもおもひたり。うへにも御けしきよくて、つれにめしつゝ、御あそびなごのかたきには、おぼしめしたるに、猶つれに物なげかしう、世の中心にあはぬこちして、すきなくしき心ぞ、かたはなるまであるべき。上達部の又なきは、もてか

を用ひたるに、煩はしき繼母の入り來れる後は、外に放ち出されて、家には寄せ付けもせられず、身の裝束などの事は、乳母又は亡母の方の人などの世話を受けて、西東の對の家に住みけるが、客人の應對も最と鄭重に、屏風障子の繪なども卑しからず心を用ひて、誰が目にも一際見所ありて住ひたり。斯る心がけの男なれば、殿上の交際も極めて圓滑にして、人々皆人柄善き男なりと思へるのみか、主上の御氣色も斜ならず、常に御側に召されて、糸竹管絃の御相手を仕るに、尚ほ絶えず物嘆かはしう塞ぎ勝にて、繼母の爲めに世の

しづかれたるいもうさひさりあるばかりにぞ、思ふ事をもうちかたらひ、なぐさめ所なりける。定澄僧都にうちきなし、すいせひ君にあこめなし、さ、いひけん人もこそをかしけれ。

中を悲觀しつゝ、妻さへも迎へで、不具なるかと思はるゝまでも、女色を外になせる傷はしさよ。されど頼みに思ふ話對手は、或る歴々の上達部に嫁入りて北の方になれる妹一人あれば、此の妹に何事も打ち明け語らひて、僅に心を慰めける。定澄僧都に桂なし、すいせひ君に泊なしと、言ひけん人も可笑し。

〔注意〕

右の定澄僧都に桂なしの一節は、其の義も通じ難ければ、前後に脱文あるにや。異本には之上卷の巻の一段「こさく」なるもの、末段に加へたるもあり然るを善しとすべけれど、暫く轉置せざるになん。

まことや下野にくだるさい
ひける人に、
おもひだにかゝらぬ山の
させも草たれかいぶきの
させはつけしぞ

まことや下野に下ると言ひける人に、己れ取り敢へず、
おもひだにかゝらぬ山のさせも草
たれかいぶきの里は告げしぞ
と詠み遣りたり。此は下野に下るべしとは思もかけぬ事にて、其の國の伊吹の里の、さしも草ならねど、火の付くやうに急ぎ行けとは誰が告げしぞと、意外なる旅立を詠めるにて、伊吹の里は下野にもあること、坤元儀に見えたる由を、袖中抄にも記せり。さしも草は、灸治に用ふる草にて、火を付くるものから、思ひも寄らぬ火急の旅立に言ひ寄せたるなり。

ある女房の、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をかたらふさきゝて恨みければ、親なごもかけてちかはせ給ふ、いみしきそらごさ也、夢にだに見ずさなんいふ。いかゞいふべきさいふさきゝて、
ちかへきみさほつあふみ

或る女房、同じ宮仕する遠江守の子なる某と懇なりしが、某に二心ありて、又た他の女房と懇ろになりしと聞きて、甚く恨みければ、某困じ果て、己が二心なき由を、親なる遠江守にも誓はせて、他の女房と懇ろなりとは、夢にも知らぬ空言なりと言ふにぞ、如何が言ひ遣らば宜しからんと、其の女房の言

〔注意〕

右の「まことや下野に下る」と言へる一節も、前後に脱文ありと見えて、意義の連絡を失へり異本には、此の段の末の「あふさかはむれのみつねに」の歌の次に置き、「下野に」の三字は無くて、「やがては」の四字を用ひたり。然らば伊吹山は近江なるべく、義も亦た通じ易けれど、今暫らく原本のまゝに従ふ。

のかみかけて、むげには
まなのはし見ざりきや

守はさふちほまへ
ひかりしむらさき
あふさかばむねのみつれ
にはしりぬのみつくる人
やあらんさおもへば

ふを聞きて、己れ取り敢へず、其の女房に代りて、

ちかへ君とほつあふみのかみかけて

むげに濱名のはし見ざりきや

と詠めるになん。上の句は、親なる遠江守

にも誓はせたるを承けて、守を神に言ひかけ、

下の句は、遠江の名所なる濱名の橋を、思の

懸橋に言ひかけて、夢にも見ざる空言なりと

言へるを承け、決して他の名所に氣を移さず、

夢にも他の女房に思の懸橋をせざるやう、親

なる遠江守は申すに及ばず、神かけて誓ひ

給へ、然らば己れも恨むまじとの意なり。

びんなき所にて、人に物を
いひけるに、むねのいみし
うはしりける、なごかくは
あるさいひけるいらへに、
あふさかばむねのみつれ
にはしりぬのみつくる人
やあらんさおもへば

あふさかばむねのみつれ
にはしりぬのみつくる人
やあらんさおもへば

人に見付けられては便り悪しき所にて、女と
物語する男の胸騒ぎするとして、何ぞか斯くは
あるぞと言へるに答へて、

あふ坂はむねのみ常に走井の

みつくる人やあらんと思へば

と詠みて示しつ。逢坂は山城近江の境なるが、

逢ふと言ふより、男女相會ふに言ひかけ、其

の逢坂にある走井の走るを、胸の騒ぎ走るに

言ひ添へ、さて井と言へより、水を練り汲む

を見付くると振て、男女相會へるを、人や見

付くるならんと思へばこそ、胸の走り騒ぐな

れと言ふ意なり。

あふさかばむねのみつれ
にはしりぬのみつくる人
やあらんさおもへば

【百四十九】女のうはぎはうす色。えびぞめ。もえぎ。さくら。紅梅。すべてうすいろのたぐひ。

【百五十】からぎねはあかい。ふぢ。夏はふたあぬ。秋はかれ野。

【百五十一】もは

【百四十九】女のうはぎはうすむらさきうすくれなるまた薄紫、薄紅、又は經は紫の緯は白き薄色、葡萄染、萌黄、櫻、紅梅などの、總べて薄色なるが、女の上衣に相應はしき色合なり。

【百五十】唐衣は女官の装束の時、上に着るべき唐衣は、櫛と茜にて染めたる赤色、但し織物には、經紫の緯赤とるを赤色と言ふ、藤色は薄紫なり、此等の赤、藤などは、冬より春にかけて着るに善し。夏は赤藍と青藍との間色なる二藍染、秋は枯野色の黄味を帯びたるが善し。

【百五十一】裳は

おはうみ。しびら。

【百五十二】かざみは春は、つじ、夏は、青くちば、朽葉。

【百五十三】おりものは

裳も女官の装束の時に着るものにて、腰より下に纏ふものなるが、大海に海松、貝などの模様あるが善し。褶裳は表裳にて、男は袴の上、女は普通の裳の上に着るものなり。

【百五十二】汗衫は

汗衫は元と汗取の服なりしも、後には官女及び少年者の、晩春より初夏にかけて上衣とするに至りしが、多くは童女の装束に用ひらる。其の色合は、春は躑躅か櫻、夏は青朽葉か朽葉なり。但し青朽葉は、表は青丹の黒みありて、裏の青色なるを言ふなり。

【百五十三】織物は

紫。しろき。もえぎにかし
はおりたる。こうばいもよ
けれども、猶見ざめこよな
し。

【百五十四】 もんば
あふひ。かたばみ。

夏うすもの。かたつたのゆ
だけきたるひさこそにくけ
れど、あまたかさねきたれ
ば、ひかれてきにくし。わ
たなごあつきは、むねなど
もきれて、いさ見ぐるし。
まぜてきるべき物にあら
ず。猶むかしより、さまよ
くきたるこそよけれ。左右

織物は、絹布に文綾あるを言ふなるが、紫も
白も善く、又た萌黄に柏葉を織り出したるも
善し。紅梅も悪くはなけれど、之は殊に見飽
きするものなり。

【百五十四】 紋は

葵、酢漿は、女の紋として似つかはし。
夏は羅を着るが善し。尤も夏冬を問はず、衣
の右左の肩の何れか一方を、弓丈長に着たる
人こそ床しけれ。されど幾枚も重ね着たる時
は、行長き方に引かれて、着具合の悪きもの
なり。殊に綿の厚き衣などは、尙ほ更ら片引
かれて、胸のあたり廣がりたるは見苦し。尤

のゆだけなるはよし。それ
も猶女ばうのさうぞくにて
は、さころせかめり。なご
このあまたかさねるも、か
たつかたおもくぞあらんか
し。きよらなるさうぞくの
おり物、うすものなど、い
まばみなさこうあめれ。い
まやうに又さまよき人のき
たまはん、いさびんなき物
ぞかし、かたちよき君達の、
彈正にておはする、いさ見
ぐるし。宮の中將などの、
口をしかりしかな。

も弓丈長と普通のものとは、混ぜ合はせて着
るべきものにあらず。されば斯く着悪き片つ
方の弓丈長を、今更ならず体裁善く着たる人
こそ床しけれ。又た左右共に弓丈長なるは善
し。されど女房の装束にては、場廣く取りて
所狭くなり。男とても、左右の丈長なるを多
く重ねては、肩も重かるべし。さればにや當
今に於ては、清らかなる装束の織物、羅など
のみ、片つ方の弓丈長なるを 着め、され
ど如何に當世風なればとて、容貌善き人の丈
長を着たるは、見さま宜きものにあらず。此
の見さま宜しからざるにつきて想ひ起すは、

【百五十五】 やまひは
むね。物のけ。あしのけ。
たッそこはかさなく物くは
ぬ。
十八九ばかりの人の、かみ
いさうるはしくて、たけは
かりすそふさやかなるが、

容姿秀麗なる君達が、非違を糺彈する彈正
弼たるは、其の役目柄として愛嬌もなく、峻
嚴なる威儀を作るこそ、最に見苦しけれ。一
品式部卿爲平親王の宮の二男なる、右中將
源頼定卿の、容貌善くて彈正大弼たりし事
の、口惜しかりし事かな。

【百五十五】 病は
胸の痛み。妖魔などの物の怪の付きたる。脚
氣。碌々食事の出来ざる齒痛など。多くある
病の中にも、殊に心地悪しきものなり。
其の齒痛にては、十八九歳ばかりの娘の、美
はしき髪して、其の髪は身の丈ほごに長

いさよくこえて、いみしう
色しろう、かほあいぎやう
づきよしと見ゆるが、はな
いみしくやみまごひて、ひ
たひがみもしさになきぬ
らし、かみのみだれかゝる
もしらす、おもてあかくて
、おさへぬたるこそをかし
けれ。
八月ばかり、しろきひさへ、
なよらかなるばかりまよきほ
ごにて、しをんのきぬのい
さあざやかなるを引かけ
て、むねいみしうやめば、
友だちの女房たちなど、か
はるくきつゝ、いさいさ

く房々としたるが、全體の肉附も善く、圓満
に肥え太り、色は飽くまでも白くて、顔の愛
嬌溢れんばかりなるが、さても激しき齒痛を
病みて、額髪も痛さの餘りに泣き濡し、髪亂
れて顔に蔽ひかゝることも頓着すればこそ、唯
だ激痛に顔を赤めて、其の患部を押へ居るこ
そ可笑しけれ。
胸痛みに苦しめる人の、八月の頃、白き單衣
に、穿き馴れたる袴の婀娜にて、紫苑の色の
鮮麗なる衣を引き掛けながら病み臥せるを、
友達なる女房の、かはるく見舞に來て、さ
ても不便なる事かな、斯る胸の痛みは、今更

ほしきわざかな、例もかく
やなやみ給ふなど、事なし
びにさふ人もあり。心かけ
たる人は、まことにいみし
まおもひなげき、人しれぬ
申なごは、まして人め思ひ
て、よるにもちかくもえよ
らす、おもひなげきたるこ
そをかしけれ。

いさうるほしくながきかみ
を引ひて、物つてきてお
きあがけたるけしきも、い
さ心ぐるしくらうたげな
り。うへにもきこめして、
御どきやうの僧の、聲よき
給はせられたれば、さふらひ人

ならぬ持病にてもやなど、心足らぬ無益の業
を尋ぬるもあり。又た心懸けたる人の、殊に
思深き男などは、眞實に軽からずとて、心配
一方ならず。或は其の女房の人知れず懇ろな
る男などは、人目を憚りて、側近く寄りも得
せず、獨り心の中にて思ひ歎きたるこそ可笑
しけれ。

物の怪病む人の、最と麗はしく長き髪を引き
結びて、生霊死霊など攻め來るとて、臥し居
たるが起き上り騒ぐ状は、最と心苦しう憐れ
なり。中宮にも聞しめして、御讀經の聲の善
き僧を遣りて、祈禱せしめられたれば、見舞

どもも、あまた見きて、經
ききなどするもかくれなき
に、めをくばりつゝよみあ
たるこそ、つみやうらんこ
おぼゆれ。

段外 心づきなきもの
物へゆき、寺へもまうづる
日の雨、つかふ人の我をば
おぼさす、何がしこそ、た
ゞ今の人などいふをほのき
ゝたる。人よりは猶すこし
にくしとおもふ人の、おし
ばかり事うちし、すゞるな
る物うらみし、我かしこげ

の女房達も多く集りて、其の讀經を聽聞する
に、僧の座とは物を隔て居れども、而かも此
の僧の、目を女房達の方に見配りつゝ、讀み居
たるこそ、脱俗の出家にも似合はず、女に心
を寄する事の罪や深からんと覺ゆれ。

段外 心づきなきもの
物見にも行き、寺詣でなごもする日に、雨の
降りたるは心憂し。家に使は、者などの、其
の主人の覺え芽出たからずして、某こそは説
心誠意を缺きたる唯だ一時の水臭き召使なり
と言ふを、仄かに耳にしたるも無念なり。又
た人よりは少し勝れて好しと思ふ男が、我を

なる。

心あしきひこの、やしなひ

疑ひて二心ありなど、徒らに憶惻を運らし、
微細なる事にも恨み怨じ、或は女を賤し慰め
て、物争ひせざるやう、賢こげに言ひ宥むる
男などは、己れには氣に入らず。

〔注意〕 右の一節は、既に中巻の卷の六なる五十九段に
も「心づきなきもの」と言へる同じ題名にて見
えたれば、五十九の一段は錯誤なること明なり
然れども、茲に段外として置かんも如何なれば
此の段の全文を、五十九段に入るべきか、或は
五十九段を削りて、此處に段数を記すべきか、
二者其の一を擇ぶを要すれど、今は暫く段外と
して、其の儘に差し置きぬ但し異本に、此の段
外の全文を除きたるものあるは、誤なること言
ふまでもなし。

心悪き乳母の育てたる子は、其の子に何の咎

たる子。さるはそれがつみ
にもあられど、かゝる人に
しもさ、おぼゆるゆゑにや
あらん。あまたあるが中
に、此きみをば思ひおとし
給ひてや、にくまれ給ふよ
など、あらゝかにいふ。ち
こは思ひもしらぬにやあら
ん、もさめてなきまごふ、
心つきなきなめり。おさな
になりても、思ひうしろみ
もてさわぐほごに、申く
なる事こそおほかめれ。

もなけれど、斯る乳母の育てたればと思ふゆ
ゑにや、其の子の何とはなく己が氣に入らぬ
心地す。されど乳母は、自からの腹悪しきに
は思ひも寄らず、多くの御子達の中にて、此
の若君一人を、何故にや主人の思ひ浅くて、
殊に憎み給ふよなど、聲荒らげて言へど、稚
兒は乳母の腹悪しきを知らねば、其の乳母を
捜し索めて泣き惑ふなど、實に心づきなきも
のなるべし。其の子の成人の後にも、尙ほ此
の乳母は、己が思ふまゝに世話を焼き騒ぐも
のから、親子の間ながらも、なかくに心づ
きなき事多かるべし。

わびしくにくき人におもふ人の、はしたなくいへど、そひつきてれんころがる。いさゝか心あしなごいへばつれよりもちかくふして、物くはせいさほしがり。其事さなく思ひたるに、まづはれついでうし、さりもちてまごふ。みやづかへ人のもごにきなごする男の、そこにて物くふこそいさわろけれ。くはする人もいさにくし。思はん人の、まづなご心ざしありていはんを、いみたるやうに口をふたぎておほをもてのくべきにもあらねば、くひをるにこそ

心化しく憎き人なりと思へる男の、我に言ひ寄ることの心づきなくて、碌々相手にもならず、情なく跳ね付け遣りたるに、それにも懲りずして、煩さくも添ひ寄りて、親切らしく見せかけなどするものから、逃れ詞に、心地悪しなど言へば、然も心配氣なる振して、尙更ら近う寄り添ひて、物食はせなごして機嫌取りし、痛はしう撫はれごも、少しも嬉しごも思はざるに、ますます表面ばかりの追従を努め、彼れ是れと待遇し惑ふも、却りて心憎し。殊に宮仕へなごする女房の許に男の來て、其の女房の部屋にて物食ふなごは、心づきな

あらめ。いみしうあひなごして、わりなく夜ふけてままりたりさも、さらにゆづけだにくはせじ。心もなかりけりさて、こすはさてなん。里にて、北おもてよりし出しては、いかせせん。それだに猶ぞある。

あらめ。いみしうあひなごして、わりなく夜ふけてままりたりさも、さらにゆづけだにくはせじ。心もなかりけりさて、こすはさてなん。里にて、北おもてよりし出しては、いかせせん。それだに猶ぞある。

く悪き事なり。又た食はする者も宜しからず。されご憎からず思ふ男の志にて、先づ之をを勧むるものを、然も忌み嫌へるやうに口を閉ぢて、顔を片つ方に背けもならねば、實は心ならずながらも、唯だ折角の志を否み難くて食ひ居るに過ぎねば、食ふ者よりも、食はする者こそ心なき業なれ。されば甚く酒に酔ひて、圖らず夜を更しなごして、止むを得ず己が部屋に宿りたりとも、更に湯漬飯も食はずべきにあらす。若し夫を心なき不人情の業なりとして、其の後一切寄り付かずば、夫れにて宜しかるべし。然る作法もなき食穢き男な

はつせにまうで、つばねに
あたるに、あやしきげすど
もの、うしろさしぜまつ、
居なみたるけしきこそ、な
いがしろなれ。いみしき心
をおこしてまうでたるに、
川かはの音ねなどのおそろしき
に、くれはしをのほりこ
じて、いつしか佛の御かほ
をながみ奉らんぞ、つばね
にいそぎ入たるに、みの虫

ごととは、交際を結ぶ迄もなき事なり。但し家
里さとにありて、北面なる臺所たいどころより氣を利かして、
饗應きやうおうする分ぶんは格別かくべつなれど、之れとても食はぬ
は、猶ほ食ふに勝れりと知らずや。
大和やまとの初瀬寺はつせでらに詣で、其の觀音堂くわんおんどうの局つぼねに籠
り居たるに、怪しき下賤男げせんをとこもが、己が脊中おのせなか
合せに差し寄りながら、居並びたる状こそ、
心づきなく卑しけれ。折角せつかく都みやこより遙々はるかと思ひ
立ちて參詣さんげいし、川かはの流ながれの恐ろしき音おとさへも耐
へ忍び、樽階くればしの幾段いくだんあるをも登り困じて、さ
て何時いつしか佛の御顔ほとけのみかほを拜し奉らんぞ、夫れの
みを樂みに御堂みだうに上り着きて、局つぼねに急ぎ入り

のやうなるもの、あやし
ききぬきたるか、いさにく
きたちぬぬかづきたるは、
おしたふしつべきこまこ
そすれ。いさやんごさなき
人のつばねばかりこそ、ま
へばらひあれ。よろしき人
は、せいしわづらひぬか
し。たのもし人の師を、よ
びていはすれば、そごも
すこしされなご、いふほど
に、そあれ。あゆみぬれ
ば、おなじやうになりぬ。

たるに、此は抑も如何に、宛然さながら糞虫のむしのやうな
る下賤げせんの男をとこの、見るも怖氣おちけい起つばかりなるが、
見すほらしき怪しげなる衣きぬを着て、起坐たちあがり舉動さうどう
の作法さほうだになく憎きが、佛前ぶつぜんに額ぬかづきたるは
押倒おしたふし蹴飛けぞばしもしたき程ほどの心地こころこそすれ。
それが己おのれに脊中せなか合あなごになりて寄り觸ふるも
のを、心づきなきこと限りあらめやも。尤も
高貴かうきの人の局つぼねの前まへばかりは、此等これら下賤げせんの者ものを
追おひ拂はひあれど、唯ただ上流じやうりゆうの人ひとと言ふのみな
る我等われらの前まへは、然さまで人も無なげに制せいし拂はひも
ならざれば、萬事まんじを打ち任せある宿坊しゆくぼうの法師ほうし
を呼よびて、前まへに群むららぬべく制せいせしむるに、其

【百五十六】 いひにくき
人のせうそ、仰せ言など
のおほかるを、ついでさま
に、はじめよりおくま
で、いさいひにくし。返事
又申にくし。はづかしき人
の、物おこせたるかへりこ
さ。おさなになりたる子
の、思はずなる事きよつけ
たる、まへにてはいさいひ

處ども少し退けなど言へる時のみ、追ひ拂は
るれど、法師の歩み去りたる後は、又た始め
の始く群れ来る状の、如何にも心づきなき業
なりかし。

【百五十六】 言ひにくきもの
人の文して消息し來れる一伍一什、さては中
宮よりの仰せ言の多きなどを、順序違へず整
然として、始より終までを言ひ述べんことは
難き業なり。其の返事も、亦た同様に言ひ難
し。或は心耻かしき人より、物を贈り呉れた
るは、何と答へんやうもなく言ひにくし。又
た成人したる己が子の、思ひがけもなく男女

にくし。
四位五位は冬、六位は夏、
さのぬすがたなども、しな
こそ男も女もあらまほしき
事なめれ。家の君にてある
にも、誰かばよしあしをさ
だむる。それだに物見知た
る使ひ人ゆきて、おのづか
らいふべかめり。ましてま
じらひする人は、いさこよ
なし。

の情愛を解したるを聞き付けなどしたるは、
直接に親より意見を加ふることは、言ひ出し
にくきものなり。
四位の人は黒の袍、五位の人は緋の袍なれば、
共に冬の衣の色合に相應はしく、六位の藏人
は緑衫なれば、夏に相應はし。大方禁中に於
ける宿直姿なども、男にあれ女にあれ、其の
衣服を吟味して、品善くありたきものなり。
さては宮仕する所にては人目多くて、装束の
品定めなごすれど、一家の主として、己が家
に起居するは、誰も衣服の善悪を言ふ者なけ
れど、それとても物見分くる目利の使人なご

れこのつちにおりたるやうにて、たくみの物くふこそ、いさあやしけれ。新殿をたて、東のたいだちたる屋をつくるまで、たくみどもあなみで物くふを東おもてに出るで見れば、まづもてくるやおそきと、しる物さりてみなのみて、かはらけはついでつづきにあはせをみながつづけばおもしろ

の行きては、自が語り傳ふるものなりの況して朝廷などにありて、公の交際に立ち交る人などの、衣服の吟味もせて、品善からずあるは、此の上もなう口惜し。工匠などの職人が、食事をする風態は、さながら猫が地を匍ふやうなる状にて、最と怪しく見苦しきものなり。此の度宮中には、新殿の御造營ありて、東の對めきたる屋形を作るさて、大工左官などの職工ども、多く入り込み居れるが、此等が居並びて食事する状を、東面の端に出で、見るに、炊事掛の者等の運び來る物を、遅しと待ち兼ねて、先づ汁物

はふよりなめうと見るほどに、やがてこそうせにしか。二三人ぬたりしもの、みなさせしかば、たくみのさるなめりと思ふや、あなもたいなのことどもや。

物がたりをもせよ、むかし

を手に取るが早く、呼吸も繼かず飲み干して其の入物の土器は、そこら邊りに突き据る置き、次には飯に合せ食ふべき菜を、皆食ひ盡したれば、さては飯は不用にて、食はざるにやと見てあれば、案に相違の不用なるは措き、瞬く間に夫れも悉く食ひ盡せり。是其處に並び居たる唯だ二三人の者の爲せる状なれど、斯くては總ての工匠も、皆然あらんと思はるゝよ。今少し作法もあるべきものを、斯る食ひざまなるは、實に勿体なき事ならずや。唯だ雑談に耽ける時にても、亦た昔物語など

物がたりもせよ、さかしらにいらへうちして、こそ人ごものいひまざらばす、人いさにくし。
ある所に、中の君さかやいひける人のもさに、君達にはあらねども、其心いたくすきたるものにははれ、心ばせなごある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみしうてりておもしろきに、名残おもひ出られんこ、こののはをつくしていへるに、今はいぬらんこ、遠く見おくるほごに、えもいはずえんなるほご也。出るやうに見せてたちかへり、た

する時にても、話する本人を差し置きて、傍らより賢げに受け返答などして、餘計なる言ひ紛らはしする人こそ、最と憎きものなれ。
或る所に、一の君、中の君、三の君と言ふやうに、三人の姫君ありけるが、其の名は知らねご中の君の許へ、通ふ人のありけり。そは攝家大臣などの子息なる歴々の公達にはあらねご、才學もあり、風流雅美の心がけ深しとの評判も高くて、思ひ遣りも浅からぬ人なるが、九月の頃、彼の中の君の許に行きたるに、其の歸るさの曉の景色は、有明の月いみじう照りて、面白き言はん方もなければ、尙ほ名

てしごみあいたる陰の、かたにそひ立て、猶ゆきやらぬさまも、いひしらせんと思ふに、有明の月のありつゝも、うちいひてさしのぞきたるかみの、かしらにもよりこす、五寸ばかりさがりて、火さもしたるやうなる月のひかり、もよほされて、おどろかさるゝ心ちしければ、やをらたちいでにけりさこそかたりしか。

残を惜まんとすれど、時遅れば人目もありとて、女の促し歸さんとするを、さまざまに言葉盡して、暫時居止まらんと言へど、今は歸り給へとて送り出し、遠くなるまで跡見送る状の、得も言はれず艶なる姿の、月に映えたるも面白かるべし。さて一旦立ち出でたる男は、歸り行きたるやうに見せて、實は再び立ち戻り、立部の開きたる所に寄り添ひて、其の蔭に身を立ち隠し、未だ歸り行かざる由を言ひ知らせんとて、言ふべき機会を謀る時しも、中の君の聲して、「長月の有明の月のありつゝも君し來まさば我れ戀ひめやも」と言

へる拾遺集の歌を吟じつゝ、立部の開きたる所より、月の景色を差し覗きたるが、月は女の頭の髪を照らす迄も射し込まで、猶ほ五寸ばかりを隔てたれど、其の光は火を點したらんやうに明ければ、夜の明けたるにかと思はれて、さては人目を憚るぞと驚かざる、心地しければ、名残惜しくも立ち出で、徐ろに我家を指して歸りしとなん、其の人の我に語りければ、斯くは書き記しつゝ。

へる拾遺集の歌を吟じつゝ、立部の開きたる所より、月の景色を差し覗きたるが、月は女の頭の髪を照らす迄も射し込まで、猶ほ五寸ばかりを隔てたれど、其の光は火を點したらんやうに明ければ、夜の明けたるにかと思はれて、さては人目を憚るぞと驚かざる、心地しければ、名残惜しくも立ち出で、徐ろに我家を指して歸りしとなん、其の人の我に語りければ、斯くは書き記しつゝ。

かひわちほの、例のうしよ、見も、心もさまにはうちいひて、いまだうはむりうつも、あなうたてはおぼゆかし。をの、ごもなごの、物むつかしげなるけんきに、いかでよふけぬさきに、おひてかへりなんさいふは、なほ主の心おしはかられて、さみの事なりさ、又いひふれんさもおぼえず。なりさほのあそんの車のみや、夜なかあかつきわがす人ののるに、いさゝかさる事なかりけん、よくぞをしへならはせたりしか。道にあひたりける女車の、ふかき所に

快く言ひて貸し呉れたるは、真に嬉しきものなるが、夫に引き替へて、牛飼の童が、例よりも牛を言ひ下も憎みて、甚く打ち懲らしなごして酷使するは、車を借りたる我に對して、それとなう情なく當るにやとも思はれて、心もどなく覺ゆるぞかし。然のみならず車副の男なども、物迷惑なる容子にて、早く車を驅りて、夜の更けぬ間に、牛を追ひて歸り來んなご、慎みもなう煩はし氣に言ふなるは、さても快く貸し呉れたる彼の主人の真意も疑はれて、此の下僕ありて此の主人あるものか、陽には言葉を飾れども、腹には劍ありと推し

おもしろいれて、えひきあげ
で、うしかひのはらだちけ
れば、我が従者してうたせ
さへしければ、まして心の
ままに、いましめおきたる
に見えたり。

測られて、今後は如何なる急用ありとも、再
び彼の人の車を借りたしとは、申し出さじと
こそ心を定めつ。れさるにても高階業遠朝臣
の車のみは、夜半であれ、曉であれ、時を擇
ばず人の借り乗るに、牛飼の童も、車副の男
も、露いさ、かも物厭はしき氣色なきは、朝
臣の訓陶其の宜しきを得たるに依るなり。然
のみならず、途中にて出會ひたる女車などの
深き窪に陥れて、押せども牽けども上らばこ
そ、牛飼の腹立ちて、焦躁にあせるを見ては、
朝臣は己が従者に命じて、其の女車の牛を打
ち追はせて、窪所より引き上げさせたる程の

すきくしくて獨すせする
人のよるはいづらにありつ
らん、曉にかへりて、やが
ておきたる。まだれふたげ
なるけしきなれど、すまり
さりませ、すみこまやかに
おしすりて、こまなしびに
まかせてなごはあらず、心
さめてかく、まひろげす
がたをかしく見ゆ。しるき
きぬごものうへに、山吹く
れたるなごをぞきたる。し

情深き人なれば、況して牛飼なごを、心のま
に誠め教へられたるものと見えて、此の主
ありて此の下僕あるにぞと思はる。
獨住居する男の、而かも多情にして妻をも定
めざるが、夜は何處に寝泊りたるにや、曉に
なりて歸り臥し、即がて起きたるに、未だ眠
たげなる氣色なれど、殊勝にも硯引き寄せ、
叮嚀に墨磨りて、女への文を書くに、唯だ言
ふべき事もなくて書き散らさん文とは違ひ、
いと心を用ひて書きつゝあるが、打ち廣で
りたる姿の、衣紋さへも繕はぬ状こそ、可笑
しく見ゆれ。其の裝束は、白き衣などの上に

るきひとへの、いたくしほ
みたるをうちまもりつゝか
きたてゝ、前なる人にもこ
らせず。わざとだちて、こ
ごれりわらはのつきづきし
きた、身ちかくよびよせ
て、うちさゝめきて、いぬ
るのちも久しくながめて、
經のさるべき所々など、し
のびやかに口すさびにしぬ
たり。おくのあたに、御て
をうけゆるなごして、その
かせば、あゆみ入て、ふづ
く云におもかゝりて、文を
ぞみる。お見え名かりける
所より、おもすんしたるも
いさをかして手あらひて、

山吹紅なごを着たるが、女の許より借りて
歸りしにもやあらん。何事かを思ひ運らしつ
ゝ、傍に挿しある白き一重の花の、咲き萎み
たるを見守りながら、即ち書き終りたる文
を、深く人には忍びたる狀にて、前に控へ居
たる人にも手渡しせず、殊更に年未だ若き小
舎人の、文の使に似合はしきを身近く呼び寄
せて、小聲にて何事かを言ひ聞かせ、其の文
を手渡ししたるに、小舎人が持ち行きし後まで
も、久しう其の跡を打ち眺めて、物思ひに耽
り居たるが、然る程に、御經の然るべき所々
なごを忍び聲にて口誦み居たりしを、奥の

本はまばかりちさき、
はをすそちにはむ。まごど
本心は、おふときほぼに
ちかき所なるべし。あ見の
かつかひ、使うちけよばめば、お
さよみさして、返事に心入
るこそ、いさほじけれ。
おもすんしたるも、いさを
かして手あらひて、

方にて此の家の人々、御手洗水を整へ、朝餉
の粥など用意して、早や召せと徳憑かせば、
奥へ歩み入りて済ませつ。再び出で來りて文
机に凭り懸り、書物繕きて見なごしつるに、
面白くて快心の所に至れば、興に乗じて獨り
打ち誦じたるも可笑し。斯くて彼の山吹紅な
ごの衣を脱ぎたればにや、手など洗ひて、唯
だ直衣ばかりを着て、指貫も穿かず、又も机
に凭りて、古人の録賦なごを、誦んじ讀むな
ご、眞實に床しくもあり、貴くもある程に、
彼の文持たせ遣りたるは遠からぬ所なるべ
し。早や小舎人の歸り來れるが、今しも誦ん

きよげなるわかき人の、なほしも、うへのきぬも、かりぎぬも、いさよくて、きぬがちに袖ぐらあつく見えたるが、馬にのりていくまゝに、さもなるをのこ、たて文を、目をそらにてさりたるこそをかしけれ。

前の木だちたから庭ひるき

以讀める最中なれば、聲は懸は得で、唯だ氣色に夫れと見すれば、不圖讀み止めて、返事を取り上げ、熱心に披き見入れるこそ可愛げなれ。

容貌秀麗なる若き人が、直衣姿にもあれ、袍を着たるにもあれ、又は狩衣にてもあれ、最と清く美はしうて、下襲の幾重にも袖口厚く見えたるが、馬に乗りて大路を行くまゝに、其の供なる男の、堅文を目も空に高々と、頭の上に捧げ持ちて、馬の後より尾き従へるこそ可笑しけれ。

前栽の木立もの古りて最と高う、趣致幽雅に

家の東南のかうしごもあげわたしたれば、涼しげにすきて見ゆるに、もやに四尺の几帳立て、前にわらうたをおきて、三十餘ばかりの僧の、いさにくげならぬが、うすすみの衣、すう物のけさなど、いさあさやかにうちさうぞきて、かうぞめの扇うちつかひ、せんじゆだらにのみみたり。ものゝけにいたうなやむ人によ、うつすべき人さて、おほきやかなるわらはの、かみなごうるはしき、すゞしのひさへ、あざやかなるはかま、ながくきなしてぬき

して庭廣き家の、東南の格子を上げ渡したる夏景色は、如何にも涼しさうに透きて見ゆるに、母屋には四尺の几帳を立て、其の前には圓座を敷き置きて、年の頃三十路餘りの験者の僧の、人品骨柄の憎げならぬのが、薄墨染の衣、羅の袈裟と言ふ最と鮮麗なる装束にて淡紅に黄を帯びたる丁子染とて、之を香染と言ふなるが、斯る染色の地紙の扇を打ち遣ひ、千手陀羅尼經を讀み居たり。さては此の家の人にて、物の怪に甚く悩む者のあるにや、其の讀める經文は、若し家内に大悪病に逢ひ、百怪競ひ起り、鬼神邪魔其の家を耗亂するに

り出で、ふささまにたてた
る三尺の几帳のまへにゐた
れば、ささまにひれりむき
で、いさほそくにほやかな
るごころをさらせで、なご
目うちひさきて、いむたら
にもいさたふさじのけそ
の女房あまたぬで、つごひ
まらへたりぬ、久しくもあ
らで、ふるひ出ぬれば、も
ごの心うしなひで、おこな
ふまよにじたがひ給へる護
法も、げにたふさじのせう
このうちききたる、ほそ冠
者さもなごのうしろにゐ
て、うちはずるも有り。み
なたふさがりてあつまりた

も、千眼大悲の像の前に其の壇を設けて、至
心に觀世音菩薩を念じ、此の陀羅尼を誦じて
其の千遍に満たば、惡事悉く消滅せん」と言
へる一節にてありき。斯くて其の物の怪を移
し取らん爲めの童女が、年齢こそ若けれ、大
なる體軀して、髪美はしく生絹の單衣に、鮮
麗なる袴を長く着なして、奥の方より膝行り
出で、横さまに立てたる三尺の几帳の前に
慎ましげに控へ居たれば、彼の加持する驗者
は、外さまに我身を振り轉りて、其の童女に
差し向ひ、いと細くして艶めきたる獨鉗を授
け持たせて、「を、しを聲を張り上げ、皆を引

を、例の心なれば、い
はば、つばしさまは、ん。
づから、はくろしからぬ事
しりながら、いみじうわ
なげきたるさまの心ぐるし
さを、つぎ人のしり人なご
は、うたぐおぼえて、几
ちやうのほさちかくゐて、
きぬひきつくるひなごする
ほごほもるしごて、御ゆ
なご北おほてに、りつごほ
ごなごも、わかし人々は心も
ら、いそいでくるや、ひさ
つなごきおほに、うすい
のまなご、おほなご、りるは
お所す、いささまげせり

きたて、満身に力を籠め、其の童女を尼目
に睨めつ、千手陀羅尼を聲限り根限り讀
状は、最と貴くぞ見ゆる。其の傍には、賤し
からぬ女房達多く集ひて、物の怪退散の様子
如何にと、固唾を呑みて見守り居たるが、間
もなく物の怪の移り現はれて、彼の童女わな
なくと震ひ出でたる状の、夢か現か將た幻か
今は本心を失ひて、生氣の沙汰とも見えす、
驗者が加持を行ふまゝに従ひて、護法の靈驗
著く顯はれ來たれるこそ、實に貴とけれ。斯
くて驗者は、湯氣を立てんばかりに汗を流し
て、尙し護法を續くるものから、物の怪に惱

るの時にぞ、いみじうござ
わりいばせなぞしてゆるし
つ。きちやうのうちにごこ
そ思ひつれ、あさましうも
いでにける哉、いかなる事
有つらんぞ、はづかしがり
て、かみをふりかけて、す
べり入ぬれば、しばしごま
めて、かちすこしして、い
かにさばやかに成り給へり
やさて、うちふみたるも恥
かしげや。しばしさふらふ
べきを、時のほごにもなり
侍ぬべければと、まかり申
て出るを、しばし、ほそち
はうたうまゐらせんなごご
いむるを、いみじういそげ

める女の兄人にて桂着たるが、元服し冠した
る少年どもの後に居て、團扇もて験者を扇ぎ
なごせり。さても斯る貴き加持護法を見んと
て、人々の集ひ居れる中に、此の童女の生体
もなき亂れ姿は、若し本心ならば如何に耻ぢ
惑ふらんぞと思はる。尤も此の童女の苦悶す
るは、加持の爲めに調せられたる物の怪の搔
き苦めるにて、童女自からの上ならずとは、
皆々知りながらも、いみじう佗び嘆きたる状
の、如何にも心苦しなるを、物の怪に惱め
る本人の知人などは、此の童女を痛はしく思
ひて、几帳の許に寄り行きて、其の亂れたる

ば、所につけたる上らふご
おぼしき人、すのもごにあ
さり出て、いさうれしくた
ちよらせ給へりつるしるし
に、いさたへがたく思給へ
られつるを、只いまおこた
るやうに侍れば、返すく
よろこびきこえさする。あ
すも御いさまのひまには、
物せさせ給へなごいひつ
ゝ。いさしうれき御ものゝ
けに侍めるを、たゆませ給
はざらむなんよく侍べき、
よろしく物せさせ給ふなる
をなん悦び申侍るご、詞す
くなにて出るは、いさたふ
さきに、佛のあらはれたま

衣を繕ひ遣りなごする間に、物の怪も全く去
り、今は快復したりとて、さて御湯なご急ぎ
て、北面なる臺所に命じ遣りなごすれば、臺
所番の若き女房などは、物の怪去りたりと聞
けど、猶ほ心もとなさに、様子如何にと見ま
ほしくて、御湯を載せたる盤も引き提げなが
ら、急ぎ慌て、出で來なごしつ。彼の惱める
本人の女はと見れば、清げなる單衣に、薄紫
などの裳を着けて、病人とは言ひながら、此
の家の人々の行き届きたればこそ、其の衣も
裳も萎へかゝりなごせず、最と清らかなるは
嬉し。斯くて申の刻になりて、験者は童女に

へるこそおぼゆれ。

向ひて嚴に、物の怪の降伏退去すべき由を言はせて放免し、茲に始めて加持護法の一段落を告げ、童女も亦た始めの正氣に還りたるに、さても我ながら驚き呆れて言ふやう、あな淺ましきの事かな、几帳の内に唯だ一人居たる事と思ひしに、斯くも多くの人々の中にありつらんとは夢にも知らず、如何に悶躁きて此處までも出で來し事ならん、本心を失ひつる程に、如何ばかり見苦しき事ありしをも覺えずとて、甚く耻かしがりて、額髪にて顔面を隠しながら、奥の間指して退り入るを、驗者制して、暫時待たれよと引き止め、又た少し加

持祈禱して、さて是にて事終れり、如何に爽快になり給へりやと言へば、童女の打ち微笑たるも耻かし氣なりしよ。斯くて驗者は、此の家の主人、さては惱める女の兄人などに打ち向ひ、尙ほ暫時侍り居るべき筈なれど、最早例の勤行の時にも近づきたれば、是にて暇つかまつらんとて出で行くを、人々暫時と押し止め、切めては熟瓜なりとも、さては麵類なる餛飩なりとも差し上げたければ、御急ぎには侍るべけれど、御迷惑ながらも暫時の程と犒へど、驗者は甚く歸りを急げば、高貴なる所に屬き従へる上臈と覺ばしき人、簾の許

に膝行り出でて来て挨拶するやう、嬉しくも貴
僧の立ち寄り給へる効験にて、甚く堪へ難く
惱み給へる病人も、唯今は物の怪の絶え去り
て、苦悶も怠れる撫梅に侍れば、かへすん、
も御禮を申し述べさふろうなり。御急ぎとあ
れば、今日は無理には御留め申すまじ、明日
にても御暇の節、立ち寄り給はれかしと言ふ
を、驗者は其の厚意を謝しつゝ、さても最と
執拗き御物の怪に侍れば、唯今御快氣なりと
も、ゆめ御油断あるべからず、今日の加持に
て、少しは効験あらせられたるを、我も御同
慶申すとなん、言葉少なに答へて出で去きた

るこそ、最と貴くて、佛の再現かとも思はる
程なりしよ。

きよげなるわらはのかみな
がき。またおほきやのなる
が、ひげおびたれど、おも
はずにかみうるはしき。又
したゝかにむくつけとなる
などおほくて、いさなげに
て、こゝかしこにやんごこ
なきおぼえあるこそ、法師
もあらまほしきわざなめ
れ。おやなぎ、いかにうれ
しからんごこそ、おしはか
らるれ。

僧家に召し使ふ小童子の、髪かみの長ながき者ものなど。
又は大童子にて髻ひげなどは有ありながらも、思おもひ
外ほかに髪かみ美みしき者ものなど。或あるは甚はなはたしく恐おそろしげ
なる男をとこなど、許多あまたの内衆うちしゅうありて、而しかかも主あるしの
僧そうの片時せいたときも餘暇ひまなき程ほどに忙いそがしくて、此處ここより
彼處かしこより、驗者けんじやとして又た學匠がくしやうとして、請せうじ
招まねかれ、貴顯きけんの御覺おんおぼえ芽出めでたかるこそ、人ひとは
木きの端はしのやうに言いふ者ものもある法師ほうしなれど、
斯かく四方しほうより持もて囃はやされては、法師ほうしも穴勝あながち
悪わる業わざにはあらで、却かへりて法師ほうしたらまほしう

【百五十七】 見ぐるしき

きぬのせぬひ、かたよせてきたる人。又のけくびしたる人。下すだれきたなげなる上達部の御くるま。れいならぬ人のまへに、子をわていきたる。はかまきたるわらはの、あしだけきたる、それはいまやうのもの也。つばさうぞくしたる物の、いそぎてあゆみたる。

覺えらるゝになん。斯る時めきたる法師を手に持てる親の心は、如何に嬉しかるらんとこそ、推し量らるれ。

【百五十七】 見苦しきもの

衣の脊筋の縫目を中央にして着たるこそ通常なれど、之を片寄せて着たる人などは、自からは心付かぬなるべけれど、外の見る目の見苦しきものなり。又た仰領とて、衣の領を脊に下げて、仰様に着たるは、仰襟とも仰衣紋とも言ふなるが、斯る着ざまは女さへ見苦しければ、男は更に言ふ迄もなき事なり。或は上達部とも言はるゝ、貴人の御車の、御簾に懸

法師陰陽師の、かみかうふりしてはらへしたる。又色くろうやせ、にくげなる女の、かつらしたる、ひげがちにやせくなる男、ひるれしたる、何の見るかひにふしたるにかあらん、よるなごはかたちも見えす、又おしなべてさる事となりたれば、我にくげなりさて、おきあるべきにもあらずかし。つごめてさくおきいぬる、めやすし。夏ひるれしておきたる。いさまき人こそ、今すこしをかしけれ。えせかたちは、つやめきればれて、ようせず

けたる下簾の汚げなるは、身分にも似合はで見苦しく。例になく病み煩ふ人を見舞ふに、幼兒を連れ行きたるは、心なき業にて、病人の枕元をも憚からず、無遠慮に騒ぎ廻るなどは、見苦しくも亦た淺ましかるべし。又た袴を着けたる童子の、沓を穿かで足駄穿きたるは、見苦しく、今の世に洋服を着たる男の、高下駄穿きたると好一對にて、昔は然る風習もなかりしかど、何時の世にも、其の時代々々の當世風なるものありと見えたり。又た窄装束して、市女笠に薄絹着たる女が、しづしづと歩む程なるが宜しきに、何事を急ぎ足し

は、ほうゆがみもしつべし。かたみに見かけしたらんほどの、いけるかひなさよ。色くろき人の、すしひさへきたる、いさ見ぐるしかし。のしひさへも、おなじくすきたれど、それはかたげにも見えす、ほそのさほりたればにやあらん。

で、駈け行くやうに歩めるこそ見苦しけれ。或は法師陰陽師とて、法師ながら陰陽師の業なごして、佛にも事へ神にも事へて、紙冠を着て被ひ浄めなごしたるは、見苦しきも見苦し。宇治拾遺物語に、寂心上人播磨の國にて、法師陰陽師の紙冠を着て被するを、何の爲めに紙の冠などを着しぞと問はれければ、被戸の神々は法師の圓顛を忌み嫌ひ給ふものから、唯だ被する間のみ暫く着て待ると言ふに、上人其の紙冠を取りて引き破り、たとひ被戸の神々が憎み給ふとも、佛弟子にてありながら、如來の忌み給ふ事なるを、暫時にて

さしつけしは、いけるかひなさよ。色くろき人の、すしひさへきたる、いさ見ぐるしかし。のしひさへも、おなじくすきたれど、それはかたげにも見えす、ほそのさほりたればにやあらん。

も禁を破りて、無限地獄の業をするは、其の由あるべからずと制し給ひけるとなん。さてこそ法師陰陽師が、紙冠して被したるは見苦しきものなれ。又た色黒く肉瘡せて、見るさへ憎げなる女が、其の髪も悪く短ければ、髪鬢して容子作りたれど、謂ゆる狝猴にして冠するの類にて似付かざれば、見苦しきこと限りなし。或は髭がらにて、而も甚く瘦せたる男が、夜も明けて日も差し上りたるに、尙ほも寝て居る状の見苦しく、骨張りて見憎き髭男の、何處に見る甲斐ありて、晝さへも女の添ひ臥したるにかあらん。夜などは容貌も見

えねば、然まで憎しとも思はれざるべく、又た世間を通じて夫妻同衾の習なれば、人も敢て怪む者もなく、既に夫妻たるからは、夫の容貌醜しとて、夜中眠りもせで起き居るべきにもあらねど、醜くからぬ男さへ、曉には歸り行くものを、況して然る男は、いと朝早く歸るこそ見易けれ。晝も尙ほ寝たらんは、見苦しきこと如何ばかりぞや。さても此處に男の歸り行くと言ふは、當時の風習として、夫妻同棲するは稀にて、男より女の家に通ふを常としたれば、其の心して此の書物を讀まねば、誤り解せらるゝ所多かるべし。又た夏の

日、晝寢して起きたる顔は、寢呆げたるやうにて見苦し。尤も非凡なる美貌の女などは、却りて其の寢起き顔の見優りせらるゝものなれど、醜き貌の者は、男にても女にても、膏ざりたる顔の寢腫れて、悪くせば頬も歪み形にならんかし。斯る顔と顔と、男女互に見合はしたらん時、餘りの淺ましさに、此の世に生ける甲斐もなう思はざらめや。色黒き男女の、白の生絹の單衣を着たるは、最と見苦し。尤も紫菀單衣の紅色が、りたる衣も、下襲なぐては膚の透き通りて見ゆれど、尙ほ紅色に紛れて、其の人並ならぬ黒さも幾分は隠され

物くらうなりて、文字もか
いれずなりたり。筆もつか
ひはて、是をききばてば
や。此さうしは、目に見え
心におもふ事を、人やは見
んすると思ひて、つれなく
なるささぬのほごに、かき
あつめたるを、あいなく人
のためびんなきいひすぐし
など、しつべき所々もあれ
ば、きまうかくしたりとお
もふを、なみだせきあへず
こそなりにけれ。宮の御ま
へに、内のおまの奉り給

もすれ。白に黒にては、臍の邊まで透き見え
て、体裁悪きこと此の上もあるべからず。
さて此の草紙を書き續けたるに、今は夕暮
時の黄昏れて、文字も書かれざる程に暗うな
りたれば、筆の命毛のあらん限り使ひ盡して、
早く書き終らばやと、急ぎ筆を馳するになん。
元來此の草紙は、人の見るべき物ならんには、
慎みて差し控ゆべき記事も多からんを、人の
見ざるものと思ひ、又た見すまじき物と定め
たればこそ、目に見、耳に聞き、將た又た己
が心に思ひ浮べる事どもを、取捨撰擇もなう
唯だ里居の徒然なるに任せて、己れ一人の慰

へりけるを、これに何をか
まし、上のお前には、史
記といふ文をか、せ給へる
などのたまはせしを、枕に
こそはし侍らめさ申しか
ば、さばえよとて、給はせ
たりした、あやしきを、こ
よやなにやき、つきせすお
ほがる紙のかすを、かきつ
くさんせしに、いさ物お
ほえぬ事ぞおほかるや。大
かた是は世の中になかしき
事を、人のめでたしなご思
ふべき事、猶えり出で、哥
なごおも、木草鳥虫をも、
いひ出したらばこそ、思ふ
ほごよりはわろし、心見え

みまで、書き集めたるに過ぎざれば、中に
は人の噂なども書き記して、愛なく便なき事
ども、言ひ過したる所々もあるものから、尙
更ら深く秘め置きて、我ながら潔くも隠し終
せたりと思ひしを、案外にも不圖せし事より
世に漏れて、枕より又た知る人もなき戀を、
涙せきあへず、もじ、つるかな。古今集に
見えたる如く、枕より外に知る人もなき草紙
を、弘く人に知られたることの耻かしうて、
實に涙せきあへずこそなりにけれ。斯くなる
上は、最早愚痴を言ふとも詮なき業なれど、
素と此の草紙を書くに至りし由來を申さん